

いつかまた横浜で

社会人から歯科医師を目指して

露木 良治

付

現代版 走れメロス / 高増 哲也
医者と患者の関係論 / 菅井 敏行

医療タイムズ社

いつかまた横浜で

社会人から
歯科医師を目指して

露木 良治

医療タイムズ社



9784900933057

ISBN4-900933-05-8

C0095 ¥1238E

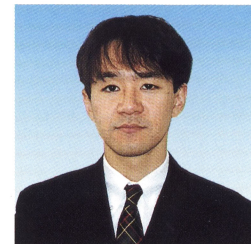


1920095012384

定価:1,300円(本体1,238円+税)



いつかまた横浜で



露木 良治
Yoshiharu Tsuyuki

いつか また横浜で

社会人から歯科医師を目指して

露木 良治

付

現代版 走れメロス／高増 哲也
医者と患者の関係論／菅井 敏行

医療タイムス社

いつかまた横浜で

— 社会人から歯科医師を目指して —

付 現代版 走れメロス
医者と患者の関係論

いつかまた横浜で
現代版 走れメロス
医者と患者の関係論 ● 目次

●いつかまた横浜で

プロローグ	………	7
第1章	歯科医学への憧れ	17
第2章	大学一年 信州歯科大学へ入学	27
第3章	大学二年 信州の遅い春	75
第4章	大学三年 専門科目への戸惑い	87
第5章	大学四年 森山の結婚	97
第6章	大学五年 臨床実習の日々	109
第7章	大学六年 国家試験に向けて	125
第8章	横浜へ	175
エピローグ	ダツカから	187
	註・参考文献	193
	あとがき	202

●現代版	走れメロス	205
	あながき	227	
●小説	医者と患者の関係論	231
	あながき	245	
●座談会	医者と患者の関係論	249
	註	263	
	あながき	265	

プロローグ

「池島、いい話があるんだ」

「えっ、どんな話？」

「今週の日曜日って、空いてるか？」

「たぶん大丈夫だと思うけど」

「横浜にあるラグタイムっていうライブハウス、知っているよな。実はちょっと急な話なんだけど、横浜に住んでいる神田大のバンド仲間の吉田から聞いた話で、ラグタイムに出演するバンドを募集しているっていう話なんだ」

「本当か？ラグタイムってかなり有名なところだろ？」

「その日にライブをする予定のバンドが急に都合が悪くなったっていう話なんだ」

「なんだ、一回かぎりか。でも、なんで僕たちに声がかかったんだ？」

「前に、吉田に『おまえの小さな手のデモテープを送ったんだ。そしたらすごく気に入ってくれて、ラグタイムの人に聴かせてくれたらしいんだ。それでラグタイムの人も気に入ってくれたらしくて、今回お声がかかったっていうわけなんだ』」

「そうか。そりゃよかった。でも、あのデモテープのピアノは打ち込みだぜ。どうす

る？」

「それが問題なんだ。おまえの小さな手をライブでやるならピアノは絶対必要だよな。だれかキーボード、いないかなあ」

「キーボードって、いそうでないんだよな。あつ、そういえば、さつきの会社の後輩にクラシックのピアノをやってる人がいたな。今晚さつきに聞いてみるよ」

「それじゃ、頼んでみてくれよ」

「わかった。杉名はあす、楽譜をコピーして会社を持って来てくれ。きょうさつきに電話させるから、もしオーケーだったらすぐにさつきに渡すようにするよ」

「練習は土曜日だけしかできないけど、なんとかなるか？」

「そうだね。僕らは問題ないから、あとはキーボード次第だな」

「もしだめだったら、僕たちがシーケンサーに合わせて演奏するしかないな」

「でも、それってかなり厳しいんだよね」

「どちらにしても、ラグタイムで一度やってみたいね」

「とにかく、さつきに聞いてみるよ」

「それじゃ、よろしく。僕はHonky-tonkのCスタを予約しておくよ」

「ああ、頼むよ」

*

「なかなかいい感じじゃないか。リズム感もしっかりしてるし…」

「そうだね」

「僕は気に入ったよ」

「俺もだよ」

「森山、おまえはどう思う？」

「あれだけ弾ければ十分だよ。さすがに『小さいころからずっとピアノを弾いてきた』
っていうだけのことはあるね。これで明日のライブはなんとかかなりそうだな」

「ごめん、ごめん。遅くなっちゃった。河合さん、なんとか電車で間に合ったみたい。

河合さん、『みなさんによろしく』って言ってたわよ」

「さつきさん、駅まで行ってくれてありがとう」

「いいえ。で、みんなで何の話してたの？」

「さつき、きょうはみんながおごってくれるってさ」

「えっ、本当？でもどうして？」

「あんなにうまいキーボードを見つけてくれたから」

「じゃ、いまから飲みに行くか」

「だめだめ、池島さん。あすは早いから、帰らなきゃ」

「そういえばそうだ。それじゃ、俺はさつきを送っていくよ」

「さつきさん、ありがとう。お疲れさま」

「ねえ、みんな、あすは遅刻しないでよ」

「はいはい、わかりました」

*

「さつきさんて、やつぱりドラムをやるだけあってパワフルだね」

「ほんとその通りだね。あんなに華奢きゃしゃなのにね。池島って、ああ見えてすっかり尻に

敷かれてるんだよね」

「まったたく！」

「ああ、僕も池島や森山みたいに彼女、ほしいよ。どうすればいい人が見つかるんだろう」

「河合さんて、結構感じよさそうだね。杉名と話、合うんじゃないか？」

「そうだね。感じいい人だね。森山もそう思う？」

「僕は関係ないけどね」

「たしかに。僕は森山と郁美さんの長い歴史をだれよりもよく知っているよ」

「考えてみれば、大学一年のときからだから、もう六年になるよ」

「それだけ続けば、たいしたもんだよ」

「どうだろうね。郁美もあすのライブに行きたがつてたんだけど、なんか学校の行事があるんだって」

「それは残念だね。せっかくラグタイムでやるのにね」

「さて、そろそろ僕たちも帰るか」

「ああ、それじゃ、お疲れさま」

*

「やっぱり、ラグタイムっていいね」

「なにしろ音がすごくよかったね。ステージのモニターもすごくよく聞こえてやりやすかったよ。さすがに有名なライブハウスなだけあって」

「そうだね。それに観客がたくさんいて驚いたよ。もともと、あの観客は私たちの次のバンドがお目当てのようだったけれどね」

「たぶんそうだね。でも、結構観客もノってくれたし、それにアンコールまでやったんだから、Blue Wing もたいしたもんだよ」

「あつ、森山さん、ベイブリッジが見える！」

「本当だ！」

「河合さんて、ベイブリッジに行ったことはある？」

「いえ、私、見るのも初めて。杉名さんは？」

「僕はベイブリッジができてすぐに来たよ。そのときはかなり混んでいたよ。みんな、橋の途中で車を止めて夜景を見ているんだ。すごくきれいだったよ」

「ベイブリッジって、まだ結構混んでいるみたいだけど、帰りに通ってみようか？そ

うすれば、そのまま高速に乗れるし」

「えっ、本当ですか？」

「私も行ってみたい！」

「さつきはこのまえ俺と来たばかりじゃないか」

「私が『行こう』って言ったんでしょ。『面倒くさい』って言ってたくせに、この人着いたとたん、私よりはしゃいじゃって」

「まったく、この二人は仲がいいんだか悪いんだか。それはそうと、この辺りって広くて人もいないね。森山、車止めて二次会しようぜ。題して、『Blue Wing アコースティックライブ』本牧埠頭」

「いいね」

*

「後ろの三人、寝ちゃったよ」

「朝早かったしな。杉名、あす仕事だろ？寝てていいよ。東名に入ったから、あとは静岡まですぐだ」

「ありがとう。大丈夫、起きてるよ。森山、話を聞いてくれるか？」

「いいよ。何でも話してくれ」

「僕は仕事を続けるか辞めるか、いまだに迷っている」

「杉名、おまえそんなに悩んでいるようなら、いまの仕事を続けるのは無理だな。何がいけないんだ？」

「うまく言えないけど、毎月いろんな目標があつて、月末の騒ぎが終わつたと思つたら、またすぐ次の一か月の心配をしなければならぬんだ。そりゃ、どんな仕事でも同じことの繰り返しは仕方がないのだけれど、いくら仕事をしても何か形に残るわけではないし、お客さんに感謝されるどころか、こここのところ失敗ばかりだし…、もう疲れたよ」

「で、どうするんだ。会社を辞めるのか？」

「まだわからないけどね。来年の三月までは勤めようと思つている。それで、話というのは、先週会社の歯科検診があつて、取引先の歯科医院に行つて来たんだ」
「むし歯がたくさんあつたとか？」

「小さいむし歯が一本だけあった。それよりも僕はなにしろ歯科医院に行くのって、十数年ぶりだったんだ。それで珍しくて、診療室の中にある器械や薬をきよろきよろ眺めていたんだ。そしたら院長先生がとても感じのいい人で、いろいろ説明してくれたんだ。僕はむし歯の治療をされるのはいやだけど、あの先生にだったら治療を受けたいなって思ったよ。谷口歯科医院っていうところなんだけど、また今度、話を聞きに行こうって思っている」

「まさか、『歯医者になる』とか言うんじゃないだろうな。杉名は僕と同じで理系の科目、苦手だろ？」

「でも、ちよつと興味があるんだ。もう一度大学を受験してみようかな」

「まあ、どうせ会社を辞めるんだったら、それくらいやってみろよ」

「そうだな……」

第1章 歯科医学への憧れ

河合さん

きのうはお疲れさまでした。帰りは渋滞で遅くなってしまう、ごめんなさい。ご家族の方は、河合さんの帰りが遅いので心配されていたことと思います。

今回のライブは急な話だったので、僕たち Blue Wings はキーボードをどうするか困っていましたが、河合さんにキーボードを弾いてもらって助かりました。おかげでなんとかライブを成功させることができました。きのうのライブは今年の夏のいい思い出になりました。ありがとうございます。河合さんは「ロックはあまり弾いたことがない」と言っていました。リズム感はあるし、とてもよかったですよ。また機会がありましたら、セッションしましょう。

東海電力のお仕事は忙しいですか。きのうの疲れは残っていないでしょうか。僕はまたきょうから静岡証券で仕事をしています。池島君もきのうの疲れも見せずに元気に仕事をしています。

さつきさんは河合さんの職場の先輩ですよ。さつきさんにもよろしくお伝えください。

それでは、失礼します。

一九八九年八月二十一日

杉名僚二

杉名さん

お手紙ありがとうございます。Blue Wingに誘っていただき、その上ライブハウスで演奏することができてうれしかったです。Blue Wingはとても素敵なバンドですね。森山さんのボーカル、池島さんのギター、さつき先輩のドラム、もちろん杉名さんのベース、どなたもとても個性的なのですが、バンドとしてとてもよくまとまっていると思いました。

私はベイブリッジを見たのは初めてでした。ライトアップされていて、とてもきれいでした。ベイブリッジには行って見たかったので、とてもうれしかったです。ありがとうございます。

それと、ライブが終わって横浜港で打ち上げをした際に、杉名さんがギターを弾いて森山さんが歌った「おまえの小さな手」はとてもよかったです。森山さんのボーカル

はとても素敵ですね。感動して思わず涙が出そうになりました。あの曲は杉名さんがつくった曲ですよ。とてもいい曲だと思います。詞も素敵です。杉名さんは森山さんと高校のときからずっとバンドをしているそうですね。すごくうらやましいです。私はそれほどロックのキーボードはできないのですが、また機会があれば Blue Wingに参加させてください。

一九八九年八月二十六日

河合律子

追伸 杉名さんにお願ひがあるのですが、あの日撮った写真ができましたら、焼き増ししてほしいのです。お忙しいところをすみませんけれど、お願いいたします。

河合さん

きょうの Blue Wing の練習、お疲れさまでした。メンバー全員が集まったのは夏以来ですね。学生時代とは違って、みんなそれぞれ別の職場で働いているので、バンドの練習ひとつにしても時間を合わせるのがなかなか難しいですね。

河合さんいまではすっかり Blue Wing のメンバーとうちとけましたね。僕にとっ



[写真1]練習スタジオのドラムセット

Blue Wingのメンバーは気の合う大切な友人たちです。だから Blue Wingはずっと続けたいと思っていました。でも、来年の四月から僕はBlue Wingの活動に参加できなくなりそうです。さつき河合さんにも少し話をしましたが、僕は来年の三月で会社を辞めようと思います。

きょうはまた谷口先生のところに行つて、いろいろお話を伺ってきました。谷口歯科医院に行つたのは、夏の検診以来、これで三回目です。僕は谷口歯科医院の担当だったわけではなく、その上、治療を受けに行っているわけで

もないのですが、谷口先生はいやな顔ひとつせず僕の相談に乗ってくれます。何回かお話を伺っていくうちに、なぜか話が合うなと思っていたところ、谷口先生は僕の高校の大先輩であることがわかり、そんなこともあって僕のことを心配してくれるようです。僕は谷口先生をととても尊敬しています。

僕は会社を辞めたあとどうするかについてまだはつきりと決めていませんが、谷口先生がなさっている歯科の仕事にはとても興味があります。そんなことを考えると、僕はこれから何年間か静岡を離れることになると思います。たぶん冬になると雪が降るところに行くことになると思います。ですから、今度買う車は四輪駆動のワゴンにしようと思います。

どこに行くか決まったら、連絡します。どこに行っても音楽は続けたいと思っています。それでは、また。

一九八九年十月八日

杉名僚二

追伸 先ほどさつきさんから聞きました。きょうは河合さんの誕生日だそうですね。二十二歳の誕生日、おめでとうございます。

「写真1」練習スタジオのドラムセット

静岡市内にある練習スタジオ、Jockey・JackのCスタジオのドラムセット。ドラムはYAMAHAのYD-8000、シンバルはZildjianのフルセットである。Blue Wingはいつも決まってこのCスタジオを借りて練習した。「おまえの小さな手」のデモテープも「こ」で録音された。

河合さん

つい先ほど信州歯科大学からハガキが届きました。信州歯科大学歯学部合格したことを告げるハガキです。自分でも信じられませんが、四月から僕はまた大学生になります。

ハガキを見て、真つ先に谷口先生に連絡しました。谷口先生はとても喜んでくれました。谷口先生からは「六年間は長いから、一緒に勉強する仲間を見つけてお互いに励まし合うことが大切だよ」という言葉をいただきました。これから僕は谷口先生のような歯科医師になることを目標にしてがんばります。

河合さんは信州へ行ったことがありますか。僕は東京会場で受験したため、信州歯科大学へはまだ行ったことがありません。そこで早速、来週あたり部屋を探しに信

州に行つてこようと思つています。どんなところかいまから楽しみです。

それでは、また。

一九九〇年二月十七日

杉名僚二

杉名さん

お手紙ありがとうございます。杉名さんが歯科大へ行くと聞いたときには驚きました。以前に、私のことを「まじめで努力家だ」と誉めてくださつてうれしかったです。杉名さんのガッツには到底かきません。

これからきつと苦しいことやつらいこともあるかもしれませんが、経験に勝るものはないと思います。杉名さん、新しい目標に向かつてがんばってください。

信州はきつと静岡とは気候も違いますよね。お体に気をつけてください。
では、また。

一九九〇年二月二十二日

河合律子

河合さん

きのうは僕のためにわざわざ集まってくれてありがとうございました。河合さんや、それに池島君、さつきさんも来てくれて、とてもうれしかった。みんなからいただいた紺色のトレーナー、とても気に入りました。大切にします。

せっかく河合さんと知り合いになったのに、六年間静岡を離れるかと思うと寂しい気がします。でも、休みになったら静岡に帰って来ます。そのときにはまたみんなでセッションしましょう。

僕は音楽をやりたくてうずうずしています。向こうに行ったら軽音楽部に入ります。今度会うときまでに新しい曲をつくっておきますので、楽しみにしていてください。静岡に帰るときには連絡します。それでは、また。

一九九〇年三月三十一日

杉名僚二

第2章 大学一年

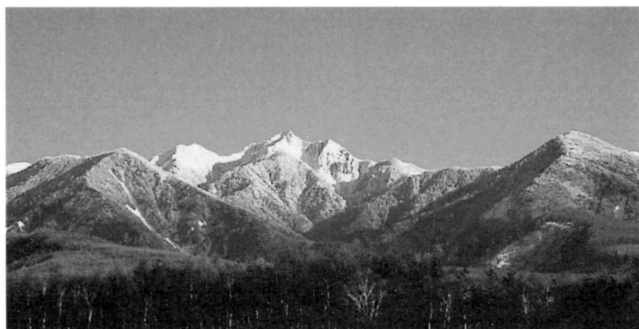
信州歯科大学へ入学

河合さん

梅雨の季節になりましたね。静岡はどんな天気でしょうか。ここ信州は梅雨にもかかわらず、ほとんど雨らしい雨は降りません。しかし、一日の寒暖の差が激しいところで、日中は暑くても朝晩はぐっと気温が下がります。

住めば都かどうかはわかりませんが、だいぶこの田舎での暮らしにも慣れてきました。僕にとって信州は何番目かの第二の故郷になりました。海が近い静岡で生まれ育った僕にしてみると、東京もそうでしたが、海がないのが少し残念です。しかし、近くに諏訪湖があるのでそれがいまの僕にとって海の代わりです。それに信州は諏訪湖だけでなく、たくさんの美しい自然に恵まれています。僕が住んでいるところはとりたてて観光地というところではありませんが、周囲を山に囲まれており空気がとても澄んでいるので、朝夕、山の稜線がとてもきれいです。夜でも山のシルエットがはっきり見えます。

ここは郷原宿という古い街道沿いなので、周囲には百年以上たっているとと思われる古くて大きな家が並んでいます。民家は街道沿いにあるだけで、その周囲にはぶどう



[写真2]信州の山々（八ヶ岳）

畑が広がっており、信州にしていることを実感します。この辺りの建物は本棟造りと呼ばれる特徴のある重厚な造りの建物です。僕のアパートの向かいにある民家などは、文化財に指定されそうなくらい古くて立派な建物です。その隣にある郵便局は比較的新しいのですが、周囲の建物に合わせた感じの建物で好感がもてます。

ここ信州では、部屋代がとても安く、都内に比べればただみたいに思えます。僕はいま都内では考えられないような安くて広い部屋（七畳、四畳半、キッチン六畳、バス、トイレ、駐車場つきで月四万五千円）に一人で住んでいます。しかも広丘駅から歩いて五分と交通の便もよいところです。アパートの水道は地下水をポンプで汲み上げたものなので、おいしい水が飲めます。アパートの正面には小さな森があり、その中に

は小さな社があります。そこは夜になるとフクロウが鳴きます。森の南側にはブランコがある小さな公園があり、森と公園の間には小さな川が流れています。その小川の水はとても澄んでいます。

アパートから大学までは約三・五キロメートルあります。大学は駅から遠いし、バスも本数が少ないので、僕は車で通っています。僕のアパートから大学までの間に信号は三個所しかなく、また朝晩の渋滞もないので通学はとても快適です。

休みの日には友人とよく松本市に出かけます。松本市は日本アルプス（註1）の玄関口にある人口約二十万人の町です。市の中心部を女鳥羽川めとばが流れ、中町通りという蔵造りの建物が立ち並ぶ一角があるなど古い町並みが残っており、かつて城下町として栄えたことをしのばせるとも美しい町です。旧開智学校という明治時代の小学校や、旧制松本高等学校の建物がある、あがたの森なども有名です。どこかゆつたりとしている町です。

僕の住む塩尻市から松本市へは車で二十分ほどです。国道を通っていく方法と奈良井川沿いの道を通っていく方法がありますが、僕は奈良井川沿いの道のほうが好きで

す。その道は川の土手を利用したもので、車が一台やつと通れるだけの広さしかありませんが、渋滞する国道を避けるための抜け道として利用されています。その道の両側には、小さな反射板が一定の間隔で立つており、夜になると車のヘッドライトに反射して光り、幻想的な光景となります。そのため、信州歯科大学の学生たちからは「ギヤンドル・ロード」と呼ばれており、ドライブするには最適の道です。河合さんは、ドライブは好きですか。今度、河合さんにもこの光景を見せたいと思っています。

僕は信州での生活がとても気に入りました。こんなところが僕の近況です。
乱筆乱文にて失礼します。それでは、また。

一九九〇年六月十一日

杉名僚二

〔写真2〕 信州の山々（八ヶ岳）

信州には美しい山がたくさんある。そのひとつである八ヶ岳は、長野県と山梨県の県境に位置する標高二八九メートルの山である。塩尻からは約三十キロメートルで、中央道を使えば八ヶ岳のふもとの小淵沢ICまで約三十分弱、小淵沢ICを降りると清里までたいして時間はかからない。信州歯科大学の学生にとつて、清里や軽井沢は身近な観光地であり、杉名たちは大学一年生のころ、清里や軽井沢まで何度かドライブした。（写真撮影 伊藤嘉治氏）

河合律子様

前略 河合さん、お元気ですか。僕は自分よりも七歳年下の同級生たちと一緒に
なつて信州歯科大学で一般教養からやり直しています（註2）。最初は周囲に溶け込める
かどうか不安でしたが、そうした心配は不要でした。同じクラスの土橋君や中林君、
ほかのクラスの川崎君、桑田君、榎原さんなど、入学してすぐに何人か友人もできま
した。一学年百人足らずの小さな大学なので、和気あいあいとした雰囲気です毎日講義
を聴いています。それと、またベースを弾きたいと思ひ、軽音楽部に入部しました。
軽音学部に入ってから縦のつながりもできたので、早速先輩から講義や試験の受け
方などを教えてもらいました。

さて、いまは中間試験の最中です。きょうは難関といわれる生物の試験がありまし
た。試験がひとつ終わったので、一息ついていきます。でも、独語の試験が十一日にあ
るので、のんびりしてはいられません。きょうの生物はデマにまどわされ、見当外れの
ことをやってしまったので結果が不安です。理系の大学の厳しさを実感しています。

静岡証券で三年間働いている間に、学生時代に学んだ知識だけでなく、試験を受け



[写真3]「信州歯科大学」のモデルになった松本歯科大学

るコツのようなものも忘れてしまいました。それに加えて、もともと僕は理系の科目は苦手なので、この夏は高校の参考書あたりから見直しをしなければいけないと思っています。それにしても、昨年はあるかないかわからないような短い夏休みだったのに対し、今年は一か月間も夏休みがあるということに少なからず違和感も感じています。

河合さんはどんな学生生活を送ったのでしょうか。いつか聞かせてください。

きょうはハガキにて失礼します。では、
また。
草々

一九九〇年七月二日

杉名僚二

〔写真3〕「信州歯科大学」のモデルになった松本歯科大学

松本歯科大学は周囲をびどう畑やりんご畑に囲まれた小高い丘の上にある。大学までのなだらかな坂道の両側には、多くの桜の木が植えられており、桜の名所となっている。松本歯科大学は学生数約六百人、歯学部のみ単科大学である。大学の屋上からは日本アルプスが一望できる。(写真提供 松本歯科大学)

河合律子様

暑中お見舞い申し上げます。

河合さん、お元気ですか。僕は四か月ぶりに静岡に帰ってきました。静岡に帰る前、久しぶりに都内に寄ってきました。都内では信州歯科大学の友人である桑田君の実家に泊めてもらいました。桑田君はギタリストで、僕と同じく軽音楽部の部員です。僕は彼と「Misty Road Crew (MRC)」というバンドを組んでいます。といっても、まだメンバーは二人だけなので、ドラムスとボーカルを探しているところです。

彼も僕も街を歩くのが好きで、久しぶりに渋谷の雑踏を歩いたのですが、二人とも人をよけて歩くのが下手になっていました。それにしても都内は暑いです。かつて都

内でエアコンなしに暮らしていた神田大学時代の自分が信じられません。信州の気候に慣れてしまうと、都内も静岡もとても暑く感じられます。

きのうは谷口先生のところにあいさつに行つて来ました。谷口先生はとても歓迎してくれて、学生時代の話を僕に聞かせてくれました。谷口先生は僕の父よりも少し年上で、戦後間もなく学生生活を送つたそうで、そのころはろくに食べ物もなくとても苦労されたようです。きのうは都内で開業されている谷口先生の息子さん（勝則先生）もいらしたので、勝則先生からもいろいろ話をお伺いすることができました。勝則先生は月に何回か、矯正治療のために沼津にいらしているそうです。勝則先生は歯科医院を開業されてから、休みの日などを利用して矯正歯科を学ばれたそうです。その向学心には頭が下がります。僕は歯並びが悪いので、勝則先生に治療していただくのかとも思いましたが、「治療には長い時間がかかるので、信州歯科大学の大学病院で治療を受けるように」というアドバイスをいただきました。矯正治療を受けるのに二十五歳という自分の年齢も気になっていたのでありますが、いまでは成人になつても矯正治療を受けられるようです。信州に戻ったら、早速矯正歯科を受診してみようと思つ

ています。

いまは静岡の実家で手紙を書いています。静岡に帰って困ることは、居場所がないことです。自分の部屋もなくなってしまったし、文房具など必要なものも手元がないために何かと不便です。それでも夏休みの最初の一週間でレポートを全部片付けようと予定を立てて帰って来たので、教科書など最低限必要なものは車に積んで持ってきました。レポートはまだ終わっていないのですが、七月中には何としても終わらせようと毎日机に向かってレポートを書いています。レポートといってもいまのところ哲学や経済学など一般教養の科目ばかりなので、自分が文系の学生に戻ったような気がします。

一人暮らしに慣れてしまうと、実家ではいろいろなことが面倒に感じます。ですから早く信州へ戻ろうと考えています。また信州に戻る前には、大阪に寄ろうと考えています。大阪には僕が一番下の弟が住んでいるので、弟の部屋に泊まり込んで花博にも行くのかなと考えています。

そういえば、河合さんは去年の夏休みに北海道へ行ったそうですね。今年の夏休み

の予定は決まりましたか。僕の勤めていた静岡証券でもやっと連続休暇ができて、世間並みになったようです。

レポートが終わったら、久しぶりに一人でどこかへ旅行でもしようかと思っっています。まだどこに行くか考えていませんが、旅行に行ったらBlue Wingのみんなにお土産を買って来ます。楽しみにしててください。

河合さんとは三月以来お会いしていませんね。来週、Blue Wingの練習の際にお会いできることを楽しみにしています。

一九九〇年七月二十八日

杉名僚二

河合律子様

前略 きょう（八月四日）、ドライブをしていたら、市内の海岸で花火が上がっていました。夏祭りか何かだったのでしょうか。なかなか盛大な花火でした。河合さんはいかがでしょうか。あの海岸の辺りは高い建物がないので花火もよく見えますね。

花火で思い出すのは、今年の夏祭りの日、静岡証券安倍川支店は仕事が終わらなく

て悲惨だったことです。あのときは内勤の人たちを支店に残して、僕たち渉外係はある取引先に招かれて花火を見に行きました。その取引先は安倍川沿いにあり、花火の間近に見ながら宴会をしました。あの日は花火の途中から大雨が降りましたね。僕は自分の車を取りに十時半ころ支店に戻ったのですが、支店にはまだみんながいて仕事をしていました。僕もそれから仕事を手伝い、結局終わったのが午前三時くらいでした。

安倍川支店はいまも相変わらず大変のようです。それに、僕が静岡証券を辞めてから一年たたない間に僕の知っている人がずいぶん少なくなってしまうようです。

東海電力の様子はどうですか。話を聞くと、まとまっていて一体感のある職場のようです。うらやましいです。

話は変わりますが、きょうは高校時代の友人の石井君に会いました。彼とは高校を卒業して以来会っていなかったのですが、先日、突然電話をくれたのです。彼も今年の四月、歯学部に入學したそうです。これには驚きました。早速意気投合した僕たちは、きょう会って情報交換をしてきました。石井君は、茨城大を卒業したあと、県庁

に勤めていたのですが、「一念発起して倉敷大歯学部に入った」とのことでした。僕のほかにも同じようなことをしている同級生がいるということにずいぶん勇気づけられました。

それにしてもきょうは暑かったですね。僕はこの夏、旅行をするはずだったので、親戚の達郎君（中学三年生）の家庭教師を引き受けてしまったので、いまだに静岡にいます。毎日三時間、みっちり彼を特訓しています。毎日三時間は遊びたい盛りの中学生にとって大変かもしれませんが、受験生ですから仕方ありません。僕もせっかく涼しい信州に部屋を借りているので、信州で避暑をしたいのですが、八月二十日あたりまで静岡にいなければならなくなってしまうました。でも、バイト代として久しぶりにまとまったお金が手に入るので楽しみます。

では河合さん、暑い日が続いていますので、夏バテしないように気をつけてください。
い。

草々

一九九〇年八月四日から五日にかけて

杉名僚二

河合律子 様

前略 毎日暑い日が続きますが、お元気ですか。先週の Blue Wing のセッションは楽しかったですね。あつという間の二時間でした。メンバー全員が集まったのは久しぶりでしたので、練習のあとも食事をしながら話が尽きませんでしたね。でも、河合さんや池島君の話を聞くと、僕だけ長い夏休みをとっていて申しわけない気がします。

僕はといえ、ふと気がつくとも夏休みに入ってもう一か月がたっていました。毎日暑さに耐えながら、親戚の達郎君の家庭教師をしています。当初の予定では、ちよつと数日、静岡に帰るだけのはずだったのが、思いがけず長くなってしまうました。

僕の弟たちもいま夏休みを満喫しています。地元メーカーに勤めている社会人一年生の弟は夏休みを利用して大島へ、大阪の大学に行っている一番下の弟は三日間ほど静岡に帰省していましたが、きのう大阪に戻りました。そういうわけで、いま僕の実家は妙に静かです。

さて、河合さんはどんな街が好きですか。僕は横浜によく行きます。きのう半年ぶ

りに東名高速を走り、横浜へ行ってきました。横浜にはこれまでも何度も行っているのですが、久しぶりに行ったらなぜかとても感動してしまいました。

僕は神田大学の四年生だったとき、町田市の隣の相模大野（神奈川県）というところに一年間住んでいました。それ以来、神奈川県がとても好きです。町田から横浜は近く、その当時一緒に住んでいた弟と一緒に親父の古い一九六九年製ビートルに乗ってよく行きました。横浜は静岡と同じく海に面していることもあって、僕の好きな街のひとつです。それに去年の夏、Blue Wing のみんなで横浜に行つてからは一層好きになりました。横浜にはまだ住んだことはないのですが、いまではなぜか第二の故郷という感じがします。

横浜でのライブの帰り、本牧埠頭に車を止めてみんなで歌ったことは忘れられない思い出です。あの日のことはなぜかとても印象に残っているので、その想いを曲にしようと思ひ、いまつくっています。曲名は「本牧埠頭午前0時」にしようと思ひます。曲ができれば、ぜひ聴いてください。

静岡からだとは横浜は比較的近いのですが、信州からはかなり距離があるため、なか

なか横浜までは行くことができせん。夏休みが終わると、またしばらくの間横浜へ行けなくなるのが残念です。

僕は横浜の街がとても好きで、何度行っても飽きません。いつか横浜に住みたいと思っています。だいぶ先のことですが、信州歯科大学を卒業したら横浜辺りの医院に勤めようと決めました。それを励みにして、これから前期試験の勉強を始めます。

あと一週間したら信州に戻る予定です。それでは、また。

草々

一九九〇年八月十四日

杉名僚二

河合律子様

残暑お見舞い申し上げます。

毎日暑い日が続きますね。さつきテレビで炎天下の都内の様子を伝えていましたが、とても暑そうでした。静岡はどうでしょうか。

僕は八月二十日に信州に戻って来ました。信州は静岡よりもずっと涼しくて快適です。湿度が低くからつとじているので、木陰に入れば日中でも涼しく、ジーンズをは

いていても汗ばみません。僕は避暑地に住んでいることを忘れていました。八月でも夜になると寒いくらいです。夏でこれだけ涼しいということから考えると、冬はかなり寒くなりそうです。

信州に戻って来てからの毎日、午前中は大学の図書館に行き、友人たちと一緒に勉強し、午後は近くの梓川に行ったり、大学のプール（室内プールです）で泳いだりしています。梓川は上高地から流れてくる川で、水が澄んでいてとてもきれいな川です。水中メガネをして川に潜ってじっとしていると、まるで水族館のように魚が一杯泳いでいます。しかも魚たちが平気でこちらに近寄って来るのには驚きました。水がとてもきれいなので、肩の辺りまで川につかっても川の底まで透き通って見えます。ずいぶんきれいな川なので人がたくさんいてもよさそうなのですが、僕たちのほかにはいつもだれもいません。まるでプライベートビーチにいるような、とてもぜいたくな気分です。きょうなども、友人の川崎君は一人優雅に釣りを楽しんだり、僕と桑田君は二人でギターを弾くなど、みんなそれぞれに思い思いの時間を過ごしました。

僕たちがギターを弾いていたら、榊原さんという歯科技工士をしていた僕より年上

の同級生が歌ってくれました。榊原さんの歌はとてもうまく、僕たちは驚きました。そこで早速、榊原さんにMRCのボーカルをやってもらうことをお願いしました。加えて川崎君もドラムを叩くことを知り、思いがけずこれで僕のバンド、MRCは本格的に動き出すことができそうです。

ここは標高が高いせいかわ外線が強く、僕はおととい半日泳いただけで体中真っ赤に日焼けしてしまいました。これは日焼けというよりもやけどといったほうが適切で、背中が痛くてポロシャツを着るのもしんどいくらいでした。きのうは部屋に帰ってから、水で濡らしたタオルで背中を冷やしました。寝るのにも一苦労でした。さすがにおととい一日で懲りたので、きのうときようは日に当たらないように気をつけました。きょう泳ぎに行った友人たちと話をしたのですが、「ここに来るまで信州がこんなにいいところだとは思わなかった」とみんなが言っていました。もちろん僕も同じ思いです。

大学から少し車を走らせれば、一面にぶどう畑やりんご畑が広がる郊外に出ます。クワガタ虫などもたくさんいて、夜になると明かりを求めて僕のアパートや大学の寮

に迷い込んで来ます。それに、景色のよさはいうまでもありません。幾重にも重なった日本アルプスの山々に夕日が沈む様子は、毎日見ても飽きません。きょうも梓川からの帰り道、とてもきれいな夕焼けでした。僕たちはしばらくの間車を止めて、言葉もなく赤く染った空を眺めました。ここで過ごす夏は、まるで小学生だったころの夏休みのようです。僕たちはすっかり童心に帰っています。

僕は神田大学での四年間、東京で暮らしました。都内には都内のよさがありますが、住むのは大変です。僕は信州の自然に囲まれたここでの暮らしがすっかり気に入りました。それに、せっかく信州にいるのだし、それも六年間という限られた時間なので、ここでしかできないこと、アウトドアのスポーツなどを思いつきやってみたいと思います。

まず手始めに、しばらく中断していたテニスをまた始めようと思っています。信州歯科大学にはオールシーズンのコートがあり、申し込めば簡単に借りられるようです。しかも壁打ちができる練習場もあるので、もう少し涼しくなったらテニスを再開しようと思っています。



[写真4]高ポッチ高原からの夜景

しかし、ここでの僕の友人は僕と同じくらいの年齢の人が多いので、こんなふうにいるのは僕たちだけかもしれません。僕もここで生まれ育ったとしたら、このよさがわからなかったかもしれません。昨年のいまごろは僕自身まさか信州で学生生活を送れるなど想像さえしていませんでした。

さて、先日撮った夕日の写真と、タカポツチ高原からの夜景を撮った写真を同封します。僕の通う信州歯科大学が夕日の下のほうに写っています。僕が住んでいるのは、こういうところですよ。たまにはこういう田舎もいいと思います。いつか河合さんもこちらに遊びに来てください。では、また。

一九九〇年八月二十四日

杉名僚二

〔写真4〕高ボッチ高原からの夜景

村井駅から高ボッチ高原に向かつて車を走らせると、崖の湯温泉郷の少し手前に松本市街が一望できるところがあり、そこから見る夜景はとても美しい。高ボッチ高原は標高一六六五メートルの山で、有名な巨人民話のダイダラボッチ（大太良法師）あるいは（大多羅坊）が腰かけたため平らになったという伝説が残っている。松本にはほかにモアルプス公園や城山公園など、夜景の美しいところが何か所がある。（写真撮影 青木邦和氏）

河合律子 様

前略 あと一時間で八月三十一日になります。この手紙が着くころには、九月になつていると思います。今年の夏ももう終わりです。信州には一足先に秋が訪れています。信州歯科大学のキャンパスには空をおおうくらいたくさんさんのトンボが舞っています。あんなにたくさんさんのトンボを見たのは初めてです。夜にはもう虫の音が聞こえます。

夏ももう終わるといふのに、僕はまだ夏の後遺症に悩まされています。ひどい日焼けのおかげで、上半身、それに顔まで一皮むけました。今回は本当に懲りました。日焼けしてから一週間たちますが、まだ背中が痛いような、かゆいようなひどいありさ

まです。標高が高いところは紫外線が強いということを感じました。友人たちにもよい教訓となったようです。

もうだいぶ涼しくなったので、「この辺りの紅葉はどうだろう」と友人たちと話をしています。近くの高ボツチ高原も期待できそうだし、上高地もきつと紅葉がきれいでしょう。この高ボツチ高原というのは、変わった名前だと思っていました。聞くところによると太古の伝説の巨人の名前だそうです。

紅葉のほかにも、試験が終わったら星を見に行く計画も立てています。この前も大学の近くを流れる奈良井川でいつもの友人たちと花火をしたとき、星がきれいなのは驚きました。奈良井川の両側は森になっており、民家や街灯がほとんどないため真っ暗で、本当に足元も見えないくらいです。僕は友人たちが花火をしているところから少し離れ、一人奈良井川のほとりに立って夜空を眺めたら、星が降ってきてそうなくらいたくさん瞬いていました。しばらく星を見ていたら、夜空に吸い込まれそうになりました。僕は高校二年の夏に高原教室で志賀高原に行きましたが、そのときも星がきれいだったことを思い出しました。考えてみたら、志賀高原もこれも信州なのですね。

今晚も外に出ると涼しくて、その上星がきれいなので、寝るのが惜しいくらいです。僕はいままで星を見るという趣味はなかったのですが、星座の名前も知りたくなりました。

では、また。

草々

一九九〇年八月三十日

杉名僚二

追伸 僕の好きな曲を何曲か録音したカセットテープを同封します。よかったら聴いてください。

[Side A]

1. Have you never been mellow (なみ風の誘惑) / Olivia Newton - John
2. The way we were (追憶) / Barbra Streisand
3. Killing me softly with his song (やちのう歌のうた) / Roberta Flack
4. Yesterday once more / Carpenters
5. You don't have to say you love me (ういの胸のうたをうた) / Elvis Presley

6. Wonderful tonight / Eric Clapton

7. Honesty / Billy Joel

[Side B]

1. Just the way you are (素顔のまもどり) / Billy Joel

2. We're all alone / Boz Scaggs

3. Imagine / John Lennon

4. Yesterday / The Beatles

5. Unchained melody / The Righteous Brothers

6. Can't help falling in love (好きになんぞいじょうふれなう) / Elvis Presley

7. As time goes by (カサブランカ) / Original sound track

杉名さん

九月になって、雨の降る日が多くなりました。今年は雷もよく鳴ります。そんな日は仕事もそこそこに家に帰る始末です。さつきさんにも笑われてしまいました。

一雨ごとに秋が深まっていきます。杉名さんが送ってくださった曲をBGMにして、秋の澄んだ空気と満点の星を信州で楽しめたら素敵だろうな、とお手紙を拝見して思いました。

この手紙も杉名さんが送ってくれたカセットテープを聴きながら書いています。「あつ、この曲、こういう曲名だったんだ」というのもあつたりして、どの曲も親しんでいる曲ばかりでした。

オールディーズを聴いていつも不思議に思うのは、こんなに優しいメロディーラインで心が包みこまれるような気がするの、とても新鮮に思えるということです。十二年間で蓄えられたわずかな心象風景に触れるものばかりで、胸が熱くなったり、痛くなったり、揺れ動かされました。どうもありがとうございます。

試験の終わる十月が楽しみです。またBlue Wingのみなさんと横浜に行きたいです。

では、また。

一九九〇年九月十四日

河合律子

河合律子様

前略 久しぶりに手紙を書いています。二、三日前、静岡県に大雨が降ったと聞きましたが静岡市内はどうでしたか。

信州でも珍しく五日間も続けて雨が降っています。これまでに、朝から夕方まで雨が降り続いたということはありませんでした。僕が信州に来て以来、雨らしい雨が降ったのはこれが初めてのような気がします。この雨のせいで、週末に友人たちとテニスができなかったのが残念です。ここのところずつと前期試験の準備で体を動かしていないので、来週こそはテニスをしたいと思っています。

九月に入ってから、毎日前期試験の資料を集めたり、友人たちと勉強会をしたりしています。大学の図書館の二階には十五人くらいが入れる「演習室」という部屋があり、いつもそこに勉強会と称して何人かで集まっています。谷口先生がおっしゃっていた「一緒に勉強する仲間を見つけないさい」という言葉の意味が次第にわかってきました。実際には一時間もたたないうちに茶話会となってしまうこともしばしばですが、こうした会を開くことによって試験や講義についての情報が得られるのでとても助か

ります。

試験勉強をする前には、まず試験についての情報（「資料」と呼ばれます）を集めることが大切だということをおは神田大学時代の経験で痛感しています。例えば、先輩のつくったまとめや「過去問」と略される過去の試験問題などが情報源です。こうした資料を友人たちと協力して集めたところ、これまでにずいぶん集まりました。これらの資料はコピーを重ねて字が見にくくなっているものが多いので、僕がワープロで清書しながらまとめています（僕は静岡証券でタイピングを覚えました。いまでは手で書くよりもずっと早く入力できるようになりました）。

前期試験の準備を始めてから二週間がたち、集めた資料の整理がようやく終わったので、早速それをコピーして友人たちに配布しました。それから二日くらいして、ある友人が「資料が手に入ったから回すよ」といってコピーを見せてくれました。見ると、僕たちがつくったものでした。なにしろ小さい大学ですから、試験の情報などあつという間に学年全体に回るようです。ただし、肝心の内容について覚えるのはつくつた僕たちもこれからです。

僕は神田大学では、こうしたノートのコピーなどの試験の資料をコピーさせてもらえばかりだったので、一度ノートをつくる側になつてみたいとずっと思っていました。多くの医学部には学生が自主的に組織する「試験対策委員」というのがあるので、こうした資料を個人がつくるようなことはあまりないようですが、信州歯科大学にはそうした伝統がないので、自分たちでやらなければなりません。聞くところによると、医学部では年間のコピー代が十万円単位になるそうです。それだけの金額になると自分でコピー機を買ってコピーしたほうが安くあがりそうです。

いよいよあすから二週間にわたる前期試験が始まります。あすは難関といわれている化学の試験です。これからまた気合を入れて覚えます。河合さんも仕事をがんばってください。

一九九〇年九月十七日

杉名僚二

河合律子様

前略 きょうもまた雨が降っています。一日ごとに日が暮れるのが早くなつていきま

す。いま僕の部屋からは雨の音と、時折通る車の音だけが聞こえてきます。それ以外はとても静かです。考えごとをして過ごすには最高の晩です。一人で昨年からきょうまでのことをぼんやりと思い返しています。

きょうで前期試験十五科目のうちの十科目が終わりました。試験はまだ続きますが、きょうで僕の不得手な理系の科目が終わったので少しほっとしています。あすは経済学の試験があります。経済学はかつての専門科目なので、あすの試験は多少自信があります。明日のまとめを終えて一息ついたので、手紙を書いています。

九月ももう月末です。きつと東海電力も忙しいことと思います。考えてみると、僕が河合さんを知ってからもう一年がたとうとしています。横浜でライブをした日の帰り、冗談まじりに「会社を辞めるんだ」と森山に言いました。去年のいまごろ僕は静岡証券に勤めていたかと思うと、不思議な感じがします。去年からいままでの間にずいぶんいろいろなことがありました。ここで試験勉強をしている自分がまだ不思議な気がします。

まず、昨年の二月に大井町支店に転勤になり、そこで窓口三か月、ついで渉外係に

なりました。渉外係になってからというものの仕事に行き詰まってしまい、自分の進むべき道に悩み、昨年十二月に退職願いを出しました。それから今年の二月には十一日間の有給休暇をとって大学受験に行き、運よく信州歯科大学に合格しました。そして三月に退職し、静岡を離れました。

僕は最低三年間は勤めようと思って就職して以来、今年の三月でちょうど三年でした。多くの人に出会い、そして別れ、多くのことを学ばせてもらった静岡証券での三年間でした。いま思えば貴重な経験をさせてもらいました。僕はここに至るまでずいぶんと遠回りをしましたが、未熟な僕にとつてこれは必要な道のりだったと思います。僕が進路を変更した理由のひとつに、高校時代の友人たちから影響を受けたことがあります。高校時代の美術部の友人たちは僕の宝物で、彼らからは学ぶことばかりです。四浪して芸大に入った植原、一浪して静岡教育大に入って念願の中学校の教師になった森山、高校の教師になった青木、彼らは高校時代に語っていたそれぞれの夢に向かって着実に歩いていきます。

そんな彼らに会い、話を聞きたびに彼らがまぶしく見え、何も目標がない自分と

でも恥ずかしく思えました。七年前、高校の友人たちの多くが浪人している中、僕は現役で大学に入りました。しかし、目的もなく四年間過ごしてしまい、卒業するときにとっても後悔しました。こうして結局のところ、僕が一番出遅れてしまい、ようやくスタートラインに就いたところです。みんなから実に七年遅れてしまいました。これから目標に向かって進んでいくしかありません。

去年の十一月ころ、自分がこれからどうしていいかわからず、横浜や都内を一晚中あてもなく車で走ったことがありました。あのころは自分の将来が全然見えませんでした。毎日、自分はこれからどうすればいいのだろうと、そんなことばかり考えていました。会社に辞表を出してはみたものの、本当に何も見えない状態でした。上司も「考え直してはみてはどうか」と言ってくれ、親身になって心配してくれました。

もともと理系の学部に進み、研究職や技術職の仕事をしたかった僕には、静岡証券のような会社勤めは向かないことは実際に会社勤めをしてみても十分にわかったので、大幅な方向転換が必要なことだけは確かでした。そんな中、去年の八月に歯科検診を受けに谷口歯科医院へ行きました。歯科医院を受診したのは十数年ぶりでした。僕は

歯並びが悪かったこともあり、あれこれ谷口先生にお話を伺っているうちに、谷口先生の人柄に惹かれるとともに、歯科医療への興味が生まれ、歯科の仕事をしてみたいと思うようになりました。

しかし、実のところ、一年浪人する覚悟でした。なにしろ受験の前日まで仕事をしていたので、受験の準備どころではなく、受験の宿さえも決めてありませんでした。信州歯科大学に合格したことは本当に幸運でした。

信州に来てよかったと思うのは、この大学でたくさんの信頼できる友人に恵まれたことです。高校を出たばかりの十八歳の友人から、最年長は三十歳の人までいます。僕のほかにも元社会人だった人が何人かいます。そうしたバラエティーに富んだ同級生がいることはとても励みになるばかりでなく、そうした人たちのこれまでの経験談を聞くことができただけでもここにくる価値がありました。

毎日忙しくて本来の自分を見失いかけた静岡証券での三年間でしたが、一転して再び学生生活を送れるという、とてつもなく大きなチャンスを得ました。もうこれまでにように無意味に時間を過ごすことはできません。このチャンスを最大限に生かして

自分にしかできないことを見つけようと思っています。

僕はここに来て、毎日新しいことが一杯で、何もかもが新鮮です。試験の準備できえ楽しく感じます。独語でも英語でも生物学でも、ひとつでも多くのことを学んでやろうと思っています。そして何でも挑戦してみようと思っています。

去年の九月からの一年間、僕が思ったことやしてきたことを少しでも知ってもらいたくてペンを執りました。試験が終わったら、また手紙を書きます。

それでは、また。

草々

一九九〇年九月二十六日

杉名僚二

杉名さん

こんにちは。お返事が遅くなつてしまい、すみません。お手紙に書かれている信州歯科大学の様子をいろいろと想像しています。

杉名さんが静岡証券を退職されてからもう半年が過ぎました。学生生活にも慣れ、充実した毎日を過ごされているようで安心いたしました。私も毎日毎日同じことの繰

り返しですが、それなりに楽しく過ごしています。

私は信州へは冬にスキーで何回か行ったことがある程度です。杉名さんはスキーをしますか。私から見ると、杉名さんはスキーよりも音楽一筋といった感じがします。杉名さんはそちらでもバンドを組まれたそうですね。杉名さんの新曲、いつか聴かせてください。

夏に Blue Wing のみなさんとお会いできてよかったです。森山さんの歌はとても素敵でした。杉名さんは森山さんと会ったりしていますか。今度、ぜひ高校時代のテープを聴かせてください。

それでは失礼します。

一九九〇年十月一日

河合律子

河合律子様

拝啓 十月に入って、キャンパスの木々は枯れ葉を落とし始めています。窓の外の景色が徐々に秋の色になり、ただでさえ人影のまばらなキャンパスが一層寂しく見えま

す。ここでは季節の移ろいがじかに感じられるような気がします。

都内にいちようの並木がとても美しいところがあります。僕が知っているのは、お茶の水にあるニコライ堂の辺りです。国電御茶ノ水駅の聖橋口を出て靖国通りに向かつて歩いて行くと、そこはゆるい坂道になっており、少し歩くとニコライ堂の建物や石の壁が目に入ります。そこは、都内にこんな場所があったのかと思うほど異国情緒あふれたところです。

ニコライ堂の横には少し広めの歩道があり、秋には靴が埋まるくらいいちようの葉が積もります。文教地区として有名なフランスのカルチエ・ラタンはきつとこういところではないかと勝手に思っています。神田大学前の雑踏とは違って、この辺りは人通りもまばらで、秋の夕暮れどきなど散策するには最高のところですよ。僕は神田大学の講義の合間などによく行きました。ニコライ堂の斜め向かいにはサーモピレーという紅茶専門店のお店があり、散歩に疲れたらそこでおいしい紅茶が飲めます。

お茶の水にはかつて多くの大学があったようですが、その大部分は郊外に移転してしまいました。しかし、いまでもお茶の水は学生の街です。ずいぶん古い歌ですが、

『学生街の喫茶店』という歌をご存じですか。僕はその歌がとても好きで、ニコライ堂の辺りを歩いているとその歌の気分になれます。

静岡証券に勤めていたころには、

自分が学生だったときのことを思い出す余裕などありませんでしたが、再び学生になりたいま、あのころの気持ち鮮やかに思い出されます。

大学のキャンパスといっても、お茶の水にある大学と信州にある大学とではだいぶ違うことに驚かされます。かつて僕が通ったお茶の水の神田大学には、芝生があつて寝転べるようなキャンパスはありませんが、その代わりにたくさんのお茶屋、喫茶



[写真5]ニコライ堂

店、食べ物屋があります。とくに、たくさんの本屋が立ち並んでいるという点で、本が好きな僕にとって最高の街です。大学からの帰り道、毎日のように古本を探しながら地下鉄の駅まで歩きました。そして地下鉄に乗りながら百冊以上の文庫本を読みました。スクランブル交差点を駅へと急ぐ人々、画材店の油絵の具のにおい、学生たちのアジテーションの声、電車の発車ベルの音、聖橋からの景色……。

なぜこんなことを書いたかといえば、先週森山とお茶の水で会って来たからです。僕が電話で森山に「都内に本を買いに行く」と話したところ、彼もたまたま「その日に都内にいる」とのことでした。森山とはあれこれ話をしてきましたが、悩み事を抱えていました。

森山には学生時代から付き合い合っている彼女がいるのですが、その彼女とうまくいかなくて悩んでいるようでした。というのも森山が鈍感なのが原因で、大学の同級生が森山のことを好きになったようなのですが、森山はそのことに全然気がつかずに、その人と会ったりしていたようなのです。高校時代から僕は森山のことをよく知っています。森山はやさしいし、ユーモアのセンスがあって、周囲の女性は自然と森山に惹か

れてしまうようです。その同級生の気持ちに気づいた森山の彼女は、「しばらくの間会わずに考えたい」と森山に言ったようです。それに対して、森山はどうしてよいかかわからず困っています。ぜひ相談に乗ってやってください。それでは、また。

敬具

一九九〇年十月六日

杉名僚二

追伸 Happy Birthday 一高校時代のテープをダビングしましたので同封します。
僕はギターで、森山はボーカルです。最後の曲は、森山が作詞・作曲した『White Light Christmas』という曲です。

〔写真5〕ニコライ堂

お茶の水にある日本ハリストス正教会教団東京復活大聖堂は、教会の設立に尽力した主教サーツキン・ニコライにちなみ、通称ニコライ堂と呼ばれている。ニコライ堂は明治十七年三月に起工し、同二十四年二月に完成した。日本最大のビザンチン式建造物として知られている。設計者はロシア工科大学教授シチュールポフ博士、工事監督は英国人コンドル博士である。昭和三十七年六月二十一日には文部省指定重要文化財に指定されている。また、ニコライ堂の界限は新東京百景のひとつに選ばれている。毎日曜日の朝十時、ニコライ堂の鐘の音が厳かに辺りに鳴り響く。

杉名さん

お手紙とテープ、届きました。ありがとうございます。杉名さんのギターと森山

さんの歌、とても素敵です。何度も何度も繰り返し聴いています。いただいたテープ、大切にします。

杉名さんの手紙に書いてあった神田の古本屋街は、私の兄の思い出の地で、私も兄に連れられて古本屋に行ったことがあります。私はまだ高校生だったので、そのときは大学生になった気分でした。古本屋の独特のにおいが懐かしいです。流れのない川らしきものがありました。それが神田川なのでしょう。

そして、たしか「いもや」というお店だったと思います。天ぷらや天丼しかやっていないお店でお昼をいただきました。カウンターしか座るところがなく、ご主人が天ぷらを揚げる様子を見ることができました。水槽のような大きな天ぷら鍋で手際よくて、私たちは息をのんで見とれていました。いつもファーストフードのお店しか行っただけなのに私にとっては、一種のカルチャーショックだったように思います。

お電話で杉名さんご自分の文章を恐縮していらしたけれども、この前の松本の様子といい、お茶の水の様子といい、読んで広がる風景のイメージにとっても誘われてしまいます。いつか機会があったら行ってみたいと思います。

それと、森山さんのことについて書かせてください。私は森山さんとはそれほど話をしたことがないので、杉名さんから伝えてほしいのです。森山さんが森山さんの彼女に会いたいと思っているなら、すぐにでも会いに行つたほうがよいと思います。もし、例えば一か月間全然連絡もしなかつたら、二人はきつと終わつてしまふと思ひます。部外者である私がこんなことを言うのはおせっかいかもしれませんが、その女の人も本当は森山さんから連絡をしてほしいと思つてゐると思ひます。

杉名さんはどうお考えですか。勝手なことを書いてしまつてすみません。でも、森山さんのことが心配です。森山さんとその人がうまくいくように祈つてゐます。

それでは、失礼します。テープを送つてくださり、本当にありがとうございました。

一九九〇年十月十一日

河合律子

河合律子様

前略 あれから森山が突然、信州の僕の部屋に來ました。僕と森山はあれこれ話をして、そのあと森山は僕の部屋から彼女のところに電話をしました。森山と彼女は静岡

で会う約束をしたようで、翌日森山は静岡に帰りました。あれからあの二人はうまく
いつているようです。これも河合さんのアドバイスのおかげです。ありがとうございます
ました。

河合さんは河合さん自身のそういう話を全然しませんが、好きな人がいるのですか。
僕でよかつたら相談に乗ります。何かあつたら気軽に話をしてください。

それでは、また。

草々

一九九〇年十月十五日

杉名僚二

河合律子様

Merry Christmas !

十二月に入って何度か雪が降り、数日前には五センチほど積まりました。雪の降ら
ない日でも、朝になると霜で辺り一面真っ白になります。車のフロントガラスも例外
ではありません。毎朝、車のエンジンをかけ、そして走り出すまで容易ではありません
ん。凍りついたフロントガラスを溶かすのは一苦勞で、ときにはお湯をかけることも

あります。しかし、水を切らずに走り出すと、みるみるうちにフロントガラスが真っ白に凍ってしまい、あつという間に前が見えなくなりす。こうならないためには、夜のうちにフロントガラスにカバーをかけておくのが一番よいようです。

大学に行けば暖房が効いているので寒さを感じることはありませんが、僕のアパートは日当たりがあまりよくないためかなり冷えす。十月にファンヒーターを一台買ったのですが、部屋が広いのでそれだけでは足りず、先日もう一台買いました。これですうやく部屋全体が暖まるようになりました。いまでさえ静岡の二月よりもつと寒いのですが、まだまだこれから寒くなると思うともう一台ファンヒーターが必要になりそうです。

さて、十二月十九日に中間試験がやつと終わり、松本市まで行って来ました。松本の街はクリスマス前にぎわっていました。二十日には信州歯科大学の友人十人で、一足先にクリスマスパーティーをしました。友人のアパートでのホームパーティーでしたが、みんなセミフォーマルを着て集まり、クリスマスツリーを用意し（前の日に中林君と近くの山に行ってそれらしい木を探して来ました）、部屋を飾りつけたりし



[写真6]赤いセーターを着たテディーベア

〔写真6〕赤いセーターを着たテディーベア
松本市の中町通りには雑貨屋さんが何軒かある。その中のある店で見つけたのがこのテディーベアである。松本の中町通りは善光寺街道の一部であり、蔵造りの建物が多く残っている。明治時代にはこれらの建物の多くは荷問屋であったそうであるが、現在ではさまざまな商店に姿を変えている。中町通りから少し歩いて女鳥羽川を渡ると、女鳥羽川に沿ってナワテ通りと呼ばれるレトロな感じの通りがあり、その通りも独特の雰囲気を持っている。

て、結構本格的なパーティーとなりました。

パーティーのあとは、みんなで松本市まで夜景を見に行きました。ホームパーティーといふのもなかなかいいものです。

そちらはいかがですか。それでは、また。

一九九〇年十二月二十四日 杉名僚二

追伸 ささやかですが、クリスマスプレゼントを同封いたします。メガネをかけ、セーターを着たテディーベアです。松本の雑貨屋で見つけました。

杉名僚二様

I wish you a Merry Christmas !

お手紙とプレゼント、ありがとございます。楽しいクリスマスをお過ごされたでしょうか。寒いですから、お体には気をつけてがんばってください。

一九九〇年十二月二十四日

河合律子

河合律子様

拝啓 信州の厳しい寒さも三月に入って少し和らぎ、待ち遠しかった春がすぐそこまで来ているのが感じられます。初めての信州の冬で雪が心配だったのですが、思ったほどは降りませんでした。寒さのほうは、さすがに静岡とは比較にならないほど厳しく、気温はマイナス十度近くにまでなりません。

雪が降った日は朝のまぶしさでわかります。朝の冷たい空気の中での空の青さと、雪と雲の白さとのコントラスト。雪化粧をした日本アルプスの山々は美しく、絵で見

るより、写真で見るよりも、鮮やかです。

人は都会では季節の移り変わりを知らず、それに代わる何かの変化や刺激を求める傾向にあります。ここ北国の片田舎の人々はとても人間らしく見えます。都市で流れる時間の早さに比べて、ここでは人の歩く速度ばかりでなく、時間さえものんびり流れています。

僕は三週間にわたる長い試験期間がやっと終わり、一足早い春を満喫しています。食べては勉強し、また食べそしてよく寝て、とても健康でまた快適で、それなりに忙しい生活を送っています。まったく新しい世界に飛び込んで一年、僕はここで知り合った多くの友人たちに助けられ、また一歩進むことができました。初めて触れた医学の一端。これから覚えなければならぬことは年々多くなります。まだ最初の一歩を踏み出したにすぎませんが、未知なもの、新しいことに対する興味は尽きません。

先のことを思えば長いのですが、自分がいま置かれている環境の中で自分の能力でどの程度、何がどこまでできるのか、あるいはいまのこのときをどのようにすれば最大限に生かすことができるであろうか、と考えています。とにかく限りない可能性と

いつかくるだろう成功を夢み、探し求め、ひたすら前を見つめながら一生懸命いまのときを、自分の道を進むということを中心に置いていきます。

試験が終わって、信州の自然は僕に心のゆとりを与えてくれます。こちらに来て、僕はスキーを始めました。春の日射しを浴びてのスキーは格別です。三月の終わりには真つ黒に日焼けして静岡に帰るつもりです。

考えてみると、河合さんとは去年の夏以来お会いしていません。ときおり「河合さんはどうしているのだろう」と考えます。また近況など教えてください。

静岡はもう暖かいのかもしれませんが、何とぞ風邪などひかぬよう、ご自愛ください。
敬具

一九九一年三月三日

杉名僚二

追伸 僕の好きな曲を録音したカセットテープを同封します。お時間がありましたら聴いてください。

[Side A]

1. オリーブアを聴きながら／杏里
2. Anniversary ／松任谷由美
3. 君が人生の時：／浜田省吾
4. ガラス越しに消えた夏／鈴木雅之
5. 瞳がほほえむから／今井美樹
6. Someday ／佐野元春

[Side B]

1. Missing ／久保田利伸
2. 恋におちしーFall in love—／小林明子
3. 思ひ出がらひづ／H₂O
4. Summer Candles／杏里

5. 恋の予感／安全地帯

6. いとしのエリー／サザンオールスターズ

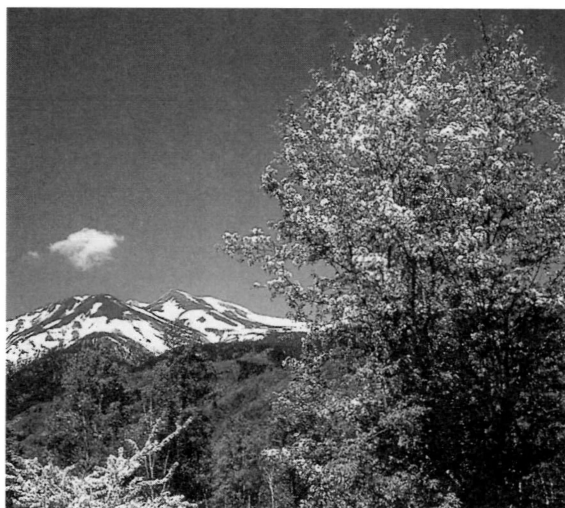
第3章 大学二年

信州の遅い春

河合律子様

拝啓 何もかもが新しく感じられる四月になりました。信州にもようやくやく遅い春がやってきました。冬の間、手を伸ばせば届きそうだった日本アルプスの山々に霞がかかり、少し僕から遠ざかることによって、ここが案外広い盆地だということを教えてくれます。春の暖かい空気に包まれた信州はとても穏やかで、厳しい冬の間とはまるで別の表情を見せています。

信州歯科大学では、二年次のカリキュラムが発表になり、早くも五日から講義が始まることになりました。二年次



[写真7] 春の乗鞍岳

には解剖学、組織学といった専門科目があり、やつと歯学部らしくなります。医学部ではもちろん人体解剖を行います。歯学部でも医学部と同様に人体解剖の実習があります。友人たちとの話題も自然とこうした話題が多くなりました。人体解剖は医学を学ぶ者にとつての最初のハードルです。僕にとつても今年度の最大の課題となりそうです。

今年忙しくなりそうですが、また時間を見つけて手紙を書きます。

敬具

一九九一年四月五日

杉名僚二

〔写真7〕春の乗鞍岳

信州歯科大学がある辺りは松本平と呼ばれる盆地であり、周囲を山に囲まれている。松本平の西側には日本アルプスと呼ばれる飛騨山脈が連なっている。その中のひとつである乗鞍岳は、標高三〇二六メートルの美しい山である。岐阜県側から眺めると剣ヶ峰周辺が「馬の鞍」に似ていることから「乗鞍」と名づけられたといわれている。乗鞍はスキー場や温泉でも知られている。乗鞍スカイラインの終点である畳平は二七〇二メートルであり、自動車で行くことのできる日本一の高所である。(撮影 伊藤嘉治氏)

河合律子様

拝啓 キャンパスの中の八重桜がようやく咲き始めています。大学の周囲には数え切

れないほどの桜がありとてもきれいでしたが、いつのまにか散ってしまい、いまではすっかり葉をつけて他の木々と見分けがつかなくなっていました。

「桜吹雪」という言葉がありますが、信州の強い風は本当に吹雪のようにあつという間に桜を散らしてしまいます。短い花見の季節を逃した大人たちのがっかりした表情とは対照的に、こどもたちはバケツに一杯になるほど桜の花びらを集めて楽しそうでした。そして僕は、道に落ちた桜の花びらが風に吹かれて、さらさらと音をたてるということを初めて知りました。

「春眠暁を覚えず」と昔の人はよく言ったものです。信州の春は、教室の一番前で講義を聴いている僕たちをも、油断していると眠りへと誘い込みます。専門科目での緊張に対して、一般教養科目の講義は心地よい子守歌に聞こえます。そして昼休みや講義の終わったあとには、みんな芝生の上に寝転ぶのが日課になっています。四月からはその仲間に、理系の大学を卒業して信州歯科大学の二年に編入した古澤君が新しく加わりました。

二年になって解剖学などいくつかの専門科目の講義が始まりました。解剖学ではい

ま頭蓋骨とうがいこつ（註3）について学んでいます。解剖学の講義が始まったときには驚きました。というのは、学生の二人に一個ずつの割合で、本物の頭蓋骨を机の上に並べ、それをじかに触って観察するのです。僕たちは最初とまどいましたが、毎週本物の頭蓋骨に触れなければなりません。休み時間、学生たちが席を外して教室内に人の姿がまばらなところに、机の上に頭蓋骨がずらっと並んで同じ方向を向いている様子は一種異様な光景です。頭蓋骨の中には見るからにこどものものもありますし、一体この人は生前どういう人だったのだろうかとか最初はいろいろ考えてしまいました。前回の講義で頭蓋骨に触れるのも三回目となり、次第に慣れてきました。いまはまだマウスの解剖でさえも自信がありませんが、こうした実習に慣れていくことが僕の課題です。

さて、前置きが長くなりましたが、河合さんのほうはどうですか。「五月からまた窓口の仕事」と言っていましたね。窓口の業務には慣れましたか。河合さんのことだから、何でもてきぱきとこなしていることと思います。僕もかつては静岡証券の窓口に座っていたことがあります。しかしそれは三か月という短い期間だったので、店頭

に来るお客さんの顔をやっと思えたところに退職してしまいましたが、多少なりとも窓
口の仕事の大変さはわかるつもりです。

僕は用事があるので静岡に帰る予定です。たぶん、この手紙が着くころには静岡に
いることと思います。ご存じのことかもしれませんが、僕の実家は東海電力の近くで
す。静岡に帰ったら電話します。三月にはお会いできなかつたので、お会いしたいと
思っています。

ゴールデンウィークの前後は河合さんの会社も忙しいでしょうけれど、健康には十
分気をつけてお仕事がんばってください。

一九九一年四月三十日

杉名僚二

敬具

河合律子様

前略 河合さん、先日はお忙しいところをありがとうございました。

お会いして話ができ、僕も納得しました。「好きな人がいる」とのことですので、
それでは仕方がありません。僕は河合さんのことをあきらめますから、僕が言ったこ

とは忘れてください。

その人はどんな人なのか。僕が知っている人ですか。僕はいつでも相談に乗りますし、河合さんがその人とうまくいくように応援します。がんばってください。これからもいままで通りお願いいたします。

草々

一九九一年五月十日

杉名僚二

杉名さん

きのうはお電話くださり、ありがとうございます。なかなかお返事がいただけなかったので心配でした。本当に私とお付き合ってくださいでしょうか。とてもうれしいのですが、いまだに信じられません。

私は信州に来てまだ間もないのですが、杉名さんと知り合えてよかったと思っています。私は杉名さんのことが好きです。これから杉名さんと一緒にたくさん時間を過ごしたいと思っています。

実習とかで毎日忙しいと思いますが、お時間があつたらまた電話してください。

一九九一年七月二十八日

穂谷野ゆかり

前略

河合さん、お元気ですか。僕はある人とお付き合いをすることになりました。その人は、今年の四月に僕の大学の軽音楽部に入部した松本女子大学の穂谷野さんという人です。穂谷野さんは桑田君が松本女子大学に行つてスカウト!?してきた人です。河合さんには報告しておこうと思つて手紙を書きました。

河合さんのほうはどうですか。また近況など教えてください。

草々

一九九一年七月三十日

杉名僚二

杉名さん

お手紙ありがとうございました。穂谷野さんという人はきつと素敵な人だと思います。杉名さんだったら私よりもずっといい人がいると思つていました。きつとうまくいくと思います。

私のほうは友達関係を壊すのがこわくて、自分の気持ちを伝えられずにいます。それにその人には彼女がいるようです。私はその人のことを見ているだけで満足なのです。

さて、杉名さんのところにもきつと連絡がいつていることと思いますが、九月に池島さんとさつきさんが結婚するそうです。私はいにくその日はどうしても都合がつかず、出席できません。Blue Wingのみなさんで何かお祝いをするのでしたら、私にも声をかけてください。

それでは失礼します。

一九九一年八月五日

河合律子

追伸 またいろいろ相談に乗っていただけますか。

Happy Birthday to You.

杉名さん

二十七歳のお誕生日、おめでとうございます。ささやかですが、私からのプレゼント

トです。ベースを形どったペンダントです。

杉名さんの二十七歳の一年間が明るく健やかで、楽しい一年間でありますように。

一九九一年九月十六日

穂谷野ゆかり

杉名僚二様

私たち、結婚いたしました。明るい、なごやかな家庭を築き上げて参りたいと思います。どうぞ幾久しくお導きのほど、お願いいたします。

一九九一年九月吉日

池島 英樹

さつき

先日は信州から来てくれてありがとう。さつきとはこれでようやく大手を振って一緒に暮らすことができるようになった。

披露宴に河合さんが来れなかったのが残念だったけど、今度Blue Wingのみんなで新居に寄ってほしい。また静岡に帰って来たたら連絡してくれ。それじゃ、また。

杉名さん

寒い日が続きますが、お元気ですか。もうすぐ後期試験が始まりますね。お互いがんばりましょう。

少し早いですが、バレンタインチョコです。杉名さんのお口に合うとうれしいです。試験が終わったら、どこかに連れて行ってください。杉名さんと横浜に行ってみたいです。

一九九二年二月十四日

穂谷野ゆかり

第4章 大学三年

専門科目への戸惑い

河合律子様

拝啓 四月になって信州もようやく暖かくなってきました。河合さん、お変わりありませんか。僕は第三学年に進級することができました。

新年度の講義が始まってきょうで三日目です。初日から解剖学の実習があったのですが、初日からいきなり解剖実習が始まったので戸惑っています。なにしろマウスやウサギではなく、実際に人体を解剖するのです。夏休みの前までは全身解剖を行い、後半は頭や顔を中心に解剖するようです。解剖実習の話は先輩から何度も何度も聞いていましたが、話を聞くのと実際に目の当たりにするのは大違いです。でも、自分が歯学部 of 学生であることを実感しています。こんなところが僕の近況です。河合さんのほうはどうですか。

またしばらくの間、忙しい日が続きます。時間ができたら手紙を書きます。

敬具

一九九二年四月七日

杉名僚二

河合律子様

前略 ここ信州も、一年で一番過ぎしやすい季節になりました。いま外はカエルの合唱が響き渡っています。冬の間とは違って、季節も風景もとても穏やかです。

天気がいいときは近くを散歩します。夜、レポートを書いたあとなど、アパートの隣にある公園に行きます。ブランコに座ってビール片手に星を眺めるのは最高です。辺りには民家や街灯が少なく、夜になると僕のアパートの周りでも足元が見えないくらい真つ暗になるので、星はとてもきれいです。

でも、第三学年になって講義や実習が忙しくなり、田舎での暮らしをゆっくり味わう暇がなかなかありません。ここに住んで三年目になりますが、いまだに近所がどうなっているのかよく知らないままです。先日、僕のアパートからほんの数メートルのところの「歌碑公園」という塩尻市の観光案内に載っている公園があるのを初めて知り、僕の散歩のコースに加わりました。

ここは広丘駅を中心に何軒かお店がありますが、なにしろ小さい町なので近くのお店の人も顔見知りになりました。アパートの管理人のおじさん、床屋さん、カメラ

屋さんといった人たちが、ずいぶんいろいろとよくしてくれます。小さいながらも人情味にあふれていて、結構住み心地はいい町です。

さて、四月の終わりには神田大学で親しかった鈴木 of 結婚式に出席して来ました。鈴木と会ったのは二年ぶり、東京に受験に行ったときに彼の部屋に突然押しかけて無理やり泊めてもらって以来でした。鈴木は僕とは違い、学生時代に真剣に勉強し、大手都銀の千代田銀行に入社した優秀な友人です。「自分を客観的に見ることができる人が大人なんだ」と学生時代に彼が言っていたのを思い出しました。あれから七年、僕はいまだに彼の言葉の意味するところに到達していないことがとても悔しいのですが。

こんなところが僕の近況です。それでは、また。

草々

一九九二年五月十七日

杉名僚二

杉名さん

きのう杉名さんに話した通り、あの人にはきょう、ちゃんと断りました。

杉名さんにまで迷惑をかけてしまつてごめんなさい。もうあの人も何も言つてこないと思います。アルバイトもきのうで辞めました。私がだらしなかつたと反省しています。それは自分でもわかつています。でも、私に杉名さんがいないと、もつともつとだらしなくなつてしまふから……。

杉名さんも考えてしまいますよね。私みたいな子は失格かもしれませぬ。

ごめんなさい。変なこと書いてしまつて。本当に迷惑ばかりかけてごめんなさい。

一九九二年八月二日

穂谷野ゆかり

杉名さん

お誕生日おめでとうございます。いまは前期試験中ですから、試験が終わつたらお祝います。お会いできる日を楽しみにしています。お体に気をつけてがんばってください。

一九九二年九月十六日

穂谷野ゆかり

追伸 八月のことがあつて、よくわかつたことがあります。私はやはり杉名さんのこ

とが一番好きです。

河合律子様

前略 河合さん、お元気ですか。お変わりありませんか。

僕は静岡に帰って来ました。信州ではまだ一日の最低気温が氷点下の日が続いているので、静岡はずいぶん暖かく感じます。

三月二十日には、曾祖母、祖母、祖父の三人の法事を一度にまとめて行います。事が終わってからは、何年ぶりに静岡でのんびりとしようかなと考えています。

僕たちには、高校生と同じくらい夏休みや冬休みがあるのですが、レポートなどがあるため休み中にもいろいろやる必要があります。なかなか静岡にも帰って来れません。そうした中で、唯一のんびりできるのが春休みです。次はいつ静岡に帰ってこれるかわからないので、いまいろいろと実家での雑用をしています。

きょう成績表が実家に届きました。四年生に進級できるとのことなので一安心しています。歯学部は六年の課程も、これでやっと半分終わりました。三年生の科目は二

十二科目あつてずいぶんバラエティーに富んでいました。その一端を書くと、解剖実習や病理学といった基礎医学に始まり、カエルを使った神経や筋肉の実験、大腸菌を使った遺伝子組み替え実験、歯型彫刻の実習では歯の形を石膏棒へ彫刻をしたり、歯理工学の実習では金属の鑄造の実習をしたりと、多彩な内容でした。歯学部では、医学が半分と歯科診療に必要な技術に関することが残りの半分以上を占めています。この幅の広さが歯学部の特徴だと思います。

僕は手を動かして物を作ることが何よりも好きなので、歯学部に入つてよかつたと思つています。実習で彫刻やスケッチができるのは、美術系の大学を除けば歯学部だけではないかと思えます。

僕が静岡証券に勤めたのは三年間ですが、早いものでもうそれと同じだけの時間を信州で過ごしました。これからは四年生と五年生の前期まで講義と基礎実習があり、五年生の後期からは大学病院で一年間のポリクリ（註4）が待っています。早く臨床実習（註5）をやりたいのですが、あと一年半は机に向かつて勉強しなければなりません。いまでは自分なりのペースがつかめたので、これからもなんとかやっていけそ

うです。

まだだいたい先ですが、卒業したら何年間かどこかで勤務医として働き、そして静岡で開業することを目標にしています。開業すれば静岡証券に勤めた経験も何かの役に立ちそうです。

さて、来週池島夫妻のところへ遊びに行きませんか。池島夫妻に赤ちゃんが生まれましたとは聞きましたが、いまだに僕は彼らのところに行ったことがないので。池島夫妻へ出産祝いに何を贈ろうか考えてみたのですが、出産祝いを贈るなど僕は初めてのことです。どんなものを贈ったらよいか大変悩んでいます。童謡のCD五枚セットはどうでしょうか。何かほかによいものがあつたら教えてください。

僕から池島夫妻へは連絡しておきますので、日時とか決まったら電話します。

どこでも三月は一年のうちでも一番忙しい月ですので、お体には十分気をつけてください。なお、僕は三月二十七日まで静岡にいる予定です。

それでは、また。

草々

一九九三年三月十七日

杉名僚二

河合さんへ

先日は杉名さんと二人で来てくれて、ありがとう。お祝いにいただいた童謡のCD、娘もとても気に入っています。私も娘と一緒に聞いています。童謡って心がとてもなごみますね。

さて話は変わりますが、河合さん、佐藤さんのことをどう思いますか。最近、佐藤さんが私に河合さんのことをいろいろと聞いてくるんです。きっと河合さんのことを好きなんだと思います。

私は河合さんのことはよく知っているつもりです。河合さん、ひたすら一途なものいいけれど、そろそろあの人のことはあきらめたほうがいいと思います。あの人には学生時代から付き合っている彼女がいますし、それにどうせ河合さんからは言い出せないでしょうし。佐藤さんてとってもいい人だから、この際考えてみたらどうかしら。それじゃ、またね。

一九九三年三月三十一日

池島さつき

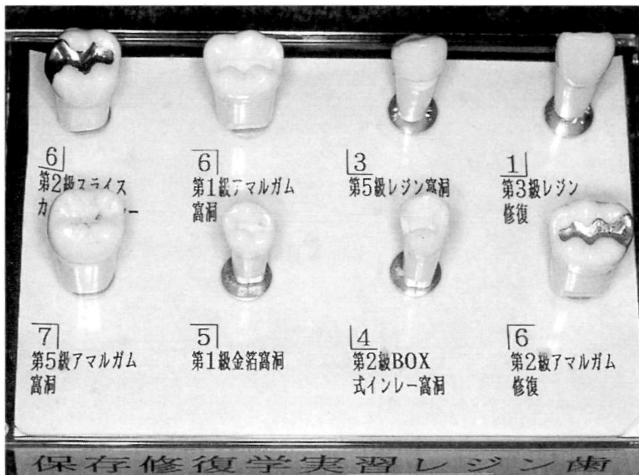
第5章 大学四年

森山の結婚

河合律子 様

前略 僕は無事四年生に進級しました。

午前は講義、午後は五時五十分まで実習があり、毎日時間に追われながらも充実した日々を送っています。科目も三年までの基礎医学から一歩進んで、^{ほてつ}補綴（金冠や入れ歯を学ぶ科目）（註6）、歯周病学（歯槽膿漏について学ぶ科目）、歯内療法学（歯の神経を治療する科目）など、歯科の臨床科目を学んでいます。三年前、信州に来たばかりのときには、僕は前歯と奥歯の違いもわからなかったのですが、いまではそれぞれの歯がとても微妙で精緻な形態をとっていることを知



[写真8]基礎実習の製作物

りました。僕自身も信州歯科大学で矯正治療を受けているので、患者として治療を受けた体験も将来生かせそうです。

僕は矯正治療を受け始めたのが二十六歳と遅かったので、治療期間はかなり長くかかっています。治療が終わる一年後には、僕の歯並びもだいぶよくなっていることと思います。矯正歯科の教科書の写真を見て思ったことは、口元が変わるとその人の印象が大きく変わることです。日本では歯列不正に対する意識はまだ低いのですが、アメリカではかなり意識が高いようです。矯正歯科はとても興味深い分野です。

それでは、また。

草々

一九九三年四月二十日

杉名僚二

〔写真8〕基礎実習の製作物

これは保存修復学の基礎実習で窩洞形成や修復がなされたレジン歯である。このレジン歯は通常、顎模型に排列されているものであり、この写真は実習終了後に顎模型から取り外して並べたものである。顎模型はフアントム(phantom)と呼ばれるマネキンにセットされ、それを患者さんに見たてて、窩洞形成などの実習が行われる。

杉名さん

お元気ですか。きょうは相談したいことがあってお手紙を書きました。

先日、職場の先輩の佐藤さんという人から告白されました。でも、以前にも杉名さんにお話をしましたが、私には好きな人がいるのです。それに、これまで佐藤さんのことをあまり意識していなかったので、何と返事をしてよいか困っています。

佐藤さんは優しく、いつも私のことを心配してくれます。断る理由はありませんが、好きな人以外のことは考えられないのです。

杉名さん、どうしたらよいでしょうか。

一九九三年四月二十六日

河合律子

河合さん

お手紙拝見しました。「好きな人がいる」という話は前に聞きました。佐藤さんには、「好きな人がいる」とはつきり言ったほうがよいと思います。でも、肝心の好きな人とはどうなったのでしょうか。この機会に、そちらへアプローチしてみたいか

がですか。応援しますから、がんばってください。

それでは、また。

一九九三年五月六日

杉名僚二

河合律子様

暑中お見舞い申し上げます。

お元気ですか。信州は雨ばかり降って、なかなか夏らしくありませんが、静岡はどうでしょうか。夏休みになると毎年山のようにレポートが出されるので、僕はそれを片付けながら信州で避暑を楽しんでいます。

先日、以前からほしかったコピー機とファクスを買いました。これがあれば試験の情報交換などがいつでも簡単にできるし、寒い冬にコンビニまでコピーをしに行かずに済みます。この二つを部屋に置いたら、ちよつとしたオフィスのようになりました。どちらもとても便利です。

さて、信州はいま「信州博」と「松本城四百年祭」（どちらも九月二十六日まで）

が開催されていてとてもにぎやかです。信州方面に来ることがあつたら、ぜひお立ち寄りください。僕は今年の夏は信州で過ごす予定です。

それと、森山が十二月に結婚することになりました。相手は学生時代から付き合い合っていた人です。河合さんのほうはどうですか。うまくいきそうですか。

それではまた。

一九九三年八月四日

杉名僚二

河合律子様

前略　ここ信州にも秋が訪れようとしています。きょうは試験がひとつ終わったので手紙を書いています。河合さんには春にお会いして以来ですね。どうしていますか。佐藤さんとはどうなったのでしょうか。少し心配しています。またいろいろ話を聞かせてください。

今度河合さんにお会いするのは森山の結婚式ですね。なんと僕が披露宴の司会を務めることになりました。それとせっかくBlue Wingのメンバーが集まるのですから、

一曲演奏しましょう。曲が決まったら連絡します。

それでは、また。

一九九三年九月十二日

草々
杉名僚二

Happy Birthday !

杉名さん、お誕生日おめでとございます。

私も気がつけば、大学三年です。私の周囲では早くも就職のことが話題に上るようになりました。女の子は四年制の大学を出ると、就職先がなかなかないのです。杉名さんも何年か前就職活動をして、証券会社に就職されたのですよね。先輩の話聞いてみると、就職活動って大変そうだし、それにも増して証券会社で働くのって、すごく大変だっていうことを聞きます。私だったら半年も続かないと思います。

私は父の会社に勤めることになると思うので、その点ちよつと気が楽です。父の会社は不動産会社なので、私は宅地建物取引者主任（宅建）の資格を取りたいと思っています。試験は十月にあるので今年は間に合いませんが、来年の試験に向けていまか

ら勉強してみようと思います。

私は松本女子大学に推薦で入ったので、これまであまり勉強らしい勉強をしたことはありませんでした。でも、これから宅建の勉強をしてみようと思います。私もがんばりますから、杉名さんも前期試験、がんばってください。試験が終わったらお祝いしますね。

一九九三年九月十六日

穂谷野ゆかり

河合律子様

Merry Christmas !

森山の結婚式はとてもよかったですね。僕もこれまでいくつか披露宴に出席しましたが、今回企画から携わることができたことはとてもよい経験になりました。森山が結婚するというのも急でしたが、口下手な僕が披露宴の司会を頼まれるとは思いませんでした。正味たった一週間の準備期間しかなかったのですが、演出、BGM、台本づくりと、あれこれ準備をしました。披露宴があれほど手間のかかるものだとは初めて

知りました。しかも、中学校と小学校のそれぞれ教師である当人たちが学期末の成績の事務のさなかという忙しい時期だったということもあり、余計に大変でした。

森山夫妻の希望は「手づくりの温かい披露宴にしたい」ということだったので、派手な演出もなく、お色直しも一回だけ、これも自前の振り袖という落ち着いたものになったと思います。余興では、郁美さんの教え子たちが歌を歌ったりして、とてもよい雰囲気でした。僕は初めての司会でしたが、これといった失敗がなかったことが何よりでした。それとBlue Wingの演奏もぶっつけ本番だった割にはうまくいきました。

河合さんに一年ぶりに会って驚いたことは、河合さんがとても大人っぽくなっていたことです。花嫁さんはもちろんとてもきれいでしたが、河合さんは花嫁さんの次にきれいでした。

あの日、気づいたことがあります。こんなことを手紙に書くのはどうかと思います。あの日は初めて河合さんがだれを好きだったのかを知りました。だれかから聞いたというわけではありません。僕の直感です。でも、きつと間違っていないと思

ます。河合さんが好きだったのは、森山ですね。

森山はいいやつだから、河合さんが森山のことを想う気持ちはよくわかります。僕も河合さんの好きな人が森山でよかったと思います。それに、一途なところがとても河合さんらしいと思います。

でも、これで一区切りついでしまいました。森山のことは早く忘れたほうがいいと思います。河合さんなら、きっとすぐに素敵な人が見つかるでしょうから。

東海電力での仕事は順調ですか。河合さんが窓口の仕事をしているところは見たことがありませんが、きっと素敵だと思います。そんな河合さんに負けないように、僕は自分の目標を目指して全力を尽くします。そしていつの日か、谷口先生のような歯科医師になりたいと思っています。

また河合さんに会える日を楽しみにしています。

24th December, 1993

杉名僚二

桑田さん

さつき、また杉名さんのところにお見舞いに行つて来ました。主治医の先生は「そんなに心配はない」とおっしゃっていました。私はどうしていいかわからず、桑田さんに電話してしまいました。電話のあとすぐに桑田さんが来てくれて、杉名さんを病院まで連れて行つてくださったこと、とても感謝しています。

桑田さん、さつき病室に行つて杉名さんを見たら、静岡のバンドの写真を大切そうに持ったまま眠っていました。それは港で写した写真でした。いつも杉名さんが言っていた横浜でのライブの日の写真だと思います。あの写真の中にいる女の人、なんだかともうらやましくて……。

変なことを書いてしまつてごめんなさい。私、ちよつとどうかしてますね。杉名さんが退院したら、またMRCの練習を聴きに行きたいです。

一九九四年三月十一日

穂谷野ゆかり

河合律子様

前略 河合さん、お元気ですか。僕は塩尻市民病院に入院しています。三月十一日に

入院したのできようで四日目です。風邪をこじらせて肺炎になってしまったためです。それというのも、後期試験中に雪道でスリップして車をぶつけてしまい、修理に出している間スクーターに乗っていて、風邪をひいたことがそもそもの原因です。

冬になると雪道で車をぶつける人が多く、車の修理工場は修理を待つ車で一杯です。そのため車の修理は一か月くらいかかりそうですが、僕のほうはもうすっかり回復し、あすには退院できそうです。病院に入院するなどこれが初めてですが、土橋君や桑田君など大学の友人たちが毎日来てくれるのでとても助かっています。熱が下がりたいまはとても退屈で、久しぶりに本を読んでいます。

たった四日間ベッドの上で過ごしたのですが、だいぶ筋力が落ちてしまったような感じがします。歩くとふらつくような気がします。

河合さんも健康には十分気をつけてください。
それでは、また。

一九九四年三月十四日

草々

杉名僚二

第6章 大学五年

臨床実習の日々

河合律子様

暑中お見舞い申し上げます。

夏休みに入つて二週間近くが過ぎました。僕はまず、課題のレポートを先に片付けてしまつて、九月の前期試験の対策を立てようと計画しています。「信州は涼しい」と口では言いながらも、日中はそれなりに暑くなるので、静岡証券の退職金で買ったエアコンの涼風に当たりながら毎日レポートを書いています。

きのうから親戚の達郎君が僕のところに遊びに来ています。僕が大学一年のときに彼の家庭教師をしたのですが、そのとき達郎君は中学三年生でした。その彼も早いものでいまでは大学生です。しかも、僕の母校である神田大学の学生になったのです。そんなわけで二人で、神田大学の話題で盛り上がっています。彼は「大学を卒業したらアメリカに留学したい」という夢を持っているようです。

さて、河合さん、お仕事のほうは順調のことと思います。「河合さんは東海電力の上司からとても信頼されていて、職場の人から聞く評判もとてもいい」と、池島君が言っていました。僕はまだ大学生ですが、卒業したら今度こそは河合さんのように周

困から信頼される社会人になりたいと思っています。そして、僕が信州に来た目的は歯科医師になるためです。僕は何よりもまず患者さんに信頼される歯科医師になりたいと思っています。そのためにできるだけ多くの知識を得たいと思います。国家試験も必ず一回で合格し、三年後には必ず歯科医師になります。これが僕のいまの目標です。

レポートが一段落したら静岡に帰って、谷口先生のところに見学に行く予定です。帰ったらBlue Wingのメンバーに連絡しますので、久しぶりにみんなで集まりませんか。

それでは、また。

一九九四年八月十五日

杉名僚二

草々

河合律子様

前略 いま気分転換に外に出て近所を散歩したら、星がとてもきれいでした。九月に入って信州もだいぶ涼しくなり、外はもう肌寒いくらいです。

僕はといえば、きょうで基礎科目と臨床科目の講義がすべて終わり、十二日から前期試験が始まろうとしているところです。五年の前期試験は、二週間で十二科目の試験があり、これまでに増してハードなスケジュールです。僕たちは毎日その対策に追われています。二十代の最後の一週間は試験の準備で終わりそうです。

定期試験はこの前期試験が最後です。今回の前期試験が終われば、大きな試験としては卒業試験と国家試験を残すのみとなり、十月からはいよいよ一年間の臨床実習（ポリクリ）が始まります。臨床実習というのは、大学病院の中で先生について、処置を見学したり、アシスタントをしたり、また実際に診療をしたりする実習のことです。僕自身も信州歯科大学の大学病院でずいぶん治療を受けましたが、これからは一応スタッフとなります。

今年の春の入院もいい経験になりました。静岡証券を退職して以来、毎年一キログラムずつ増えていった体重が入院の間に以前の体重に戻りました。これによって、フットワークがよくなったばかりでなく、しばらく着られなかった服もまた着られるようになりました。

入院を経験してからというもの、大袈裟な言い方かもしれませんが、人生観も少し変わったような気がします。当たり前のことかもしれませんが、健康はとても微妙なバランスの上に立っていることを改めて感じ、歯科臨床だけでなく、基礎医学にも興味がわいてきました。とくに、異物を排除し、感染などを防ぐ働きである免疫にとっても興味があります。卒業後には大学院へ進学して、免疫などの基礎医学を学びたいと最近少し考えています。

それでは、また。

一九九四年九月九日 11:30 p.m.

杉名僚二

草々

杉名さん

きょうはおわびを申し上げます。土曜日はごめんなさい。杉名さんが眠っていたところを起こしてしまつて……。本当にごめんなさい。

きょうの午後（といっても夕方ですが）に電話をかけようと思つたのですが、たぶん前期試験の勉強をされていると思つてやめました。

私ってどうして杉名さんに迷惑ばかりかけてしまうのでしょうか。それに最近会うたびにけんかばかりしています。私が悪いのはわかっています。杉名さんにつらく当たってしまうのです。

前期試験が近いときに電話をかけたなり、手紙を書いたりしてごめんなさい。ただ、この手紙は土曜日のことを謝りたかったから書いただけなのです。もし迷惑ならば、もう電話をかけません。

一九九四年九月十一日

穂谷野ゆかり

杉名さん

きょうは最後の手紙にしようと思いましたが……。いままで本当にありがとうございました。それに桑田さんにもお礼を言いたいです。杉名さんに会わせてくれた人だから。

私は、杉名さんの心の中にいるあの人にはどうしてもかかないません。杉名さんは自分でも気がついていないのかもしれないかもしれませんが、あの人のが忘れられないのです。

いまだから言いますが、杉名さんが入院した日、杉名さんは熱にうなされていたのですが、私を見て「河合さん」って言ったのです。

私は河合さんに勝てそうにありません。杉名さん、私なんかと早く別れて、河合さんへ素直な気持ちを伝えてあげてください。

杉名さんとの思い出、もつともつとつくりたかった。とても残念なことばかりです。横浜にも一緒に行きたかったのに、本当に残念です。そして何よりも残念なのは、杉名さんのことを知り尽くせなかったことです。

本当にごめんなさい。せつかくペンダントをつけてくれているのに。私があげたいペンダント、捨ててください。

いままでありがとうございました。杉名さんと知り合ってからきょうまでの三年間は、長いようでも思えば短い時間でした。

それから、秋の定期演奏会、がんばってください。ベースを弾いているときの杉名さん、とても素敵でした。それから、部長さんにも伝えてください。私は軽音楽部を辞めます。

寂しさだけを手紙に込めて杉名さんに送ります。

一九九四年九月十三日

穂谷野ゆかり

杉名さん

二通の手紙を読んでびっくりされたと思います。「新しい彼女をつくってください」なんて書いてしまいました。あれは私の本心ではありません。本当は、杉名さんのことをまだ好きなのに……。まったく反対のことを書いてしまいました。

私は杉名さんの心の中にだれがいてもかまいません。もう手遅れかとも思いますが、どうしてもこのことを伝えたくて、書いてしまいました。

もう朝になってしまいました。いま、午前四時です。前期試験、がんばってください。そして試験が終わったら、もう一度だけ会ってください。

一九九四年九月十四日

穂谷野ゆかり

P.S. I love you.

河合律子様 (バースデーカード)

Dear R.Kawai,

Happy Birthday !

8th October, 1994

From : R. Sugina

追伸 穂谷野さんとは別れてしまいました。僕はまた一人になりました。

河合律子様

Dear Ritsuko,

I wish you a Happy Christmas !

一九九五年が河合さんにとって健康で明るく、幸せな一年でありますよう祈っています。

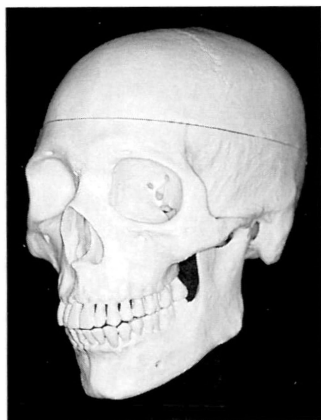
24th December, 1994

From : R. Sugina

河合律子様

前略 河合さん、寒い日が続きますがお元
気ですか。きのう僕は、四年ぶりに長野
市へ行ってきました。昨年買った頭蓋骨
のキットを正月から作り始めたのですが、
塩尻市では材料が揃わなかったので、買
い物のついでに長野市まで足を延ばして
きました。高速の長野道が豊科から長野
まで開通してだいぶたちますが、通ったのは初めてです。長野市周辺は間近に迫った
「冬季長野オリンピック」に向けて至るところで工事が行われていました。

信州に来てもう五年がたちますが、観光地らしいところにはほとんど行っていませ
ん。信州にいる間にあちこち行きたいと思っっていますが、臨床実習期間中はなかなか
そうした時間が取れそうにありません。いまだに上高地にも行ったことがないような
状態です。信州の観光は卒業してからの楽しみにとっておくことにしました。



[写真9]頭蓋骨の模型

これからまだ寒くなります。風邪などひかないように気をつけてください。草々

一九九五年一月八日

杉名僚二

〔写真9〕頭蓋骨の模型

1)の頭蓋骨は実物大のプレミアムモデルである (Skilcraft Life-Size Human Skull Anatomy Kit : Craft House Corp. 328 N Westwood Ave Toledo Ohio 43607)。このような模型が手元にあると解剖学の勉強がしやすい。1)の模型は東急ハンズ渋谷店で購入したもので、値段は当時たしか三千円だった。この模型の顎関節は可動するが、かみ合わせが悪いのが難点であり、咬合調整を行う必要がある。

河合さん、お元気ですか。

大学病院の窓から見える日本アルプスの山々が、青く霞んで少し遠くに見えるようになりました。

僕たちは臨床実習の前半を終え、同級生たちのケーシー(註7)もいまでは様になってきました。臨床実習といっても、最初は診療の見学、カルテの整理、受付といった雑用が多かったのですが、少しずつ先生のアシスタントにいたり、簡単な処置などをさせてもらえるようになりました。歯科も大学病院ではいくつかの診療科が分かれ

ており、これまでは補綴科（入れ歯による治療を行う科）、保存科（むし歯の治療を主にを行う科）、歯周病科（歯槽膿漏の治療を中心とする科）といった科を回りました。科によっては毎日山のようなレポートが出題され、徹夜に近い日が何日も続く科もあります。たいていの土日も、ほとんどレポートで終わってしまいます。レポートを



ケーシー

片付けてから何かしようと思いますが、レポートを書き終わるのはたいがい日曜の午後、下手をすると夕方です。実習が忙しいのは医学部や歯学部では仕方がなく、こういった生活にも慣れました。いまは小児歯科という比較的レポートが少ない科なので助かります。きょうは早くレポートが終わったので、たまには手紙でも書こうと思ってペンを執りました。

小児歯科の診療室に入ると、たいてい

一人くらいは泣いている子どもがいて、とてもにぎやかです。治療をいやがって暴れる子どもはまず母親が押さえつけます。それでもだめなら学生が加わって押さえつけます。最後にはネットできくりつけられて動けないようにされてしまいます。しかし、そこまでいやがる子どもは案外少なく、大部分の子どもはおとなしく治療を受けています。小児歯科の領域では、心理学を応用した小児の取り扱い法というのが確立されており、最初は治療をいやがって診療室に入るだけで泣いていた子どもでも、トレーニングを重ねていくうちにやがておとなしく治療を受けるようになります。これにはとても感心しました。毎日、新しい発見の連続です。

診療室で実際に診療を見るのは、教室で講義を聴いているのより何倍も勉強になります。そして、自分が術者になってみると、また違った点に気づきます。臨床実習の間はできるだけ多くの先生について、できるだけ多くの技術を学びとろうと思つていきます。そのために、ささいなテクニクでも漏らさずメモしています。このメモがこれまでミニ二六穴手帳の厚いバインダー二冊になりました。これは僕の財産です。このメモがどんどん増えていくのが楽しみです。

僕自身も治療を受けていますが、来週で矯正装置（歯に装着した金属製のブラケットとワイヤー）が外れます。これで三年半にわたる矯正治療もほぼ終わりです。矯正装置も入れた直後は、異物感が強くてしゃべるのもままならない状態でしたが、いまでは入っていることを忘れるくらいに慣れました。人間の体の適応能力に感心します。

長々と自分のことを書いてしまいました。河合さんも、気が向いたら近況など知らせてください。

それでは、また。

一九九五年三月九日 12:50 am.

杉名僚二

穂谷野さん

卒業おめでとう。遅くなっちゃったけれど、宅建の合格おめでとう。けんか別れして以来ずっとそのままだったので、あれから穂谷野さんがどうしているのかずっと気がかりでした。先日、電話で穂谷野さんの元気そうな声を聞いて少し安心しました。

あのときは本当にごめんなさい。僕のほうが穂谷野さんよりもずっと年上だから、穂谷野さんのわがままくらい聞いてあげなければいけませんでした。

穂谷野さんは、これから実家に戻ってお父さまのお仕事を手伝うそうですね。穂谷野さんは一人娘だから、実家に戻って来るのをお父さまは首を長くして待っていることと思います。

お父さまの事業のご発展と穂谷野さんの今後のご活躍を祈っています。穂谷野さんと過ごした三年間は決して忘れません。

楽しかった時間をありがとう。お元気で、さようなら。

一九九五年三月二十日

杉名僚二

第7章 大学六年

国家試験に向けて

河合律子様

前略 信州にもようやく春が来ました。僕は歯学部最終学年である六年生に無事進級しました。

さて、四月四日に入学式があり、今年も新入生を迎えました。僕の所属する軽音楽部にも現時点で八人の新入部員が入部しました。なにしろ小さい大学なので、八人の新入部員といえはかなり多いほうです。今年三年ぶりの学祭が六月一日から四日にかけて予定されているので、どのクラブも新入部員の勧誘に力が入っています。しかし、臨床実習に入ってから、なかなか楽器にさわる時間がなく、僕のバンド、M R Cの練習もようやくあすから始めるところです。

僕はM R Cでもベースを弾いています。僕はギターも弾きますが、ベースが一番合っているようです。定期演奏会があるたびいつも、河合さんにチケットを送ろうと思っているのですが、チケットが出来上がるのがいつも定演の一週間前といった状態だったのでいままで送ることができませんでした。でも、今度こそは送ります。今度の学祭のステージは、僕たち六年生にとって最後のステージなので、いままでにつくつ

たオリジナルの五曲を一挙にやる予定です。ですから今度の学祭はぜひ見てほしいのです。Blue Wingのメンバー全員にも声をかけますので、みんなで信州に来てください。

それでは、また。

草々

一九九五年四月八日 11:45 p.m.

杉名僚二

杉名僚二様

お元気ですか。信州を離れて早二か月がたち、都会での暮らしにも少しずつ慣れてきました。ときおりふと信州での生活を懐かしく思い出します。

私は四月から父の会社に勤めています。不動産の仕事も少しずつわかるようになってきました。

昨年の秋、杉名さんとお別れして、しばらくの間どうしていいかわからなかった私ですが、先日父の紹介でお見合いをしました。その人とは話が合ったのでまた会って

みようと思っっています。

毎日、臨床実習でお忙しいことと思います。お体には十分気をつけてください。杉名さんと過ごした時間はとっても楽しかったです。ありがとうございました。杉名さんが河合さんとうまくいくように祈っています。杉名さんのことはいつまでも忘れません。

さようなら。

一九九五年五月二十八日

穂谷野ゆかり

MRCのみなさんへ

お元気ですか。先日はありがとうございました。とても楽しい二日間でした。杉名さん以外は初対面の方たちばかりだったのに、久しぶりに会う仲のよい友達と愉快に時を過ごした、そんな感じがしています。

信州はとても素敵なおところですね。最初、お昼を食べたレストランがあった通り、あの両側のりんご畑とぶどう畑を見たとき、「うわあ、いいなあ」って感動しました。

信州にはスキーで何度も行ったことがあるのに、変ですね。でも、あの空気がとても心地よかったのを覚えています。ホツとしたせいもあると思います。

お刺身を送りたいと思ったのですが、送ることができないので、静岡市内でおいしいと評判の新茶を送ります。みなさんで召し上がってください。

それでは、また機会があったら、そちらのユニークで素敵な仲間の一員に加えてください。

一九九五年六月五日

河合律子

河合律子様

前略 三日間にわたった大学祭がきのう無事に終わりました。きのうは後片付けが夜の十一時までかかったのですが、きょうは通常通り病院実習があったので非常にきつい一日でした。

おとといは遠いところをありがとうございました。本当にBlue Wingのメンバーが来てくれるとは思いませんでした。おかげで思いがけずおまえの小さな手をMR

Cのメンバーや他の多くの人に聴いてもらうことができました。しかも、六年前、横浜でライブをやったときのよう、河合さんがピアノを弾いてくれたので、サークルの人たちが「とてもよかった」と言ってくれました。それに、Blue WingのみんなにもMRCの演奏を聴いてもらうことができました。

MRCは結成してから五年間がたっていました。僕はこれまでにいくつかのバンドに参加しましたが、五年間もの長い間続いたバンドは初めてです。最初は遊び半分で結成したバンドでしたので、こんなに長く続くとは思いませんでした。

MRCは、年二回行われる軽音楽部の定演には欠かさず参加していましたが、四年、五年と学年が上がるにつれ、なかなか練習時間もとれなくなり、いつも定演の直前になって悲鳴を上げながら曲をつくったり練習したりしました。去年からは卒業試験が十二月に行われるようになり、僕たち六年生は毎年十二月に行われる定演に参加できなくなつたため、きのうでバンド活動にひとまず終止符を打ちました。きのうの軽音楽部の定演は、いくつかのバンドによるオムニバス形式でCDにしようという案もあり、ひよっとしたら、Blue Wingの“おまえの小さな手”もCDになるかもしれませ

ん。楽しみです。それと、来年の三月、国試が終わったら、MRCのメンバーがばらになる前にこれまでにつくった曲をスタジオで録音しようと思っています。

さて、しばらく中断していた勉強会を五月から週一回ですが再開しました。毎週金曜日の晩、みんな眠い目をこすりながら国試の問題と格闘しています。友人たちとは臨床実習では別々の班なのでそれぞれが違う科を回っています。このため、臨床実習が始まってから半年以上の間、なかなか集まることができませんでした。しかし「このままでは臨床実習の期間中、何もできないままで終わってしまう」という危機感が募り、やっと再開にこぎつけました。僕たちの勉強会のメンバーは、始めたばかりのときにはもっと多かったです。いまでは六人になってしまいました。それでも六年間続いたことに自分たちでも驚いています。

それと六月に入ってから、周囲では卒業後のことが話題に上るようになりました。気がつけば、臨床実習もすでに三分の二が終わりました。僕もそろそろ卒業後の進路を真剣に考えようと思っています。これから谷口先生にも相談してみようと思っています。ですが、選択枝としては、大学院に進学する、大学病院に残る、ほかの大学の大学病

院に勤める、開業医に勤める、といったものが考えられます。

僕の希望としては、信州を離れて首都圏の大学の大学院か大病院に行きたいと思っているので、まずその方向で探してみるつもりです。それと、僕の主治医だった矯正歯科の先生に以前から「大病院に残らないか」と言われているので、そちらも少し悩んでいます。

いろいろ書きたいことがあるのですが、きょうはもう眠くて電池切れです。また手紙を書きます。

草々

一九九五年六月六日 2:15 am.

杉名僚二

河合律子様

前略 月末に試験があるというのに、僕はきょう一日ほとんど何もしないで過ごしてしまいました。どうせだから手紙を書きます。

先ほど近所を少し散歩しました。いつのまに雨が降ったのか、外へ出ると道路が濡れていました。日曜の晩ともなるとさすがに郷原街道を通る車は少なく、辺りはとて

も静かです。近所では去年あたりから広丘駅周囲の再開発が計画され、駅前から新しい道路がつくられたり、その道路が国道をまたぐための高架が建設されています。

僕が近所を散歩するのはたいがい試験の前なので、つまり年に数回ほどです。ここ何回かの散歩では、散歩をするたびに周囲の様子が変わっています。去年の夏には高架は国道のこちら側だけでしたが、いまでは国道の向こう側にもつくられ、あとは国道の上をつなぐだけになっていました。広丘駅の北側に広がっていた畑も区画整理されて住宅地となり、僕のアパートの隣にあった小さな公園もなくなっていました。公園がなくなったことよりも、そこにあったブランコがなくなってしまったことが残念です。

高架の途中まで上ると行き止まりで、そこから自分のアパートが見えました。去年の夏、その高架の建設現場を同じように一人で散歩しました。昨年夏からずっと混乱しながらいろいろなことを考えています。いつか河合さんにこれまでのことや、強がりではない僕の素直な気持ちを伝えたいと思います。

何だかわけのわからない手紙になってしまいました。少し自分の気持ちの整理が

できました。またいつかきつと楽しい話ができると思います。

それでは、また。

草々

一九九五年六月十九日 0:20 a.m.

杉名僚二

河合律子様

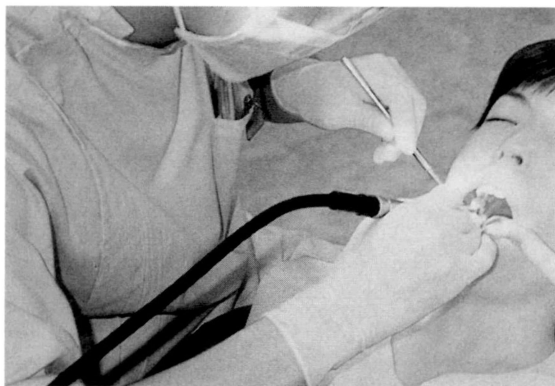
前略 河合さん、お元気ですか。信州ではここ一週間降り続いた雨が、土曜の夕方になつてやっと上がりました。きょうも一日中曇っていました。夕方、近くの文房具屋へと買い物に行く途中、わずかな時間ですが雲の合間から日が差ししました。買い物をするだけのつもりだったのですが、ふと部屋に帰るのをやめて車を走らせて、さつきまで残照を追いかけてきました。いまの季節、街灯がともってからもしばらく空が明るいままで。郊外に出て車を降りると（郊外といっても、広丘駅から五百メートルも行くとほとんど北海道のようです）、風が穏やかに吹き、野山の深い緑に吸い込まれそうなくらいです。信州の本当に短い夏が来しました。

ここ信州は、僕が生まれたころの日本がまだそのまま残っているところです。街灯

は蛍光灯ではなく白熱電球だし、夏にはアパートの階段の明かりを求めてクワガタが飛んで来ます。夏の間は過ごしやすくともいいところです。

さて、僕はいま、臨床実習の後期の後半に入り、相変わらず毎日実習に追われています。前期は見学が多かったのですが、後期は診療の介補（アシスタント）が中心の毎日です。いまは保存科という科にいます。保存科という名前は聞き慣れないと思いますが、主にむし歯の治療を中心とした科です。さすがに大学病院の中で一番患者さんの数が多く、広い診療室にはチェア（歯科治療用の椅子）（註8）が三十以上あり、毎日多くの患者さんが来院します。僕たちは、診療の介補、器具の準備、後片付けなどで目が回るくらい忙しく、毎日が月末の証券業界といった状態です。部屋に帰ってからも休む間もなくレポートを書いています。受付当番の日だけがほっとできる日です。この七月が僕の班のメンバーにとって、臨床実習の一番の山場です。

金曜日（七月七日）には、臨床実習の一環として、学生同士でむし歯の治療を行いました。僕は三海証券の歯科検診で谷口先生にむし歯を指摘されたのですが、以来、そのまま放置していた歯が一本あったので、それを治療してもらったことになりました。



[写真 10] エアタービン

大人の歯は生えたとの歯と違って、むし歯の進行が極めて遅い場合があります。僕の場合も、六年以上放置したにもかかわらず、とくに症状もなく、むし歯はほとんど進行しませんでした。その歯は、二十年前にアマルガムという金属で治療してもらった歯で、通常、アマルガムの寿命は十年程度といわれているのでよく持ったほうだと思えます。

僕は矯正治療とそれに伴う親知らずの抜歯（註9）は別にして、歯科治療を受けたのは二十年ぶりでした。毎日診療室にいてタービン（いわゆる歯医者さんのドリル）や器具に慣れてしまっていたはずだったので、チェアに横になり、患者の立場から診療室を見るとまた

別の印象を受けました。口の中でドリルを回されるといふのはやはりいやなものです。とくに今回は同級生に治療されるということで恐怖が一層増加しました。それでも実習だからと我慢して、アマルガムとむし歯になった部分を削ってもらったところ、かなり大きな穴が歯の真ん中にできてしまいました。奥歯のむし歯は表面よりも歯の内側で広がるためです。僕の歯を削ってくれた徳竹君は、僕の歯をどうやって治療してよいのか、途方に暮れていました。

僕も徳竹君を治療しましたが、幸い彼にはほんの小さなむし歯が一本あるだけでした。僕は彼の歯にレジンを充填するだけで難なく終わりましたが、僕の歯にはインレー（註10）を詰めるので、徳竹君にはこれからラポ（註11）でインレーを鑄造する仕事が続いていきます。

周囲の同級生たちの口の中を見てみると、歯学部でも意外にむし歯が多いのに驚かされます。僕は奥歯四本にアマルガムが詰めてあるだけで、それ以外にはむし歯はないので、むしろ少ないほうでした。

話は変わりますが、先週、教務科の掲示板に求人掲示が張り出されました。八月

になると三週間の夏休みがあるので、それを利用して卒業後の勤め先を探そうと思っています。まず最初に、神奈川県にある西湘大学の口腔外科へ見学に行く予定です。掲示を見ただけではどんなところかはわかりませんが、小田急線の駅にたしか西湘大学と名のついた駅があったと思うのでたぶんそこだと思います。そこだったら静岡からも比較的近いので、またBlue Wingの活動も再開できると思います。それに僕がかねてから横浜の近くに住みたいと考えていたので、早速見学に行ってきました。八月になるのを楽しみにしてなんとか今月を乗り切ろうと思っています。

それでは、また。

草々

一九九五年七月九日

杉名僚二

追伸 河合さんと大学祭で会って以来、河合さんへの気持ちを抑え切れないほど大きくなっていることに気づきました。河合さん、まだ森山のことを想っているのですか。

長いと思っていた六年も、卒業まであと九か月になりました。僕はこれからもっともっと自分を磨き、河合さんにかなうような人間になるべく努力します。それにはま

ず、来年の四月に河合さんに国家試験合格を報告できるようにがんばります。

河合さん、できることならそれまでいまのままできてください。

〔写真10〕エアタービンを使った高洞形成

エアタービン(air turbine)は圧縮空気を使って500,000rpmという高速でバー(bar)を回転させる装置である。手に持つ部分はハンドピース(handpiece)と呼ばれ、その先端に目的に応じたバーを装着する。エアタービンなどの回転切削器具で歯を削る際には摩擦によって熱を生じるため、エアタービンの先端には注水冷却装置が備えられている。

杉名さん

お手紙ありがとうございます。杉名さんのお気持ちはうれしいのですが、私はどうしたらよいかわかりません。まだ森山さんのことが忘れられず、どなたともお付き合いするつもりはないのです。

それと、佐藤さんが今年の六月に神戸に転勤になったのですが、毎週のように私に会いに来てくれます。会いに来てくれてもお断りすることが多いのですが、遠くから来てくださっているので申しわけなく思います。杉名さんのこともあるので、来週は

佐藤さんにお会いしてお話してみようかなと考えています。

もう少し考えてみて、自分の気持ちをはつきりしたらご連絡を差し上げます。

一九九五年七月十六日

河合律子

河合律子様

暑中お見舞い申し上げます。

暑い日が続きますが、お元気ですか。きょう、僕は中林君に連れられて蛍を見に行きました。蛍がいる場所は僕のアパートのすぐ近くだったので、そこに行くまでは半信半疑だったのですが、大学までの道からちょっと外れたところに本当に蛍がいましました。

彼が連れて行ってくれたのは、奈良井川沿いの水田の畦道でした。車を止めてハザーランプだけを点灯させると、蛍が車の周囲に集まって来ました。蛍を近くでよく見ると、ハザーランプとほとんど同じ間隔で点滅していました。その幻想的な光景にしばし時間を忘れました。こんな方法で蛍を見ることができるとは思いませんでした。

今年の夏は、おそらく信州で過ごす最後の夏になると思います。蛍を見ることができて、信州での思い出がひとつ増えました。

それではまた。

一九九五年八月五日

杉名僚二

河合律子様

前略 僕はいま、小児歯科の診療室にいます。きょうは平日なので、日中患者さんはまばらです。信州の学校は夏休みが短く、八月二十日から授業があるからです。あす提出のレポートを書き終わったので、手紙を書いています。

夏休みが終わり、また慌ただしく毎日を過ごしています。先日、十月から始まる勉強会のため、学生の自主的な組織である「卒業準備委員会」が発足しました。学生間の選挙で五人が選出されたのですが、どういうわけか僕もその中に入っていたため、会計を担当することになりました。最終的な投票の前に、自分には務まらないと思い、一度は断りました。しかし、委員会に入ってしまった以上、できるだけのことにはやる

うと思つています。それに、副委員長にはMRCのボーカルの榊原さんがなったので、かなり心強いです。

夏休みには、静岡医科大学、西湘大学、横浜医科大学の口腔外科を見学して来ました。最初の静岡医科大学でその大きさに驚いていたら、西湘大学、横浜医科大学もそれを上回って大きい大学病院でした。どの大学でも意外なほどの歓迎を受け、静岡医科大学や西湘大学ではオペの見学だけでなく、オペのアシスタントまでさせてもらいました。手術着を着て実際に手術に参加させてもらうなど思つてもみなかったことなので、剪刀（註12）の持ち方もわからず戸惑いましたが、いい経験になりました。口腔外科はとてもやりがいがありそうです。

これらの病院にはオペ室が十室もあり、オペ室のフロアだけでも広くて迷いそうになりました。いずれの病院でも症例の数はとも多く、前述の三病院での三日間はとても勉強になりました。一般歯科治療を行う上で必要な外来小手術を学びたいという気持ちで口腔外科を訪ねたのですが、認識が甘かったことを知りました。

医学部の口腔外科では、「歯科口腔外科」という診療科名のところでも一般歯科的

な治療はほとんどやっていないというのが現状のようです。いずれのところも多くの入院患者を抱え、交通事故などによる救急患者なども多く来院してくるようです。研修医の研修制度も一年目は外来、二年目は救急センターと麻酔科、三年目からは病棟、といったような医科の研修医に準ずる研修制度でした。そして、どこも二年目、三年目のドクターが執刀していることに大きな驚きを覚えるとともに、口腔外科をやるには一般歯科とはしばらく離れるくらいの覚悟が必要だと感じました。口腔外科の研修医になると、病棟で点滴をしたり、指示（註13）を書いたりという仕事が主で、「歯を削る」ということはほとんどない」とのことでした。

この三つの大学を見学したと谷口先生に話をしたところ、「免疫学を学びたいのであれば横浜医科大学がよい」と教えてくださいました。横浜医科大学は、僕が見学した際に受けた印象もよかったので、横浜医科大学に出願してみようと考えています。出願は十月なので、それまで口腔外科を選ぶか一般歯科を選ぶかじっくり考えようと思っと思っています。僕はこれまで一般歯科をやりたいと思っっていました、まだまだ勉強したいことがあり、とくに免疫学などの基礎医学を学びたいので、どこかの大学院

に進みたいと考えています。そしてできれば横浜医科大学の大学院に進みたいと思っています。それがだめだったら、どこかで勤務医になろうと思っています。

僕の実家は自営業なのでそちらも気がかりですが、幸いいまのところ順調です。僕の両親が生活していくくらいは何とかなりそうなので、あと十年くらいは自分のやりたいようにやるつもりです。

それでは、また。

一九九五年八月二十九日

杉名僚二

草々

河合律子様

拝啓 九月に入って信州は至るところに秋の気配が感じられるようになりました。朝晩は半袖ではもう寒いくらいです。九月も半ばを過ぎると、足元にはストーブがほしくなります。

きょうはさつきまで友人五人と僕の部屋で勉強会をしていました。友人たちが帰ったあとの僕の部屋は、さつきまでのにぎやかさが嘘のように静かです。夏休み以降、

勉強会の回数を水、金、土曜の週三回に増やしました。平日の勉強会は午後八時からやるのですが、これが思ったよりもきつく、頭は半分寝た状態でやっています。きょうは小児歯科の試験があったので、みんな一層疲れていました。

臨床実習が終わると、次は卒業試験と国家試験（註14）です。卒業試験や国家試験には基礎科目もあります。解剖学、組織学といった科目に至っては、二年生、つまりいまから四年も前に学んだ科目であるため、かなりの部分を忘れてしまっています。そこでまず、後輩たちに貸していたノートを回収しました。

五年分のノートが部屋に戻ってくると、その置き場だけもかなりのものになり、ただでさえ実習の器材、楽器やオーディオなどがあって狭い部屋がさらに狭くなりました。できるだけ縦方向に収納しようと思い、居間である七畳間の壁一面、勉強部屋である四畳半の壁三面を天井まで棚にしてあるのですが、その棚は重さで床が抜けそうになっています。いまではキッチンにまで本棚を置いてあります。

僕の部屋のキッチンには、六人が座ることができると、共同で買った大きなホワイトボード、二年前に買ったコピー機があり、ちょっとした会議室

のようになっていきます。そこで友人たちと国家試験の問題集を一問一問調べながら解いています。平日はレポートなどに追われて一人では問題集をなかなかやることのできないので、僕にとってはこの勉強会はとても助かります。

話は途中なのですが、きょうはここまでで限界です。眠くて何を書いているかわからなくなりました。続きはまた今度書きます。

それでは、また。

敬具

一九九五年九月七日 1:45 a.m.

杉名僚二

河合律子様

前略 先週で一年間の長きにわたる臨床実習がようやく終わりました。最終日にはクルスの連中と打ち上げコンパをやりました。「臨床実習が終わったときは、三日間続けて打ち上げをやったよ」と、先輩たちから聞いていたのですが、その気持ちがよくわかりました。みんな、自分から飲むは、吐くは、叫ぶは、暴れるはで、すごい騒ぎになりました。

実習から解放されたこの解放感は例えようがありません。気がつけば一年前に買いだめしておいたレポート用紙があと数冊しか残っていません。この一年間で一体何枚書いたかわからないくらいたくさんレポートを書きました。これからはレポートを書くことも製作物に追われることもなくなつたのですが、まだ信じられません。

今週は補講期間でしたが、実習がすべて終了した学生にとっては一週間の休暇となりました。僕はこの休暇を利用して、臨床実習の間に書いたレポートやノートを整理しました。それと、この休みを利用して横浜医科大学の出願に行ってきました。横浜医科大学は横浜にある大きな大学です。附属病院の病室からは海が見えたばかりでなく、あなたにマリントワーやベイブリッジも見えました。今回は出願を前提としての見学であり、面接を兼ねたものでした。見学したその日のうちに健康診断を受け、出願の書類も作成し、提出してきました。

その日は横浜市内のホテルに泊まり、夜、本牧埠頭に行つて来ました。一人で海を眺めながら、横浜でライブをした日のことを思い出しました。埠頭からは、あの日と同じようにベイブリッジが見えました。ライブの打ち上げのあと、ベイブリッジを眺

めながら、Blue Wing のみんなと夜が更けるのを忘れて話しましたね。僕はあの時の河合さんの横顔がいまでも忘れることができません。

その日、僕は来年横浜に来ることを心に決めました。十一月中旬に専門科目と英語の試験があり、その結果次第ですが、いまのところ横浜医科大学を真剣に考えています。

就職についてももうひとつ話があります。予防歯科学講座の助教授に「大学に残らないか」と言われたことです。その講座では「助手の待遇で迎えてくれる」とのことでした。

卒業後に大学に残った場合、臨床系の科では、一、二年間は無給に近いようです。助手という待遇ならばきちんと給料がもらえるのでとてもよい条件です。それに大学に残れば研究ができるので、その点も十分に魅力的です。矯正歯科で僕の主治医だった先生がこの四月に退職されたあと、僕は大学に残るということはほとんど考えていませんでしたが、予防歯科の助教授の言葉に心が揺らぎました。

僕はいずれ臨床医になるつもりですが、以前手紙に書いたように何年かは研究をし

たいと思っています。いまのところ大学院に行きたいと考えて探しているところなのですが、母校以外の大学に行くというのはかなり厳しいようです。現実的な方法としては、まずどこかの大学の講座に医局員として籍を置き、そして二年目、三年目で大学院に行くという手があるようです。しかし、まずは自分で首都圏の大学の大学院を探して直接当たってみるつもりです。そんなわけで、予防歯科の先生からのせつかくのお誘いなのですが、いまのところ断るつもりでいます。

来週から日中は六年間の総まとめである総合講義と、夕方からは卒業準備委員会が主体となって行う自主的な勉強会が始まります。総合講義は卒業試験に向けたもので、一方、学生が行う勉強会は国家試験に焦点を絞って行われます。この夕方の勉強会が始まると、土曜日も祝日もなく、休みは日曜日だけという話を先輩から聞いています。しばらくは手紙も書けなくなるかもしれませんが。

卒業後、どこへ行くかまだ見当もつきませんが、どこにいても河合さんのことを想っています。

それでは、また。

草々

一九九五年十月七日

杉名僚二

追伸 Happy Birthday !

信州から心を込めて、乾杯！

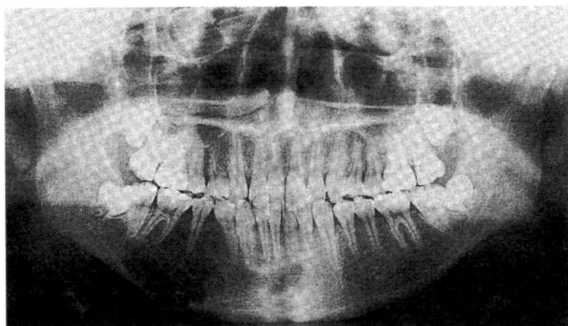
河合律子様

拝啓 この季節、信州歯科大学は、ぶどう畑から漂うナイアガラの甘い香りに包まれ、キャンパスの空にはたくさんさんのトンボが舞っています。先週、「しばらく手紙を書けないかもしれない」と言っておきながら、また手紙を書いていきます。

僕たち六年生は臨床実習が終わり、先週から日中は総合講義、夜は学生主体の勉強会と、臨床実習とはまったく違う生活が始まりました。先輩から話を聞いていた通り、土曜日も祝日もなく、毎日夜九時くらいまで大学にいます。それでも臨床実習中のようにレポートや製作物がなかったため、その分とても気が楽になり、やっと自分の勉強ができるようになりました。休み時間などは、友人たちと窓の外を眺め、臨床実習中の出来事の話でいつも盛り上がっています。きつかった一年間の臨床実習でしたが、終

わってしまえばよい思い出です。いまはみんな、実習がなかった一年生や二年生のころに戻ったような感じですよ。

総合講義では、症例の写真やX線写真を見て診断する講義を受けたり、症状から診断する練習をしたりしています。そこで思うのは、当たり前ですが、一年間の臨床実習は決して無駄ではなかったということです。教科書の文章を読むだけなのと、実際にその疾患を目で見るのとでは大きな違いがあります。この一年間で不思議なことに、X線写真を見るだけで、およそどんな疾患か見当がつくようになっていました。もちろん、たった一年間ですべての疾患や症例を見たわけではないのですが、夏休みに見学した分も含めて、少なくとも自分が目で見た症例とい



[写真11] オルソパントモグラム

うのは、診断をする上でたしかな知識となっています。

さて先ほど日曜日の夕方、外に出るともう夕闇が迫っていました。日が暮れるのがどんどん早くなっているのが毎週わかります。さすがに、日曜日に外へ出て暗くなっているとは少し寂しい気がします。日曜の夕食後には、本屋に立ち寄るのがすっかり習慣になりました。そのほかにも週に二度や三度は本屋に行くようになりました。僕はテレビはほとんど見ませんが、本がなくてはいられません。僕は小学生のころから本が好きで、何時間でも本屋で立ち読みをしました。ですから、これが本来の自分なのだなと感じています。

同じ大学生でも、文系の大学生のように自由な時間が持てませんが、いまのような生活にもすっかり慣れ、それなりに楽しみというのも見つけました。本屋で立ち読みすることのほかにも、音楽を聴いたり、楽器を弾いたり、温泉に入りに行ったり、ドライブしたりと、日曜日の夕方からだけでもいろいろなことができます。

夜も更けてきたので、きょうはこれくらいで書くのをやめます。信州歯科大学は小さな大学なので、毎日同じ顔しか見ていない僕にとっては、こうして河合さんに手紙

を書くことはとてもいい気分転換になります。時間を見つけてまた手紙を書きます。

それでは、また。

敬具

一九九五年十月十五日

杉名僚二

追伸 きょう、ドライブをしていて夜景がきれいな公園を見つけました。松原中央公園という公園です。高ボツチ高原へ向かう道の途中にあるのですが、その公園の周囲だけ新興住宅地になっていて、信州とは思えないような都会的な一角となっている不思議な空間でした。あの夜景を河合さんへ贈ります。

〔写真11〕オルソパントモグラム

オルソパントモグラム(orthopantomogram)は断層撮影の原理を利用したX線写真であり、パノラマ撮影法のひとつであるオルソパントモグラフィ(orthopantomograph)によって撮影されたX線写真である。今日、単にパントモといえはオルソパントモグラフィを指すことが多い。上下の顎骨と歯について多くの情報が得られるほか、上顎洞、鼻腔、顎関節の診断にも有用である。

河合律子様

拝啓 信州は朝晩めつきり寒くなり、吐く息がもう白く見えます。今年も信州で収穫

されたぶどうがワインの新酒となつて店頭に並びました。毎年楽しみにしてゐる銘柄があつて、今年も二本買いました。これはワインというよりも一〇〇パーセントのグレープジュースに近い感じのもので、毎日、ちよつとずつ飲んでいますが、とてもおいしいのですぐになくなつてしまいます。

きょうは暗くなる前に外に出ました。出かける前に財布を見たら一万円とちよつとあつたのですが、ガソリンを入れ、灯油、文房具、食料品などを買つたら、帰りに雑誌をかうお金もなくなつてしまいました。それでもなけなしの小銭を持つて「崖の湯」という温泉に行つて来ました。

信州歯科大学は信州にある大学というだけあつて、ここの学生にとつては、温泉は結構メジャーな娯楽です。僕たちは、いつも試験が終わるとだれかの部屋で打ち上げをしますが、打ち上げのあとに温泉に行つたりもします。そのような学生生活を経験できる大学はおそらくここだけではないでしょうか。

さて、その崖の湯温泉ですが、ここから近く、高ボツチ高原の中腹にある温泉です。そこは、温泉宿が四、五軒あるだけの温泉で、まさに秘湯という感じの温泉です。晴

れていれば露天風呂からの眺めは最高で、松本市から日本アルプスまで一望できます。日曜の夕方ともなると客も少なく、僕一人で貸し切り状態のこともよくあります。崖の湯温泉には臨床実習中からときおり一人でふらつと行くようになり、疲れたときなど、とてもいい気分転換になっています。こんな近くに露天風呂があるなど考えてみればぜいたくなことで、温泉につかっていると、この暮らしも悪くないなと、ふと思います。崖の湯温泉からの帰り道は夜景がきれいで、思わず車を止めて見入つてしまいます。

臨床実習が終わってから、早くも一か月がたちました。しばらくの間、だれもが実習がなくなつて魂が抜けたようになっていましたが、徐々に総合講義や勉強会の生活にも慣れてきていました。講義といつても、蓋を開けてみると毎晩九時近くまで大学にいます。「臨床実習が終われば自分の勉強ができる」などと思つていたら、平日だけでなく、土曜日も大学に行かなければならないので、なかなか時間がつくれません。時間的には臨床実習と同じくらいいきつい感じがします。

僕たち卒業準備委員会も本格的に活動を始め、毎日忙しく過ごしています。結局、

僕たち六人が個人的にやっている勉強会のメンバーからも、僕を含め四人が卒業準備委員となりました。ですから、自分たちの勉強会はいまは土曜日の夜だけしかできなくなっていました。

大学内には卒業準備委員会の部屋があるので、去年までの卒業試験の問題や、過去の国家試験の問題などを集めて、みんなで分析したり、それをもとに資料をつくったりしています。「毎年六年生が遅くまで残ってやっていたのはこれだったのか」といまようやくわかりました。

僕はかつて証券会社に勤めていたという理由で卒業準備委員会の会計を担当することになりました。謝恩会の会計も卒業アルバムของ会計も僕の仕事です。とくに謝恩会は各地のOBの先生を呼んだりするため、動くお金が大きいようです。会場も去年は松本市内で一番大きなホテルである信州グランドホテルを借りたため、かなりの金額がかかったようです。

これからさらに仕事が増えると思いますが、いまでも委員長の平松君と副委員長の榊原さんの二人は毎日夜中の十二時過ぎまで残って仕事をしているので、それを考え

ると仕方がありません。

そんなこんなで毎日を過ごしています。こうして手紙を書くことによつて、日々の生活を忘れ、自分を取り戻すことができます。それと、卒業後の道も少しずつ模索しています。来月の十日にはまた横浜へ行きます。横浜医科大学の大学院を受験するためです。大学院の試験は英語と専門科目と面接の三つです。僕は横浜医科大学の大学院に進みたいと真剣に考えていますが、見学に行つたときの手応えからすると、どうも厳しいのではないかと思つています。そこで、横浜医科大学がだめだった場合の次の手を考えています。いずれにせよ、首都圏のどこかに行くことになりそうです。

それではまた。

敬具

一九九五年十月二十九日

杉名僚二

河合律子様

拝啓 信州では十一月の中旬には初雪が降りました。もう静岡の真冬以上に寒い日が続いています。

さて、卒業準備委員会も軌道に乗り、僕は相変わらず一日の大部分を大学で過ごしています。委員長の平松君に至っては、準備委員会室で生活しているといっても過言ではない状態です。

総合講義のほうは、最初の卒業試験の前日（十二月二十日）で終わり、一月からは正規の講義はなくなります。とはいっても、卒業試験は一月中続くので一月に入っても卒業準備委員会の活動は続きます。一月に入ると希望者を募つての特訓なども行います。三月まではこの生活が続きます。そしてきょうから教室の掲示板に大きな数字を張り出して国家試験に向けてカウントダウンを始めました。国家試験は三月十九日、二十日なのできょうは百十三日前です。

先日横浜医科大学の大学院を受験して来ました。専門科目はまあまあだったと思うのですが、語学の試験はいまひとつでした。結果は十二月十五日にわかります。横浜医科大学がためだったなら、すぐ次に向けて動きます。

話は変わりますが、昨日僕の高校の同級生で、僕と同じく歯学部に入り直した石井君から電話がありました。「来年の四月の終わりに結婚する」とのことでした。それ

と森山夫妻は、来年の四月から三年間、海外派遣教員として異国の地に赴くことになりました。「まだ行き先は決まっていない」とのことですが、政情が安定している国であつてほしいと思います。卒業して時間ができたら、ぜひとも彼のところへ行くうと思ひます。

それでは、また。

敬具

一九九五年十一月二十八日

杉名僚二

杉名さん

お手紙ありがとうございます。なかなかお返事を書くことができなくてすみません。毎日、卒業試験や国家試験に向けて勉強で忙しいと思います。でも、お忙しい中どうしてこんな私にお手紙をくださるのかと、いつも考えています。

目標を持つてそれに向かつて努力している杉名さんはとても素敵だと思います。私はそんな杉名さんのことをとても尊敬しています。そんな杉名さんに対して、私は今のところ何の目標も持っていません。私はきっと私は杉名さんが思っているような人

間ではないと思います。

それと、お手紙の中になりましたが、森山さんは海外に行かれるそうですね。突然の話で驚いています。どこの国に行かれるのでしょうか。森山さんの行く先が決まったら、また教えてください。

杉名さんが国家試験に合格されるように祈っています。お体に気をつけてがんばってください。

一九九五年十二月十日

河合律子

河合律子様

(クリスマスカード)

I wish you a Merry Christmas and a Happy New Year !

きのうから雪が降っています。窓の外は一面の銀世界です。とても静かで、ときおりタイヤチエーンを巻いた車が通る音だけが聞えます。その音がまるでソリの音のようです。

24th December, 1995

杉名僚二

追伸 十二月十五日に横浜医科大学大学院の合格発表がありました。僕は来年の四月から横浜医科大学の大学院で口腔外科を専攻することになりました。それと、森山夫妻はバングレイシユに赴任することが決まりました。

〔写真12〕信州の冬

松本平は、冬の寒さは厳しいが、雪はそれほど多くない。十二月になると雪が降るが、新年を迎えるころまでには解けてしまうことが多い。そして一月に入ると雪が降り積もるようになる。松本平では厳しい寒さのため、除雪された雪は日の当たらない場所では氷の塊となり、そのまま春を迎える。



〔写真12〕信州の冬

河合律子様

前略 河合さん、お元気ですか。一九九五年も残りあと二十三時間となりました。この手紙が着くころには新しい年になっていくことでしょう。

十二月二十一日、二十二日に一回目の卒業試験がありました。十二月二十九日まで卒業準備委員会の冬季補講があったので、実質的な冬休みはきのうからです。卒業準備委員会が主催する勉強会も軌道に乗り、問題演習をやるたびに平均点が上がってきました。この冬季補講は学生が主体で行い、委員長の平松君がいくつかの講義を担当しました。僕はその資料づくりを担当し、毎日たくさんのプリントを印刷しました。

きょうはしばらく片付けていなかった部屋の大掃除をしました。二回目の卒業試験は一月十日、十一日に行われるので、卒業試験の間を縫って、いまから神田の湯島天神に合格祈願に行きます。そしてそのまま静岡に帰省しようと考えています。毎年の例だと三十一日は都内はすいていてとても快適なはず。湯島天神は神田大学から歩いて十五分くらいの下町情緒にあふれたところであり、かつて神田大学の美術部の連中とよく行きました。境内の至るところに数え切れないほどたくさんの絵馬があり、

目につくものすべてが合格祈願です。僕もそのご利益にあずかろうと思います。せつかくお茶の水に行くので、ついでに楽器や古本でも探して、それから渋谷に寄つてな
どと、あれこれ考えています。

さて、一緒に勉強してきた五人の友人たちも卒業後の進路が決まりました。桑田君は信州歯科大学の保存科に、古澤君は南海歯科大学の口腔外科に、土橋君は関東歯科大学の大学院に、中林君は大阪の歯科医院に、それぞれ行くことになりました。残る一人の川崎君は、一月に行われる二回目の卒業試験の翌日に大学院の試験を受けに行きます。川崎君は真面目なやつなのできつと大丈夫だと思えます。

友人たちは全国に散ってしましますが、「卒業後も年に一回くらい集まって今度は臨床の勉強会をやりよう」と話しています。卒業するためには卒業試験と国家試験を乗り切らなければなりません。冬休みが終わるとすぐに第二回目の卒業試験があります。一月二日からは、また僕の部屋で勉強会をやる予定になってるので、一日の晩には信州に戻ります。池島君たちから正月に静岡に帰ったら寄るよういわれたのですが、静岡の友人たちと会うのは国試が終わってからにするつもりです。

来年が河合さんにとってよい一年であることを祈念してペンを置きます。それでは、
また。 草々

一九九五年十二月三十一日 1:35 a.m.

杉名僚二

河合律子様

拝啓 信州はいまが一番寒い季節です。部屋に帰って温度計を見ると0℃です。外は雪景色です。信州の冬もこれで最後かと思うと、少し寂しい気もします。

考えてみれば、僕はここで小学校一年生が六年生に、あるいは中学一年生が高校三年生になるまでの長い時間を過ごしました。僕は友人たちと入学したときに「六年間無遅刻無欠席」の目標を立てましたが、土橋君、中林君、川崎君、榎原さんと一緒にその目標を達成することができました。六年という長い時間には四十度の熱を出したこともありましたが、ふらふらになりながらも大学に行きました。これは、僕にかぎっていえば、神田大学での四年間、バイトとサークルに明け暮れて講義にあまり出席しなかったことへの反省の結果です。でも、一人では途中でくじけてしまっていたでしょ

う。友人たちには感謝しています。

さて、いま僕は卒業試験が終わって一息ついているところです。暇をみつけて手紙を書こうと思うのですが、結局月に一回くらいになってしまいます。

僕たち六年生は、去年の十二月二十一日から一月二十三日までの一か月間は卒業試験に追われていました。卒業判定は二月八日ですが、それまで待つていられないので、卒業準備委員会では学生全員に各自の解答を提出してもらい、自主的に自己採点をしました。僕は十月以来、卒業準備委員会の雑用に追われながらの試験だったので不安がありました。自己採点の結果では何とかうまく乗り切れたと思います。次はいよいよ三月十九日、二十日の国家試験です。僕は四月からの行き先が決まっているので、何としてでも国家試験に合格しなければなりません。

横浜には、高校の同級生、信州歯科大学軽音学部の先輩、神田大学のバンド仲間など、何人かの知り合いがいます。その人たちに横浜に行くことを連絡したところ、みんな喜んでくれました。とくに神田大学のバンド仲間である吉田君とは、十年前にバンドを解散したときから「またいつか一緒に音楽をやろう」と言っていたので、いま

から楽しみです。吉田君は六年前Blue Wingにラグタイムを紹介してくれた人です。音楽だけでなく、僕はさまざまな面で彼から影響を受けました。

音楽といえば、僕のバンド（MRC）でギターを担当していた藤村君という軽音の後輩は、MRCが解散したあと、Saveというバンドをつくって音楽活動をしています。彼は、聞くところによるとプロを目指しているそうです。去年の十月には、SaveのはNHKヤングバトルの全国大会まで進みました。決勝戦はNHK衛星放送で放映されました。Saveはいま、毎週松本市でのライブ活動と、月に何回か原宿の歩行者天国で演奏しているそうです。その藤村君がSaveのメンバーを探しているとき、僕もベーシストとして誘われました。しかし、僕は彼ほど音楽にのめり込むことができなれないと思い、断ってしまいました。断ってみたいものの、音楽をやりたい気持ちになつたわけではなく、四月からまた音楽をやりたいと思っています。

そういえば、先日忘れていたところに「半年前の学祭のライブCDができました」と後輩から連絡がありました。オムニバスのCDということだけは聞いていますが、卒業試験中で詳しいことはわからず、僕のバンドからどの曲が選ばれたのかさっぱりわ

かりません。いずれにせよ一曲だけだと思えますが、僕の曲がCDになりました。まだ手元にはありませんが、機会があつたら聴いてください。

卒業式以降、四月までの間にバンドの曲を録音し直すつもりだったのですが、その時間はなさそうです。たぶん、四月の頭から横浜医科大学に行くことになりそうです。四月五日には大学院のガイダンス、四月八日には大学院の入学式があるので、三月末の一週間で引越しをしなければなりません。まず二月の中旬には、医局へのあいさつを兼ねて横浜へ部屋を探しに行こうと思つています。

僕はこの六年間、口癖のように「卒業後は横浜へ行きたい」と友人たちに言っていました。以前にも手紙に書いたように、十年前に一年間だけ神奈川県に住んだことがきっかけだったのですが、六年前、横浜でライブをやったあの日のことが忘れられません。僕は神田大学での四年間、何もつかめずに終わってしまい、「これでよかったのか」と何度も何度も自問自答しました。それ以来、「もう一度神奈川県に住もう」と心に決めていました。やり残したことが何かはまだ自分でもわかりませんが、僕でなければできないことがあるような気がします。

横浜医科大学の口腔外科には一人として知っている人がいないので、新しい生活に對しては期待とともに不安もありますが、六年前、信州歯科大学に来たときもそうでした。いまではどこに行っても何とかやっていけると思いますが、信州歯科大学に残るように言ってくださった予防歯科学の助教授にも丁重にお断りしました。

まだ当分の間、僕はやりたいことをやって生きていきます。

それでは、また。

一九九六年一月二十七日

杉名僚二

敬具

河合律子様

前略 部屋に帰ってすぐに三台のファンヒーターを全開にして一時間、部屋の中がようやく暖まってきました。ブラインドを閉めようと思ひ窓を見ると、窓の水滴が凍りついています。先週手紙を書いたのでこれと云って新しい話題はありませんが、また書いています。

卒業試験が終わり、正規の講義や試験はありませんが、僕たち六年生は毎日勉強会

があるため、卒業試験前と変わらない生活を送っています。二月に入り、四年生以下の学年は後期試験が始まりました。僕たちは、レポートも定期試験も出席もないので、やっと自分の勉強ができるといった感じでした。

さて、先日軽音楽部の追い出しコンパがあり、僕たち六年生七人はクラブから追い出されました。後輩たちから記念品として、半年前の大学祭での定期演奏会をCDにしたものをもらいました。

ライナーノートが間に合わなかったので、曲の解説をします。僕は十曲目と十一曲目に参加しています。十曲目はMRCの「本牧埠頭午前0時」です。十一曲目はBlue Wingの「おまえの小さな手」です。CDを同封しますので聴いてください。

草々

一九九六年二月三日

杉名僚二

おまえの小さな手

作詞・作曲 杉名僚二

おまえの小さな手はいつも俺の心を温めてくれた
おまえのその瞳はいつも俺のことを見ていてくれた

たとえいつか遠く離れても俺たち二人の
気持ちは永遠に変わらないと誓ったあの日

二人の夢を話したこの街を出る時が来たけれど
俺はあの日描いた二人の夢をまだ追い続ける

おまえの小さな手はいつも俺の心を温めてくれた
俺の夢を信じて俺のそばで俺のことを支えてくれた

おまえの声 そのぬくもり 肩にかかる長い髪
忘れはしない二人が出会い過ぎたこの街

悲しい時もつらい時もいつも笑顔をくれた
ほんの少しの幸せさえやれなかったのに

おまえの小さな手はいつも俺の……



[写真13] 信州歯科大学軽音楽部のライブCD

〔写真13〕信州歯科大学軽音楽部のライブCD
一九九五年六月二、三、四日に行われた信州
歯科大学の大学祭で、軽音楽部はライブを行っ
た。そして最終日のライブから各バンド一曲ず
つが選ばれて、オムニバスのCDが製作された
(CDの下のキーボードはRoland JV-1000)。

河合律子様

前略 二月もきょうで終わりです。今年は例年以上に寒い日が多く、雪もずいぶん積もりました。今週に入ってようやく少し寒さがゆるみ、雪もだいぶ解けました。先ほどふとテレビをつけたら、見覚えのあるタクシーが出ていました。そういえば、「松本市を舞台にしたドラマ（註15）がある」と友人たちが言っていたのを思い出しました。これがそのドラマかと思い、不思議な気持ちでしばらく眺めました。きょうのラストシーンは、松本市を見下ろす展望台のある城山公園に行く途中の坂道だったと思います。あの辺りからの夜景はとてもきれいです。そして、ドラマの中でも雪が降っていました。

さて、僕は四月からは口腔外科を専攻します。口腔外科は臨床系の講座なので、研究だけでなく臨床もやります。生活費のほかに学費も多少かかるのですが、アルバイトをしてなんとかやっていこうと思っています。それに、また日本育英会の奨学金も受けられると思います。

新しい住所が決まりましたら、すぐに手紙を書きます。それでは、また。 草々

一九九六年二月二十九日

杉名僚二

追伸 今月の初め、僕がとても尊敬していた谷口先生が急逝されました。享年七十歳、心筋梗塞だったそうです。谷口先生は亡くなる前日まで患者さんを診察していたそうです。最後にお会いしたとき、僕は谷口先生から「一生学び続けることが大切だよ」という言葉をいただきました。

歯科医師国家試験まであと少しです。四月には谷口先生のご霊前に国家試験合格を報告できるようがんばります。

第8章
横浜へ

河合律子様

前略　きのうは森山を見送りに成田まで行きたかったのですが、どうしても行くことができませんでした。森山夫妻そしてBlue Wingのみんなは元氣だったでしょうか。

「四月一日から研修が始まる」との連絡を受けた僕は、身の回りのものだけ持って昨晚新しい部屋に引っ越して来ました。信州の部屋の荷造りも途中なのですが、残りは運送屋さんにお願ひしてきました。こんな慌ただしい状態ですが、僕は再び念願の横浜に住むことになりました。

荷物はちよつとした手違いがあつて四月三日まで届かないので、いまはまだ何もないがらんとした部屋で手紙を書いています。手元に便箋がなく、ルーズリーフで手紙を書く失礼をおわびします。

三月二十日に無事国家試験が終わりました。六年前、僕が信州へ行くときにBlue Wingのみんなが贈ってくれた紺のトレーナーを着て試験を受けました。そのトレーナーのおかげで、集中して試験を受けることができました。四月十七日の国家試験の発表までは気持ちは少し落ち着きませんが、自己採点の結果では大丈夫だと思います。

国家試験のあとは十日くらいのおんびりできるかと思いましたが、卒業式、そのあと卒業準備委員会の残務整理、部屋探し、引越しの準備と、あつという間に三月が終わってしまいました。

卒業式は三月二十二日に行われました。卒業式のあと、卒業準備委員全十二人には委員長から感謝状が手渡されました。みんな結構感動していたようです。そして、その夜行われた謝恩会も無事に終わりました。それと、土橋君、古澤君、僕の三人は、卒業式で思いがけず学長賞をいただくことができましたので、併せて報告します。

さて、僕の新しい部屋について少し書きます。ここは京浜急行金沢文庫駅から歩いて十五分の閑静な住宅街にあり、横浜医科大学までちょうど二キロメートル、海まで歩いて十分もかからないところにあります。フクロウが鳴いていた信州の部屋とはまったく趣を別にしてあります。道路の向かい側にあるマンションの一階には小ぎれいな喫茶店があり、今晚にでも行ってみようかと思っています。

部屋は、二階建てのアパートの南半分にあたり、朝は日差しが部屋の中まで差し込みます。それに部屋の内装や天井が白いため、とても明るい部屋です。いままでの部

屋は日当たりが悪かったので、日当たりのよさには感動しました。夜も全然寒くなかったので驚きました。心配していた駐車場も、アパートのすぐ近くにある称名寺というお寺の駐車場を借りることができました。称名寺は有名な史跡があるお寺なのですが、たまたま大家さんがこの寺の檀家だったことから、運よく借りることができました。

あすから横浜医科大学で新しい生活が始まります。あすからの新しい生活が楽しみです。

草々

一九九六年三月三十一日

杉名僚二



[写真 14] 口腔外科病棟の包交車

〔写真14〕 口腔外科病棟の包交車

横浜医科大学附属病院には二十一の診療科があり、ベッド数は六百八十である。そのうち口腔外科のベッド数は二十である。写真の包交車は口腔外科病棟のものである。患者さんの包帯交換 (change bandage) を行うのに必要な薬剤、ガーゼや各種の包帯・テープなどの医療材料を積んだカートが包交車であり、包帯交換などの処置の際にベッドサイドまで運ばれる。病棟には包交車のほかにも救急薬剤を積んだ救急カートなど、目的に応じたカートが置かれている。

河合律子様

前略 河合さん、お元気ですか。僕は長かった六年間の学生生活を終え、ようやく社会復帰しました。大学院生として入局したので無給なのですが、研修医(註16)と同じように、外来の歯科治療や病棟の診療の研修を受け、病院内で働いています。そのうち仕事にも慣れたら、来年あたりから土曜日だけでも歯科医院にアルバイトに行こうと考えています。

さて、河合さん、きょうはお聞きしたいことがあって手紙を出しました。失礼な質問をすることをお許しください。

早速ですが、単刀直入にお尋ねします。それというのは、池島君が『佐藤さんが

河合さんに結婚を申し込んでいる』という話を聞いた」と言っていました。それは本当ですか。

そこで、河合さんにひとつお願いがあります。前述の話が本当かどうか僕に教えていただけませんか。できればお会いして話をしたいところですが、それが無理であれば、手紙や電話（いつも留守番電話になっています）でもかまいません。時間は何時でも結構です。

僕の人生の転機に河合さんと出会えたことは、決して偶然ではないと思っています。横浜でライブをした日からきょうまでの間いろいろなことがありましたが、僕は河合さんのことを忘れることができませんでした。もう一度、僕のことを考えてくれませんか。

失礼な質問をして申しわけありませんが、お返事をお待ちしております。 草々

一九九六年四月三十日

杉名僚二

杉名僚二様

お久しぶりですが、お元気でしたか。何回かお手紙をいただいたのですが、なかなか返事を書くことができなくてすみません。

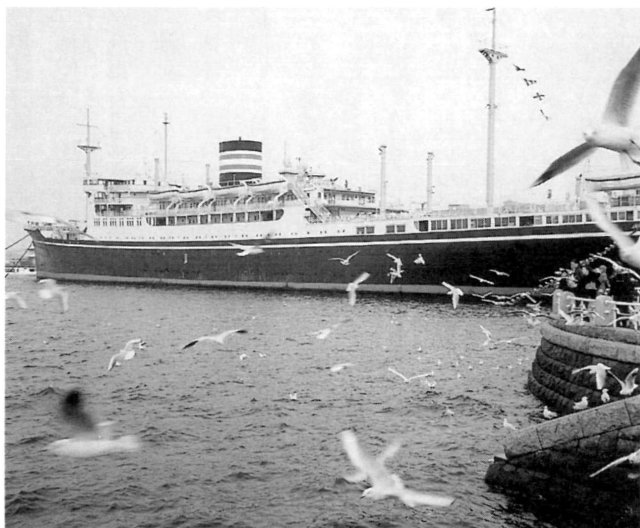
池島さんがおっしゃっていたことは本当です。佐藤さんはこれまでずっと私のことを見守っていてくれました。私は今年の秋に佐藤さんと結婚することになりました。私はいずれ佐藤さんが住む神戸に行きます。だから杉名さんの気持ちにはこたえることができません。本当にごめんなさい。何ひとつ満足にできない私ですが、がんばっていいこうと思っています。

いままでたくさんの手紙を送っていたくださりまして、ありがとうございます。杉名さんは四月から横浜にいるようですが、横浜は私にとっても思い出の街です。杉名さん、これからも目標に向かってがんばってください。

お元気で。

一九九六年五月七日

河合律子



[写真 15] 氷川丸とかもめ

河合さん、きようは土曜日です。どうしてですか。

僕は、引越しの荷物も片付かないまま四月が過ぎ、五月の連休を使つてようやく部屋を片付けました。先週そして今週と、国家試験以来ようやく休みがとれたので、先週、やつと谷口先生のご霊前に歯科医師になつたことを報告してきました。そして、きようは近くのグラウンドを借りて、昭和乳業薬剤部を相手に草野球をしました。グラウンドには、何年もの間忘れていた心地よい五月の風が吹いていました。五月は僕の一番好き

な季節です。グラウンドの隣にはテニスコートがあり、「今度はテニスをやろう」という話になりました。

ここは街の喧騒から離れ、海が近く、緑が多い静かな住宅地の中です。想像していたよりもはるかにいいところで、僕は海が近いことがとくに気に入っています。

僕は横浜医科大学の口腔外科学講座に所属しています。今年は大学院生が三人と研修医が四人の計七人の新人が入りました。大学院生も最初の一年間は研修医と同じスケジュールで、病棟と外来で臨床を学ぶことになりました。外来では慣れない手つきで歯科治療をしたり、病棟では朝晩点滴をしたりしています。ここは大きな病院だけあって、外来にはあらゆる病気の患者さんが来院してきます。口腔外科の病棟にはたくさんベッドがあり、毎週一回くらい、朝から深夜までかかる大きな手術などもある、とても忙しいところです。

僕は、来年からは基礎系の講座に学内出向という形で行かせてもらい、基礎医学の研究をすることになると思います。横浜医科大学では免疫学の研究が盛んです。僕はかねてから免疫学を勉強したいと思っていたので、「口腔粘膜の免疫について研究し

たい」と教授に申し出ました。いまのところ、たぶん免疫学講座で研究させてもらうことになりそうです。ただ、基礎医学の研究は多くの労力と時間が必要です。四年くらいではおそらく入り口も見えないでしょうが、新しい何かをつかむためにがんばってみようと思っています。

先日河合さんの話を聞いて、六年という月日を感じました。何も変わっていないのは僕だけのようです。僕はこれまで、国家試験が終わったあともう一度河合さんに気持ちを伝えるということを目標にしてやってきました。おかげで最初の目標である歯科医師になることができました。ここでの仕事はとても忙しいのですが、毎日とても充実しています。信州での六年間はきつかったけれど、いまはこの道を選んでよかったですと思っています。

僕はこれから少なくとも四年間はここで暮らします。大学院が修了したあとは静岡に戻ろうと漠然と考えていますが、そのときになってみないとどうなるかはわかりません。僕はまだ冒険の途中です。僕はこれからも自分の思ったように生きていきます。

河合さん、これまでの六年間、僕を支えてくれてありがとうございました。迷惑を

かけたことも多々あったことと思えますが許してください。

森山のことを見つけている河合さんの横顔がとても好きでした。河合さんのことはこれからも決して忘れません。「さようなら」で結ぶのはやめます。その代わり、少し早いかも知れませんが、お祝いの言葉を贈ります。

おめでとうございます。いつまでもお幸せに。

一九九六年五月十二日

杉名僚二

〔写真15〕氷川丸とかもめ

山下公園は横浜名所の公園である。山下公園の南側には氷川丸があり、その後ろにはベイブリッジが見える。日曜日の午後、多くの人がこの公園を訪れていた。そして氷川丸の周囲をかもめがたくさん舞っていた。

エ
ピ
ロ
ー
グ
ダ
ッ
カ
か
ら

26th March, 1997

To 杉名僚二

Yokohama City, Japan

From 森山安彦

Dhaka, Bangladesh

元気かい。昨年暮れの引越してばたばたしてしまい、そのまま三学期に突入。連絡をとろうと思いつながらきように至ってしまった。こちらは三学期を無事に終え、ようやく一息ついているといったところだ。

早いもので昨年四月七日にこのベンガルの地にやって来てから、もう一年が過ぎようとしている。振り返ると、この一年はこれまでにない密度の濃さで足早に通り過ぎていったという感じだ。

四月、Z I A 国際空港（ここで成田のようなところを想像してはいけない。なにせ待ち合い室にはときおりコウモリが飛んでいる）に降り立ったとき、その暑さにぼうっ

としながら、これはとんでもないところに来ちまったと思った。空港を出たところにあるターミナルには、真つ黒な顔をしたベンガル人が視界一杯に群がり、「ボクシューシ（神の恵みを）!!」と口々に叫んでは手を差し伸べてくる。迎えに来てくれた日本人学校の先生に促されて車に乗り込んだあと、空港からの道を走りながら車窓越しに見た風景は、強烈な太陽の光に照らされて容赦なく視界を埋めていった。声もなく、けたたましいクラクションの音を聞きながら、それをじっと見続けていた。あれから一年だ。

ダッカの街は極彩色に彩られながらも、この国の国旗に象徴される濃い緑と鮮やかな赤が基調の街だ。その極彩色の主役は、「リキシャ」と呼ばれる人力車。自転車の後ろに人が乗る囲いをつけたもので、これが自動車と同じ道路を無数に行き来する。道路に信号はあるが、守る人はいない。交差点では先に頭を突っこんだものが優先される。だから道路には絶え間なくクラクションの音が鳴り響く。その無秩序な渋滞の中を人が横切る。車が止まればストリート・チルドレンが花や新聞を売り込みにやって来て、車の窓ガラスを激しくノックする……。

驚くことの連続で呆気にとられている間に、しかし次第にこの生活を楽しめるようになったのは日本でいえば夏のころだったろうか。

マーケットに買い物に行く。どの店からも「ボンドウ（友だち）！」と声がかかる。その中をあれこれと物色して回るうちに、背後に何かの気配を感じて振り返る。一人の日本人の後ろを十数人のベンガル人が一緒に歩いて回っているんだ。日本人学校の子どもたちを遠足で動物園に連れて行っても同じことが起こる。どっちが檻の中の動物かわからなくなる。ビデオを撮ってやろうと思つてカメラを彼らに向けて、息を止めて動かなくなる。ビデオなのに。

家の修理を頼む。時間の約束をするが、一向に現れない。運がよければ次の日になつてにこにこことやつて来る。クレームをつけると一言、「オシユビタナイ」と言う。「気にするな。大丈夫だ」で、この一件に片がついてしまう。

雨季は気温四十度、湿度九九パーセントの毎日。座っているだけで汗が背中を流れ落ちるのがわかる。だからどの部屋にもクーラーがついている。しかし、クーラーはよくただの鉄の塊になる。この国では日に何度も予告なく停電する。電力の需要が供

給を常に上回っているから、電力会社は無作為に電力の供給を断ってしまう。暗闇の中で食事するのは年中行事だ。

こういう国に来て、俺は以前より人間らしくなっている自分を発見して、はっとすることがある。喜怒哀楽が激しくなり、じだんだ踏んで悔しがる一方で、大笑いしている。怒りに任せて怒鳴ってしまうが、感動して胸を詰まらせたりもする。

かなり前から、この国に来てよかった、この選択は正解だった、と心底思うようになった。最近、ふと思うんだ。日本人は勘違いしている。「人類は進歩してきた」という。とりわけ日本人はこのことに自信を持っている。でもそれは違うと思う。人間らしさという眼鏡で見渡してみたら、日本人はきつと「退化」している。残念だけれど、これは実感だ。かくいう自分も、間違はなくそのうちの一人なんだろうが。

こういう人生を共に生きてくれる郁美に、感謝している。俺のような弱い人間には、生きていくのに「理解者」が必要だ。彼女は「最高の理解者」であると、こうやって離れて暮らしていると実感できる。俺が、俺らしく生きていくために、俺は郁美を大切にしなければいけないと思う。同時に、彼女にとっても俺は「最高の理解者」になるべ

く努力しなければならぬんだ。

俺たちは真つすぐに歩けないたちのようだ。道を歩きながら周りの風景が気になって足を止めてしまったり、風景ばかり楽しんでるうちに落とし穴に落ちこちて傷を負ったり、さつき通った分かれ道はこっちでよかつたのだろうかと不安になって、もう一度そこまで引き返して座り込んで考えたり、そうかと思うと一瞬のひらめきで道を変えてしまってみたり……。俺もおまえもそういう性分なのだろう。そのくせお互いに相手の歩いている道は気になって、うらやましく思ったり危なっかしく思ったりしている。そういう人生だから一緒に歩く人が必要だ。おまえが素敵な人を見つけたと聞いて、とてもうれしい。

夏に帰る。またお互いの歩いている道の荒れ具合を一緒に自慢し合おう。

註

(註1) 日本アルプス

日本アルプスの名は、明治政府に招かれて大阪造幣局に來たイギリス人、W・ゴーランドの著書『日本案内』の中で提唱された。その後、イギリス人の牧師W・ウエストンの一八九六年の『日本アルプス・登山と探検』の中でその名が確定した。当時、日本アルプスの名は現在の北アルプス(飛騨山脈)を指したものであったが、のちに小島烏水により、木曾山脈(中央アルプス)、赤石山脈(南アルプス)も日本アルプスに含めるようになった。

〔参考文献〕 貝塚爽平・鎮西清高編『日本の山』(岩波書店)

(註2) 医学部と歯学部在教育年限について

日本では初等教育十二年、医学部六年あるいは歯学部六年というコースが最も標準的であるが、医学部や歯学部の中には四年生の大学卒業者を対象として二年生や三年生に編入(学士入学)を認めている大学もある。なお、アメリカでは初等教育十二年、カレッジ四年、医学部四年あるいは歯学部四年というコースが最も標準的である。

〔参考文献〕 風間繁『アメリカ・カナダの医学教育』(篠原出版) 1965

(註3) 頭蓋骨について

医学用語では、漢字を難しく読む傾向がある。例えば、頭蓋骨（ずがいこつ）を「とうがいこつ」、舌（した）を「ぜつ」、右側（みぎがわ）を「うそく」、左側（ひだりがわ）を「さそく」、両側（りょうがわ）を「りょうそく」といった具合である。

（註4）ポリクリについて

ポリクリは独語 Poliklinik の略で、poly（多くの）+clinic、すなわち多くの診療科がある総合病院という意味。外来診療実習、すなわち医学部や歯学部での臨床実習を意味する。Poliklinik は、本来、polis（都市）+klinik で、昔、医学部が教師の監督のもとで診療した自宅の診察室という意味で、現在では「外来患者診療所をいう。多くの辞書には」とくと両方のスペルが出ている。

〔参考文献〕清水直容・南原利夫 監修 『日常会話 医療用語集』改訂第6版（ミクス）1997
星和夫 『楽しい医学用語ものがたり』（医歯薬出版）1993

（註5）臨床実習について

歯学部では、五年次の後半から六年次の前半にかけての約一年間、臨床実習が行われる。大都市にあつて患者が多い大学では、実際に患者さんを診療する実習を課している大学もあるが、多くの大学では学生が患者さんを診療する機会は少ない。

臨床実習の内容としては、診療の手順などについてのレポートや、臨床に即した模型実習、診療

の見学や補助、学生相互の治療実習、患者さんの病歴聴取や口腔内診査など、種々の実習が行われている。

(註6) 「口腔」と「補綴」について

医学用語の中には特殊な読み方をするものがいくつかある。口腔(こうくう)と補綴(ほてつ)は歯科に関するそうした言葉の代表である。口腔は「お口」の医学用語であり、補綴は歯の欠損を金冠、ブリッジ、入れ歯などで補うことである。口腔は、医学領域では「こうくう」と読む。辞書を引くと、「口腔(こうくう)は口腔(こうくう)の医学での慣用読み」(三省堂『大辞林』より)となっている。同様に、補綴(ほてつ)は補綴(ほてい)の医学での慣用読みである。

(註7) ケーシーについて

「ケーシー(Casey)型白衣」を略してケーシーと呼ぶ。外科医や歯科医が好んで着る丈の短い半袖の白衣のこと。一九六〇年代のアメリカのテレビドラマ(一九六一—一九六六、ABCシリーズ) Ben Casey (ベン・ケーシー)の中で Vincent Edwards が演じた脳外科医 Dr. Ben Casey が着ていた白衣をベン・ケーシー型白衣(略してケーシー)というようになった。ケーシー型白衣は中世の床屋に起源を求められる。

ギリシア古典時代にも、医療を職とする者は多様で階層化していた。中世においても同様で、修

道僧医もあれば外科治療を行う床屋外科医、風呂屋の湯男（三助）、瀉血師などがいたわけである。医学学校、とくに大学ができてからは、大学で教育と受けた者と学校教育を受けていない医療職人は厳格に区別されるようになった。服装の点では大学で教育を受けた者は袖の長いガウン風の服を着て、正規の教育を受けていない者は短い服を着ることになった。すなわち、長衣と短衣で外見でわかるようにした。また長衣のほか帽子もかぶった。中世までは、血や膿にまみれた傷口などに直接手を触れるような外科処置は医師の仕事ではなく、もっぱら床屋（床屋外科医 barber surgeon）が担当していた。現在、理髪店のトレードマークみたいになっている赤、青、白ラセンの回転ランプは、往時の床屋外科のシンボルがいまに残っているもので、赤は動脈、青は静脈、白は神経（一説には包帯）を表すものという。

古代ギリシアでは、手仕事は奴隷のすることで自由市民のすることではないという風潮があったので、医療においても外科的治療をする者は内科的治療者より低くみられていた。イギリスやフランスでは、現在でも外科医(surgeon)は mister, monsieur と呼ばれ、内科医(physician)のみが doctor と呼ばれて区別されている。わが国でも外科は内科に対するものであり、明治以前は内科を「本道」と称し、これに対して外科を「外道」と呼んでいた。

〔参考文献〕星 和夫『楽しい医学用語ものがたり』（医歯薬出版）1993
後藤由夫『医学と医療 総括と展望』（文光堂）1999

長谷川栄一『教養と博識の医学ユーモア辞典』増補版（ミクス）1991

(註8) 抜歯について

医科で「ばっし」といえば、最初に思い浮かぶのが「抜糸(removing the sutures)」である。それに対して歯科では「抜歯(extraction of tooth)」である。歯科では「抜歯」と「抜糸」を区別するため、「抜歯」をエキストと呼び、「抜糸」のことを「ばっし」と読むことが多いようである。

(註9) チェアについて

歯科用ユニット(dental unit)に付随したもので、歯科診療の際に患者が座るいすをチェアという。歯科用ユニットとは、歯科診療に必要な種々の器械をまとめて、一構成単位とした歯科診療用器械のことである。ユニットを母体として、ブラケットテーブル(Bracket table)、電気エンジン(dental electric engine)、スリーウェイシリンジ(three-way syringe)、排唾器(saliva ejector, saliva pump)、スピットン(spiton)、无影灯、エアータービン(dental air turbine)などがそれぞれ機能的に配置されている。

〔参考文献〕日本歯科大学歯科用語集編集委員会OB会編『新常用歯科辞典』第2版(医師薬出版)1976

(註10) インレーについて

白歯のC1、C2の治療で、むし歯の部分を削った部分には、多くの場合インレー(inlay)と呼ばれる金属を詰める治療が現在のところ主流である。かつては銀の細粒と水銀を混和して硬化させるアマルガムが多く用いられていたが、現在では鑄造法によって作られるインレーが多くなっている。永久歯に用いられる鑄造用金属としては、保険診療では一二パーセントの金を含有する金銀パラジウム合金(金パラ)と略されることが多い)が多く用いられている。なお、前歯のそ1、C2の治療には、多くの場合光重合レジンが用いられる。

(註11) ラボについて

ラボも医科と歯科で違った意味で用いられる言葉のひとつである。ラボはラボラトリー(Laboratory)の略語で、医科では、L/D(「ラボ・データ」と読む)と表記されるとLaboratory data(臨床検査値)を意味する。また、単に「ラボ」というと、実験設備を有する研究室を指す。このようにラボラトリーは本来「研究所」を意味する言葉であるが、歯科においては別の意味で使われることが多い。すなわち歯科で「ラボ」というと、通常「歯科技工所(室)」を指す。

(註12) 剪刀せんとうについて

手術に用いられる器材の名称には難しいものがたくさんある。手術で用いられるはさみ(Opera-

ting scissors)は、剪刀と呼ばれる。同様にピンセット(pincette)は、鑷子せし、物をつかむ器具は、鉗子かんし(forceps)、アルコール綿は酒精綿しゅせいめんということが多い。

(註 13) 指示について

入院患者さんを受け持つ医師、歯科医師は、病棟スタッフに対する指示(order)を医師指示表(doctor's order sheet)に記入する。医師指示表は「指示簿」などとも呼ばれ、看護記録の一部であり、医師から患者に行う与薬、検査、治療処置、注射などの指示が示される。看護婦(士)は指示表に書かれた指示に従って、点滴の準備をしたり、患者さんを検査室まで移送するなどの業務を行う。医師の指示は、法的には口頭でもかまわないとされているが、その記載は行っておく必要がある。正しく伝え、誤りを防ぐという意味から文書による指示が望ましい。

〔参考文献〕佐分利輝彦監修、病医院OJT研究会編『実用最新 病医院用語の基礎知識』(日本医療企画)

(註 14) 歯科医師国家試験について

毎年三月の下旬には歯科医師国家試験が行われる。従来は年二回試験を行っていたが、一九八六年(昭和六十一年)から年一回に改めた。試験は二日間にわたって行われ、A問題八十問、B問題四十問、C問題三十問、D問題八十問、E問題五十問、計二百八十問の問題が出題される。内訳は、

一般問題が二百二十題、臨床実地筆記試験問題は六十題である。解答用紙は「大学入試センター試験」と同様にマークシート形式である。かつては人工歯配列や歯型彫刻などの実技試験も行われていたが、一九八三年（昭和五十八年）には廃止された。実技試験は現在では行われていないが、その必要性は検討されており、将来実技試験が復活する可能性がある。

なお、合格発表は四月中旬に行われ、新しい歯科医師が誕生する。

（註15）テレビドラマ「白線流し」について

松本市を舞台にしたテレビドラマ「白線流し」は、一九九六年一月十一日から三月二十一日にわたり、JOCX・フジテレビジョン系列で全十一回放映された。（オリジナルビデオ「白線流し」フジテレビ映像企画部。PCVC - 30527,PCVC - 30528,PCVC - 30529,PCVC-30530）

（註16）臨床研修制度について

医師の臨床研修は、一九六八年（昭和四十三年）度から実施されている。歯科医師についても一九八七年（昭和六十二年）度から歯科臨床研修事業が開始されたが、対象者は歯科医師国家試験合格者の三分の一程度にとどまっていた。「歯科医師法の一部を改正する法律」が一九九六年（平成八年）八月二十日から施行された。その中で臨床研修に関する規定として「歯科医師は免許を受けた後、一年以上大学若しくは大学の歯学部若しくは医学部の附属施設である病院（歯科医業を行

わないものを除く）又は厚生大臣の指定する病院若しくは診療所において、臨床研修を行うように努めるものとする」と規定された。なお、この法律の施行前に行われた歯科医師国家試験に合格した者等についてはこの規定は適用されない。

写真のご協力

伊藤 嘉治

青木 邦和

松本歯科大学広報課

「いつかまた横浜で」あとがき

この物語はフィクションですが、私が信州で過ごした歯学部での六年間の学生生活
がベースになっています。

医学部の学生生活を描いた小説やドラマはいくつかありますが、歯学部の学生生活
を描いたものはあまりないようです。この物語から歯学部での学生生活の一端が伝わ
れば幸いです。

私は文系の大学を卒業したのち、金融機関に三年間勤めました。未熟な私にとって、
金融機関で多くの人と接する仕事をしたことは、かけがえのない貴重な経験になりま
した。しかし、次第に仕事に行き詰まってしまい、同じ職場で先輩や上司が生き生き
と働く姿を見るにつけ、自分には金融機関の仕事は向いていないということを痛感す
るようになりました。

そんなことを考えていた一九八九年の夏のある日、会社の歯科検診がきっかけで、

歯科医療の仕事について興味を持つようになりました。私は歯並びが悪かったこともあり、歯科医療についての関心が日増しに強くなっていきました。こうしてその年の十二月には退職願いを出し、歯科医師を志すことを決意しました。そして翌年の四月には松本歯科大学に入学することができ、私は信州で二度目の大学生活を送ることになりました。

この物語の中には何人かの同級生が登場します。歯学部を志望した理由はさまざまだと思いますが、私の学年には、他の大学を卒業して歯学部に入った人や社会人をやめて入学した人も何人かいました。同級生にそうした豊富な社会経験を持つ人がいたことによつて、その人たちからいろいろな世界の話聞き、多くのことを学びました。現在でも医学部や歯学部の一部には学士入学を実施しているところがありますが、門戸は非常に狭いようです。異業種の知識を持った人が医師を志すことができる制度があつてもよいのではないのでしょうか。

一九九九年七月には、「文部省は四年制の大卒者を対象とした四年制の医師養成の専門学校（メディカルスクール）を検討している」という記事が新聞に載りました

(一九九九年七月一日付朝日新聞)。人生の途中で方向転換をする人は私のほかにもいると思います。このような人たちに対して、医学部や歯学部、歯学部の門戸が広がることを願います。

歯学部での六年間には、数え切れないほどの試験や実習、また、多くの人々との出会いと別れがありました。この間、私は何度もうけそうになりましたが、友人たちに支えられてどうにか卒業することができました。私を支えてくれた友人たちにはとても感謝しています。その友人たちも卒業とともに全国に散ってしまい、いまではなかなか会う機会がありませんが、またいつかあの思い出深い信州の地で会いたいと思っています。

この物語を恩師と友人たちに捧げます。

一九九九年秋

露木 良治

現代版
走れメロス

これはノンフィクションである。

高増
哲也



高増 哲也（たかます てつや）

医師（小児科）。1963年和歌山県生まれ。1989年、広島大学医学部を卒業。広島共立病院、東京大学医学部小児科、横浜市立大学医学部寄生虫学講座などを経て、現在神奈川県立こども医療センターアレルギー科医長。四人の子供の父。被爆二世。

著者連絡先 E-mail algykcmc@ta2.so-net.ne.jp

「あーあ、だるいよな」

伸びをしながら僕は、ひとりごちた。

「あら、私が里に帰るのが、哲也さん淋しいのね」

おかまのたかやである。

一九八九年八月十四日月曜日、广大霞キャンパスの自習室。クーラーが効いて寒いくらいだ。僕は医学部を卒業したものの、国家試験に落ちて、六年生のたかやたちに混じって勉強会をしていた。明日からはメンバーがみな盆で家へ帰ってしまうので、勉強会も一時閉鎖となる。僕一人だけが広島に居残りということになる。

「気持ち悪いなあ、その口調なんとかしてよ」

「あら哲也さん、冷たいのね。明日は私、千葉にいるのよ。こないだこわしたメガネ、つくりかえたから、今からとりにいくの。新調のメガネ、哲也さんに見てもらえずに帰るなんて、たかや、かなしい」

たかやはコンタクトをはずしていた。

「コンタクト、ソフトなの？ そんなふうにしてはまずすんだね。メガネ屋までつけて

行つて、そこではずしたらいいのに」

「そんなのつて、みつともないでしょ」

その言葉遣いの方がずっとみつともないよ。そう言いたいのをぐつとおさえて、僕は自習室を出た。雨はまだやんでいなかった。自転車しか交通手段のない僕にとつて、雨ほどどうつとおしいものはない。おまけに今日は傘を持って来ていない。まあいいか、これくらいの小雨、さつさと家に帰ろう。僕は自転車を走らせた。

何がだるいつてひとことと言えない。このむしむしとした暑さと自習室の寒いクーラー。はかどらない勉強と貧しくひもじい毎日。友達はだれも広島にいないし、暇はあつてもすることがない。明日は終戦記念日。発足したばかりの海部内閣、大蔵大臣になつたばかりの橋本は今年もヤスクニに公式参拝するそうだ。「もはや戦後ではない」とは「新たな戦前をつくりだそう」つてことなのに、そんなことをしゃあしゃあと言わせてしまつてゐる俺達日本人。何言つてんだ、明日からまた新たな戦後が始まるんじゃないか。そう思いつつも問題集とにらめっこしているしかないのだ。そんなこんなで何だかしまらない。南大橋から見る元安川の風景、いつもはとつてもお気に

入りなのに、どんよりしている今日はどうもいけない。

家に戻った僕は、いつものくせでまっ先に電話機を見る。今年の春買った留守番電話である。何か伝言はないかな。いつものごとく、伝言などない。どつとソファに倒れこんだ。腹がへってくる。何か食べに行くほど、もう金は余っていない。近くのスーパーにうどんの玉でも買いに行くか。

うどんを買うと、手元に残った金はほんの百数十円になってしまった。やれやれ、でもうちにはしょうゆもあるし、卵もある。卵うどんにはありつけるわけだ。と、家に戻ってまたもや電話を何気なしにのぞきこんだ。だるいよなあ。

あれっ？ 伝言だ。ほんのちよつとの隙だったのに。伝言があつた時の僕の気持ちはいつも同じだ。もしかしてかよちゃんからじゃないかな。ドキドキ。

再生ボタンをあせりつつ押す。ちよつと間を置いてから聞こえてきたのは待ち焦がれていたかよちゃんの甘い声ではなく、男の声だ。

「あ、… 廣大附属高校の佐々木です。今日月曜日に…」

ここで電話はピッピッとなる。うちの留守電はボロだから、伝言は一回二十秒しか



入らない。十秒過ぎるとこれが鳴るのだ。

「あれっ…。えっと」

音にかなり動揺してしまった様子である。またちよつと間があいて、やがて一気にしゃべりだした。

「あ、今日月曜日に福岡に帰ります。その前に会おうと、えと会うために電話をかけようと思ったんですけど」ピッピッ「あれっ？」ピーッ。

これで二十秒、終わりである。

僕はあせつた。こりゃたいへんだ。0.9郎君じゃないか。広島に戻っていたのか。0.9郎は高校の時の同級生、とても仲良しだった友達である。彼は僕が設立した高増出版の部長の一人であった。高校卒業後、僕らは何度となくハガキを交換した。たしか僕が失恋した時、中島みゆきのテープをダビングして送ってくれたっけ。彼は東京工大の大学院を出た後、コンピュータ会社に就職し、福岡で働いていた。その彼が広島に戻っていたなんて。

しかも今日、福岡に帰るというのだ。さて、どうしたらその前に会えるだろう!!」
ともかく電話だ。彼の広島の家の方に電話すればいいんだ。でもナンバーは？ ち
きしよう、ナンバーがわからない。名簿を探してみるが、見当たらない。そうだ、高
校を卒業した時、同窓会名簿をもらったつけ。

目を皿にして本棚を探す。あつた。「アカシア会名簿」。ところがこの名簿、僕らの
一年上の人達の名前しか載っていないかつた。こりゃいかん。

そうだ、電話帳だ。国家試験合格発表の日まで、僕は安佐南区の病院で見習いで働
いていた。その時住んでいた緑井のアパートでもらつた「広島市北部」のハローペー
ジ個人名簿。こつちにもつてきていたんだ。0.9郎もとの家が緑井だつた。よっし、
「佐々木」と。うわあ、たくさんあるなあ。でも緑井だから見つかるだろう。ところが
が意に反して、「佐々木」名の緑井在住者は数十名もいたのである。ここで0.9郎と
書いてあれば一発だが、何せ電話帳は父親の名前で出ているハズなので、とんと見当
がつかない。前に「林」という友人の電話番号を探したことがある。「江波」在住で、
三つあつた。この時は片っ端から電話して、「マコト君いませんか」とやった。三つ

目で当たった。しかし今回はいけない。こんなにたくさん間違ひ電話をかけるわけにもいかないし、何しろ時間がない。もう夕方だ。福岡に帰るんならそろそろ広島を出ないと間に合わないだろう。僕はあせった。そうだ。緑井の時の住所は昔のハガキを見たらいいんだ！

僕は二階にかけあがり、昔のハガキを探した。あつた。あ、これは大学時代の、東京の住所、あ、これもだ。えーと、あ、あつたぞ。ふむふむ、え？

緑井のあたりはいわゆる新興住宅地で、彼がいたころはまだ町名に丁目がついていなかった。やたらと桁の多い数字が書いてある。しかし、今はすでに丁目がついて番地はすっかりかわっていた。それでも旧番地と新番地の間に何らかの相関があるんじゃないか。わずかな期待にすがって僕はまた電話帳を繰った。徒労に終わった。それにしてもこの時間にまだ緑井にすることがあり得るだろうか。彼はもう広島駅にいて、そこからかけてきたのではないか。昔から頭のきれいな彼である。福岡に戻るのにぬかりがあるなんてことは考えられない。そう、彼の行動はいつも計算しつくされているかのように緻密だった。そしてこれまた計算しつくされているかのようにさえている

僕の推理によれば(?)、彼が広島を発つのは(まだ発つていなかったとして!)もうすぐなのだ! こんな機会は今度いつ来るとも限らないのに。話したいことは山のようであり、一夜くらい明かせるくらいなのに。ああ。

しかし、あせりつつも極めて冷静な推理を働かせる僕のシャーロック・ホームズのような灰色の脳みそは(灰色なのはポアロだったか。どっちにしても違うな)、僕の肉体を再び二階へと運んでいった。番地変更が行われてから後、彼が広島へ戻った時にハガキを出したことがあるかもしれない。たとえばそれはお正月。そうだ。年賀状を狙え! 今日会えなければ二度と会えないかもしれないんだ。絶対今日のうちに連絡をとって会わなければ、そう、絶対に!

年賀状、年賀状つと。あつたぞ。でも、東京都大田区。やっぱだめなのかな。どうしたらいいんだろう。0.9郎君も。0.9郎君だ。ピツピツの音に動揺なんかしないで、連絡方法を伝言してくれていたら。でも、でも…。やっぱりどうにもしようがないのかなあ、あ、これも年賀状、でもなー。ありやつ、あつたぞ。新番地の緑井の住所! あつたのである。

「今年の年賀状は広島の方に出します。東京の御家族の方々にもよろしくお伝え下さい」と広島から出している。

さらにあせりつつ、電話帳を繰る。ない、ないぞ。この番地。あせりすぎだ、あせりすぎだぞ。いいか、落ちつくんだ。三度見返してやっと思つた。あせりすぎて見落してたんだ。すぐ電話機のもとへ走る。こんなところで走ったくらいで一秒くらいしかかわらない。それでどうなるというんだらう。おろかなことをしているものだ。そんなことは百も承知、でも理性で割り切ることのできない何かが、僕をかきたてた。

プルルル…、プルルル…。

「はい、佐々木です」女性の声。

「たかますと申します」



「あら、お久しぶりねえ」お母さんである。前に一度、家に遊びに行ったことがある。

「お久しぶりです。あの、0.9郎君いるでしょうか」

「あ、それが先ほど出ましたんですのよ」

「それはいつでしたか？ まだ広島駅についていないでしょうか」

「四時ころに出たんです。いったん市内に出ると言っていましたよ」

四時といえbaumうかなりたつてる。やっぱり街へ出てから電話したんだ。

「あの、何時の電車で広島を発つか、言ってませんでしたか？」

「そちらに連絡がいきませんでした？」

「そうなんです。お電話いただいたんですが、留守だったので伝言が残ってたのですが、今日戻るといっただけで、どうすればいいかわからないんです」

「駅でどの電車に乗るか決めると言っていましたけど、もうそろそろ広島を出るころかもしれませんね」

「そうですか。わかりました。ありがとうございます」

「打つ手は打ったのだ。これ以上どうすることができるといっただろう。0.9郎君、

会いたかったなあ。お互い、あれからいろいろなことがあり、でもやっぱりきつとどちらも変わっていなくて、会えばその瞬間に八年前の高校生時代に戻れるハズなんだ。「いつまでも忘れない 今でも目をこうして閉じれば あのころのままさ……」浜田省吾の歌の一節である。これには続きがある。

「でも僕ら もう二度とあの日の きらめきこの胸に とり戻せない」

今でもわからない。どうして僕があんな行動に出たのか。しかし、それは受話器を置いてからすぐその次の瞬間だったんだ……。

僕は全速力で自転車を走らせていたんだ。広島駅へ。

もう間に合うわけがないのに。それとも、彼が広島を発つのはまだまだ数時間後で、今ごろ本通りを一人で歩いているかもしれない。なのになぜ？ 少なくとも僕にはわからない。ともかく、一刻も早く駅に着かねば。

雨はやんでいた。それに気づいたのは南大橋を渡る時だ。東の空に虹が出ていたんだ。鮮明な、きれいな虹だった。あの川のずっと向こう、海の向こうの向こうにいるかよちゃんにこの虹を見せてあげたい。希望のかけ橋。虹を見るなんて何年ぶりなん

だろう。そう、そして今、僕は
いる！
0.9 郎君に何年ぶりに会うために自転車を走らせて

「アルバイト 電車で横浜ま
で帰るころは 午前0時……」

猛スピードで自転車を飛ば
す時にいつも口をついて出る
浜省の歌が、自然と出てきた。
指をならすとますます調子が
ついてペダルを踏む足に力が
入る。いつの間にか僕は車道
に出ていた。もう信号機も目
に入らない。警察署の前も全
くかまわず通りすぎた。そん



なことを気にしてる場合じゃないんだ。一刻も早く駅に着かないと。でも僕の理性は僕に語りかけていた。そんなに急いでどうするんだ。何時何分までに着いたらいいというんだ？ 全く見当もつかんじゃないか。何の手がかりもなしに、雑踏の中で、
0.9
郎君に会えるなんて、そんなことがあるか？

会えるか、じゃないんだ、会うんだ、僕は。そう答えたのは僕自身だったのだろうか。

数年前、東京新宿の国立病院医療センターで、僕は医学部の後輩、工広君を待つていた。彼はその日のうちにこの病院に来ると言っていた。何時か、それは全くわからなかった。僕は日が落ちるまでそこで待った。彼は来なかった。僕はとぼとぼと帰途につくべく駅へ向かった。高田馬場駅の人込みの中で彼の姿を見つけた。それはほんの、ほんとに微妙な、偶然の出来事だった。でもそれは、ほんとうに偶然ただひとことで片づけられることだろうか。

あるいはタイのチェンマイで、僕は貸し自転車に乗って遺跡めぐりをしていた。すると、同じく貸し自転車に乗った日本人らしき旅行者がすれ違った。あれっ、同級生

の安倍君だ。地球つて狭いもんだ。これもただの偶然だったんだらうか。

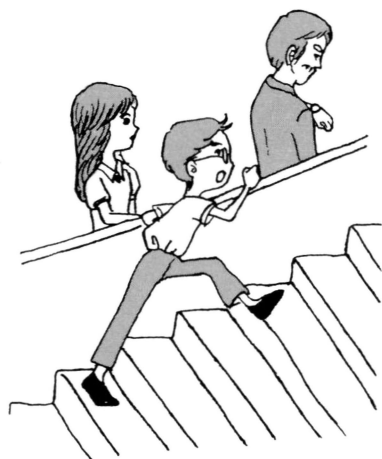
東京は一度会った人には二度と会うことのない街だと言われる。ましてや範囲がアジア全域となると、いくら偶然とはいえ、たまたまばったりなんてことがあるんだらうか。

そんなことがあったからだらうか、駅に行きさえすれば、一刻を惜しんで駅に着きさえすれば、0.9郎に会えると思ひ込んだ僕は、もう一方の僕、理性の僕が「お前、虫がよすぎると思わんか？」と説得しても、動揺することなくペダルを思い切り踏んでいたのだ。急がなきゃ。

ペダルを踏んでいたのは僕の足だ。僕の頭はその時何をしていたか？

考えていた。どこに自転車を置き、どういう経路を走れば、0.9郎君に会う確率が最大になるか。

計画はそのまま実行に移された。駅前大橋の手前で自転車を乗り捨てる。そこから走って橋を渡り、地下道へ降りる。在来線入口の改札に出て、その人込みをしらみつぶし。いない。入場券を……。おっと、切符の販売機は人の列だ。ここで時間をとら



れては、0.9郎君に会う機会が0・009パーセントでも減ってしまう。あ、あの販売機には人が二人しか並んでいない。行くんだ。よし、入場券は買った。在来線の入口から入り、エスカレーターは使わず階段をかけたのぼる。新幹線口へ走る！

博多行のホームへかけのぼる。列車がホームへ入ってきた。この人込みの中に0.9郎君がいるかもしれないのだ。列車の中に入ってしまったら見失う。入る前に全員をチェックだ。そんなことが可能か？ やるんだ！

自由席のハズだ。駅に来てから乗る列車を決めるんだ。自由席しかない。きつと一号車か二号車だ。禁煙車に乗るんだ、0.9郎君！ きつとそうだ。そうに違いない。でもここは八号車の場所。列車が止まり、ドアが開いた。人の列がどんどん車内

にすい込まれていく。ああ、だめだ。とにかく走れ！人の列が邪魔だ。かきわけろ！五号車、ここから自由席、三号車、もうほとんど人は中に入ってしまった。一号車を見やると、もう人はいない。二号車もあと一人が入るところだ。あつ、あつ！！

「^いれ、0.9郎君！！」

叫んでいた。僕はこの瞬間を生涯忘れないだろう。二号車の最後の一人、それはまぎれもなく、0.9郎その人だった。彼は今、列車へと足を踏み入れたところだった！

「0.9郎君！」

「わっ、た、たかますくん！」

「信じられないなあ」

「どうしてここにいるの？」

「これだよ、これ、ほら入場券」



「えっ？」

「電話の伝言を聞いたんだよ」

「じゃ、僕に会いに？」

「うん。この列車でないといけないの？」

「そう。手紙書くよ。会えただけでも、ほんとに会っただけだけど、でも会えただけでも嬉しいよ。手紙書く」

「僕、こないだ手紙書いたよ。まだ見てないかもしれないけど」

「読んだよ」

「いつ広島に来たの？」

「土曜日。手紙書くよ」「ほら、入つとかないと。ドアが閉まるよ」

そのとき、見知らぬおばさんが話しかけてきた。

「これは徳山に止まりますかあー」

「どうして？　こんな時に。」

「止まりません。次のひかりなら止まりますよ」と、0.9郎が口早に教えた。その瞬間、

ドアは閉まってしまった。

ひかり号は出ていく。でも、間に合ったんだ、どうしてかわからない、間に合ったんだ。さよなら、さよなら。それだけを言うために来たようなものだった。

さ・よ・な・ら。

ぎりぎり間に合ったんだ……。僕の頬に熱いものが流れた。何てことない「偶然」の出来事、でも本当にあった話。それは僕と、0.9郎だけが知っている。

もう一瞬でも遅かったら……、僕たちは会わなかった。そして、しばらく駅で待っていても、0.9郎はあらわれない。やっぱり、……無謀だよな。そりゃそうだよな……、で終わっていたこと。

ホームに残されたのは僕と、おばさんだった。

「わたしね、電車に一人で乗るの初めてなの。徳山に新幹線止まるって聞いて乗ったら、様子が変だから降りたの。どれに乗ったらいいのかしら」

「僕もすぐにはわかりませんがね、どこを見て乗ればいいのか教えますから一緒に行きましょう」

「それはどうもどうも。徳山には新幹線止まるんでしょう」歩きながらもお婆さんの口は忙しい。

「止まるのもあるのですが、さっきのは止まらないやつなんですよ」

「次のが止まるとお友達は言っていましたね」

「ええ、でも僕は知らないんですよ。ほら、あそこを見て下さい。次のひかりは各駅停車と書いてあるでしょう。これなら徳山に止まります。あ、もうすぐホームに入りますよ」

うしろを向いて話しながら歩いてきた僕は、あやうく駅員にぶつかりそうになった。

「あ、すみません、この列車、徳山に止まりますよね」と僕。

「ええ」と駅員。

その様子を見ながら、にこにことお婆さんは新幹線に乗り込んでいった。

「ちえつ、これだから『オバサンキラ』なんて異名がついちやうだよな」

僕は改札を出ながらつぶやいた。でもすごいタイミングだったな。本当に一瞬でも遅かったら会えなかったじゃないか。0.9郎を見つけた時は「やはりいた！」と思

う自分と「そんなハズが？」と思う自分が正面衝突した。でもやはりいたのだった。いやー、これはまるで太宰治の「走れメロス」じゃないか。にやにやしている僕をけげんそうに見ながら女の子が避けて通った。「ねえ、ちよつとへんよ、あの人」なんて言っているんだろう。でもそんなことは全然かまわない。僕はメロスしちゃったんだなあ…、ありや、自転車をごこへやっつけた。あ、そうそう、駅前大橋の向こうだった。ああ、のどが乾いちゃった。ちよつと飲み物を、あつたあつた自販機。これにしよつと。「おり？…」僕の財布の中身は、十円玉三枚と、一円玉が数枚だった。

ああそうか。うどんの玉を買って、駅の入場券を買ったから、もうないんだ。いやー、それにしてもあの時、入場券代がぎりぎり残っていたから会えたんだ。うどんの上に乗せる天ぷらを買っていたら、駅まで来て中に入れないことに気づいて、がつくりくるところだったんだ。いやー、よかったよかった。僕はのどの乾きもすっかり忘れて自転車で乗った。

「午前0時 これで眠るつもりが ラジオの音が耳許をかすめて…」
軽快な寺尾聰の歌が口をついて出てくる。

「あっ！」天満屋の前で自転車に乗ってすれ違ったのは、たかやだ。

「たかやくーん！」

ふり返ったたかやの顔には見慣れない丸メガネが光っていた。おわり。

一九八九年八月十五日



(イラスト：高増加代子)

あとがき

この作品はノンフィクションです。

作中の「0.9郎君」は本名を「佐々木一郎」といいます。

彼は広島大学附属高校時代の友人ですが、当時僕達の間でわきおこった大議論に、「0.9論争」というものがありました。すなわち、 $0.999\cdots$ の循環小数は、1とイコールなのかどうなのか、というものです。数学的にはイコールなのですが、感覚的には $0.999\cdots$ は \vdots がどこまでいってもやっぱり1よりはちよつとだけ小さいように思えてしまいます。同級生達は、「イコール派」と、「ノットイコール派」にわかれて、けんけんがくがくの大論争に発展しました。僕はイコール派の最先鋒でした。数学的な手法、果ては集合論をもちだして、無限という概念にふみこんで、イコールであることを主張し続けました。ノットイコール派は「ずーつとずーつと論」「感情的興奮押しまくり論」など、やっぱり感覚的にはちよつとだけでも1よりは小さいよ

ね、という主張を繰り返しました。これらのやりとりを本にすることで（本といっても手書きのものですが）「高増出版」という団体ができ、文化祭では輪転機で印刷して売りだすまでになりました。同級生の間では大評判で、すぐに売り切れて嬉しい悲鳴でした。当時はコピー機も今のようには普及しておらず、単価も高かったので、すぐに複製するわけにもいきません。

佐々木君は、ノットイコール派だったのですが、彼の発音では「ナットイコール」でしたので、「ナットイコール派」と呼ばれていました。彼には高増出版の反論部長という肩書きが与えられ、ナットイコールの立場で新しい論を展開する、それに対してイコール派が反撃を加えて出版のネタにする、というわけです。

高校を卒業してからも、僕たちはよく手紙のやりとりをしていたのですが、僕が書いた手紙の宛名は、「佐々木 0.9 郎様」でした。僕にとってはそれは「二郎」とイコールだ、というわけです。ですから、作中の「れ、0.9 郎君！」というところは、「れ」の上に「い」とルビをふらなければなりません。

冒頭に書いたように、この話は本当にあったことで、僕はこのあと家に帰って、一

気にこれを書き上げたのです。そして高増出版関係者に郵送しました。佐々木君は大変感激してくれて、手紙をくれました。僕はそれを読んで絶句しました。それにはこう書いてありました。

「本当に偶然というものはあるのですね。僕はこれを読んでそう思いました。新潮文庫版の『走れメロス』がここにあるのですが、太宰治の作品と高増君の作品は、行数がぴったり一致していました」

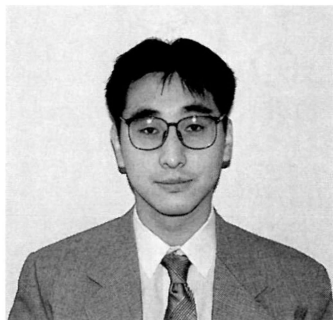
一九九九年秋

高増 哲也

小説

医者と患者の関係論

菅井 敏行



菅井 敏行（すがい としゆき）

大学院生。1974年神奈川県生まれ。埼玉大学理学部生体制御学科卒業後、横浜市立大学総合理学研究科に入学。修士課程修了後、横浜市立大学医学部医学研究科に入学。現在、博士課程1年。専攻は小児アレルギー学。
著者連絡先 E-mail toshi211@venus.dti.ne.jp

ある晴れた七月の日曜日、彼は電車で揺られられていた。以前から気になっていた本を書店で探し、やっと見つけた帰り道。彼はけだるそうに電車のドアに体をもたれかけて、カーブを曲がるたびにやってくる大きな揺れに身を任せていた。車窓から見上げると、そこには梅雨明けしたばかりの抜けるような青空が広がっていた。

彼は小児科専門の病院で働く医師。名前は古村という。医者になって働き出してから、もう十年になる。病院での地位は、多少乱暴にいえば、サラリーマン社会の課長といったところになるだろうか。

その古村医師にとつて、今日は久々の休みとなった。この前の休みは……と思い出すと、ゴールデンウィークのころだったのだろう。それもよく覚えていない。たぶん一か月以上、いや、二か月近くも休めなかった。思い返せば、この忙しさは六月の初めの梅雨入りと同時に始まった。

梅雨入り。小児科医にとつて年に二度、とくに忙しくなるシーズンがある。風邪が流行する一月から二月、そして梅雨の時期。この梅雨の始まりとともに、喘息を持つこどもはそろって症状が悪化する。喘息は発作的な呼吸困難を伴う病気で、昔に比べ

ると、最近とくに患者数が増加傾向にあり、「十人に一人のこどもが喘息患者である」との報告もあるくらいに一般的な病気になってきた。とはいえ、とくに小児の場合は、処置の遅れで全身状態が急激に悪化し、生命の危険もある油断のできない病気だ。

今年もやはり、梅雨入りと同時に申し合わせたかのように喘息発作を起こしたこどもの入院が続いた。古村医師は休日も返上して入院中のこどもの治療に追われていた。この時期の病棟は、一人やとと退院できたかと思うと、二人入院するといった具合。またこの時期になると、外来診療も忙しくなる。定期的な外来受診だけで喘息をコントロールできていたの喘息のこどもも、この時期は喘息発作で体調を崩している。それゆえ処置も処方も多くなる。その外来診療の忙しさにさらに追い討ちをかけるように、外来診察中にも地域の病院から「喘息の急患を搬送する」という電話が入る。古村医師が働く小児専門病院となると、地域の一般病院から手に負えなくなった重症のこどもが搬送されることもしばしばである。この時期は病院はまさに戦場となる。

そんな中、この忙しかった日々にはピリオドを打つ、うれしい知らせがあった。梅雨明け宣言。古村医師が待ちに待った梅雨明け宣言である。というのも、梅雨明けとと

もに喘息のこどもは喘息発作の回数が極端に減つて安定するのだ。入院していた大勢のこどもも、いままで威張つていた梅雨前線が太平洋の高気圧に追いやられるのと同じ時に退院していった。そして、真夏の刺すような日差しとともに、病棟には平和な日々が帰つてきた。

きょう、久しぶりの休みを古村医師がとれた理由は、実はもう一つある。それは、彼が四月から指導していた研修医が医師として成長したことだ。彼の勤める病院では、医学部を卒業したばかりの医師の研修を行っている。いわゆる「卒後研修」と呼ばれるものだ。古村医師も四月から、ある研修医の指導医（オーベン・註）となり医学部を卒業したばかりの医師の指導を行つていた。研修医は医師とはいえ、読んで字のごとく「研修中」であり、駆け出しの医者である。もちろん白衣を着ていて、みんなに「先生」と呼ばれ、一般の医師と同様に扱われるのだが、患者が思うよりずっと未熟な存在である。診断、処置、処方。研修医はこれらを二年間の研修期間中に習得し、医師としての最低限の技術を身につけ、各科の専門領域へと進んでいくのである。

古村医師が四月から指導していた研修医も、ここ三か月間で基本的な技術を身につ

けた。彼が休みなどで病院を空けているときに入院中のこどもの様態が悪化したとしても、彼の指導している研修医に最低限の処置を任せることができるようになった。

というわけで、彼は肩の荷を下ろし久々の休みを満喫していた。ふと車内を見渡すと、こども連れが多いことに気がついた。麦わら帽子にリュックサック。袖なしのワンピース。ビーチサンダルに、真つ黒な顔。お決まりの夏の光景が広がる。電車に大きく揺られながら、母親の手をしっかりと握っている女の子もいる。電車の窓ガラスにびったりとおでこをくつつけて、何か歌を口ずさんでいる男の子。楽しそうだ。

「夏休みか……」

古村医師は、そうつぶやいた。

電車にしばらく揺られていると、混雑していた車内もすきはじめ、ある駅を過ぎたところで、ぽつりぽつりといくつかの座席が空いた。いままで蒸し暑かった車内も、少し涼しげに感じられた。空いた座席に座ってしまおうと、腰を下ろしかけたその瞬間、古村医師の耳に甲高いこどもの声が飛び込んできた。

「せんせー！せんせー！」

初めは、自分が呼ばれているとはわからずに、車内をきよきよろしていた古村医師だったが、甲高い声の主と目が合った瞬間、それが自分に向かってかけられている声だとわかった。

「ふるむらせんせー！」

小学校一年生くらいの男の子が、車内の人込みをかくぐりながらこちらに向かってくる。その後ろを一生懸命に追いかけてくるのはお母さんだ。いったんは腰を下ろしかけた彼だったが、思わず背伸びをするように立ち上がり、手を振った。

「おお。ともくん」

「せんせー。こんにちは」

息を切らしてきたその男の子は、古村医師が主治医をしている患者の知広くんだった。こんなところで会おうとは。ふと、古村医師は次の瞬間、周りの人からたくさん視線が自分に注がれていることに気がついた。こどもが、電車の中で大きな声で「せんせー！」である。病院では、遠くからこどもに大きな声で呼ばれることはよくあるが、電車の中で大声で呼ばれるとは思いもしなかった。やはり、なんとなく恥か

しい。とりあえず照れ隠しで、知広くんの頭をなでてみる。周りの人は、小学校の先生と生徒だとも思っているのだろう。

「先生、こんにちは。いつも、うちの知広がお世話になつて」

「おせわになつて！」

お母さんに続いて、笑いながら知広くんが言う。買い物帰りだろう、デパートの紙袋を提げた知広くんのお母さんである。いつも外来でお目にかかるお母さんとはちよつと違つて、ちよつと派手な格好をしているような気がする。知広くんも、診察室で見るといつもの姿とは違つて、表情も明るい。病院の診察室という場所では、例え元氣のいいこどもでも病氣のように見えてしまうのだろうか。お母さんも、病院には地味な格好で来るのだろうか。古村医師はそんなことを考えたりした。

知広くんと付き合ひは長い。知広くんは古村医師が研修医を終えて、一人前の医師となつて初めて担当した患者だ。生まれながらの心臓病。そして重度の喘息。研修医修了直後の古村医師にとつては、大変な患者だった。しかし、やりがいはあつた。また、知広くんから学んだことは多い。患児、親そして医師。この信頼関係を大切に、

そして、その関係を崩さないように精一杯がんばった。そして、いまでも。そのかいあつてか、最近では知広くんの病状は安定していて、大きな発作を起こして入院するといふことはなくなつた。ちようど知広くんが一歳のときから診ているので、今年でもう六年目になるだろうか。「池原知広」と書かれた水色のカルテの表紙は少し疲れてきたし、カルテ自体も入院抄録や検査報告がたくさん挟まって分厚くなり、貫禄さえ漂うようになつてきた。まるで知広くんのカルテが古村医師の医師としての成長を映してきたかのようだ。

しかし、その知広くんこんな電車の中で会おうとは思ひもしなかつた。知広くんの姿は外来か、入院しているときにしか見たことがない。お母さんのスカートにまわりつきながら笑う知広くんの姿が、古村医師にはとても新鮮に見えた。

「先生、私、最初先生だと全然気がつきませんでした。突然、知広が走り出したから、何かと思つて。そうしたら、こんなところでお会いするなんて、ねえ」

「ぼくも、まさかこんなところで『せんせい』って呼ばれるなんて思つてなかつたから、自分のことだつて全然わかりませんでしたよ」

「でも、ともくん。先生だってなんでわかったの？」

少しかがみこみながら、わざとぎよろつとした目をしてそう聞くと、知広くんは威張ったように、

「わかるよ。だって、先生、いつも寝ぐせがついてるじゃん。バレバレだよ」

古村医師が髪の毛を直そうとするより早く、知広くんのお母さんと隣にいたよそのおばあさんが笑っているではないか。またこどもにやられた。髪の毛を触りながら、古村医師も思わず笑ってしまった。思えば、通勤といえれば病院と自宅との往復だけ。車で三十分もしないこの距離を毎日往復しているから、電車に乗る機会はほとんどない。電車に乗ることがあれば、少しは寝ぐせを気したかもしれない。外来の前髪型を整えればいいのか、あまり気にしたこともない。こどもの目には、寝ぐせをそのまましておく人種はきつと珍しく映るのだろう。白衣を着ていなくても、こどもが遠くから自分に気づいてしまう理由も納得がいくというものだ。

立ち話をしている間に、車内の座席はほぼ埋まってしまった。お母さんはひとつだけ空いた座席に、知広くんを座らせた。知広くんは、まだ寝ぐせを気にしている古村

医師を上目遣いで見ながら笑っている。座っている知広くんをちよつと気にしながら、古村医師はお母さんに昔話をするかのように話を始めた。

初めての「主治医」という立場に緊張しながら、知広くと最初に対面したときのこと。知広くんが入院中に検査をいやがって泣きながら病棟を飛び出したときの話。病棟に流れる面会時間終了を知らせるオルゴールのメロディーを聞いたくないばかりに、両手で耳をふさいで涙ぐんでいた姿。いまとなつては、知広くんはこんなに立派に大きくなつて、そんなことも懐かしい思い出話になつてしまうほど、元気になつた。お母さんからは、去年までと違つて知広くんが梅雨時も最近大変調子がよかつたこと、そして八月に入つたら楽しみにしている北海道旅行があることを聞いた。

そんな話をしていると、お母さんは古村医師から一瞬目をそらし、一呼吸おくと、改まつた言葉遣いで、言葉をのみ込むようにしてこう尋ねた。

「先生、この子、最近すごく調子がいいんです。去年は、この時期でもやつぱり調子が悪かつたけれど、今年は学校の体育でかけっこしても発作が出ないし。日曜日もお父さんとキャッチボールもするんですよ」

「先生、こんなに知広が調子がよくなっても、いま先生からいただいてる薬って、やっぱり毎日飲まなければいけないんですか？去年みたいに、調子が悪いときに薬を飲むのはわかるんです。でも、こんなに元気なのに、どうして薬が減らないのかと。それで薬の本を調べて。そうしたら、なんだかたくさん副作用があるみたいだし。知広が毎日飲んでいる薬だから、なんだか心配なんです」

お母さんは、少し涙ぐんでいる。

涙ぐむお母さんを前にして古村医師は戸惑いを隠せなかった。そして、少しいら立ちを感じた。喘息などの慢性の病気では、例えばその症状が一過性に改善されたとしても、ある程度の期間薬を飲み続けるのは常識となっている。知広くと知広くんのお母さんが降りる駅が近づいているということもあって、古村医師はとりあえず薬の必要性を簡潔に話した。知広くんが飲んでる薬には、発作を止める効果のあるものほかに、発作を起こしにくくする予防的な役割をする薬も飲んでもらっていること。そして、その薬のおかげで、知広くんが梅雨の時期も大きな発作を起こさずにうまく乗り切れたこと。そして、副作用については知広くんが飲んでる量ではとくに心配

することは無いということ。それを話し終わつたころ、ちやうど知広くんとお母さんが降りる駅に着いた。

「せんせー、さようなら！」

「先生、ありがとうございます。少し気が楽になりました」

「どういたしまして。ともくん。気をつけてね。またね」

ドアが閉まると、電車は静かに動き出した。ホームでは知広くんが手を振っている。古村医師も手を振り返す。しかし彼の振るその手には力はなかった。

電車がホームを離れた。そして、アナウンスが入った。窓の外の景色がだんだん早くなつていく。海が見えてきた。しかし、彼にはその風景が目に入らなかった。知広くんのお母さんのあの表情、そしてあの言葉がくつきりと頭に残っている。知広くん、そして知広くんのお母さんとは六年間、お互いに信頼関係を築き上げながら二人三脚で病気を治療してきたつもりだった。しかし、知広くんのお母さんは治療に不信感を抱きながら、表面に出せないでいたのだ。古村医師はお母さんが治療を理解し、全面的に信頼をおいてくれていているものだと思つていた。いま思うと「信頼関係」とは何だつ

たのだろうか。

電車は突然トンネルに入った。暗いトンネルの中で、考え込む古村医師の姿が窓に映った。そして、トンネルを出ると再び車内に午後の日差しが差し込んだ。彼は空いた座席にゆっくりと腰を下ろし、さっき買ったあの本をカバンの中から取り出すと、表紙を眺めた。真新しいその本の表紙には「医者と患者の関係論」と書かれてあった。

註

オーベン oben〔独〕上に、表面にの意であるが、医療では上級医師の俗称として用いられている。

〔参考文献〕清水直容・南原利夫監修『日常会話医療用語集』改訂第6版（ミクス）1997

「小説 医者と患者の関係論」あとがき

こどもの頃、自分のかかりつけの病院が主催する「喘息児サマーキャンプ」に参加したことがあります。喘息治療の一環として行われるキャンプで、ふだん喘息発作を気にしすぎるあまりに、活動が消極的になってしまいがちな喘息を持つこどもたちを屋外に連れ出し、医師と看護婦、学校の先生、そして大勢のボランティアたちによる十分な観察の下で、喘息発作を気にせず、こどもたちに思いきり自由に活動する機会を与える、という趣旨で行われていたキャンプです。学校などのキャンプとはまったく違って、私にのびのびと遊ぶ楽しさ、目いっぱいはしゃぐ楽しさを教えてくれたキャンプでした。

いまでもそのときの楽しい思い出は忘れられません。そして十数年たったいま、本当に偶然に、私はこのキャンプにボランティアとして参加する機会に恵まれました。きっかけは一枚の貼り紙。「喘息児サマーキャンプ ボランティア募集」の貼り紙で

す。私は迷わずそのキャンプのボランティアに応募し、念願の「喘息児サマーキャンプ」にボランティアとして参加することができたのです。

ボランティアとしてこのキャンプに参加すると、こどもの頃には見えなかったことが見えてきました。こどもたちの発作に備え、深夜も万全の当直体制で臨む医師、看護婦。こどもたちを楽しませるために、たくさんのお出し物を用意する学校の先生。起きてから寝るまでずっとこどもたちと一緒に遊ぶボランティア。そして屈託なく笑うこどもたちの姿。このキャンプに参加している、すべてのスタッフがこどもたち中心の流れをつくっていました。その流れに包まれたこどもたちは、まさに脱皮し、自信をつけ、大きく成長していきます。数日の間に、一人一人の成長が手に取るようになります。私は、十数年前にこんな素晴らしいキャンプに参加できて本当に幸福だったと、キャンプから帰るバスの中でそう思いました。

キャンプが終わってしばらくしてから、私は再びこの病院を訪れ、このキャンプを主催した小児科の医師に会って、ボランティアとしてキャンプに参加できたこと、そしていままでこのキャンプをこどもたちのために続けていくれてくれたことのお礼を

言いました。そのとき、その医師から「アレルギーの研究はまだまだ発展途上だ」ということ、そして、「小児科領域ではとくにその状況が混沌としていて、理学部のような基礎学問的分野からも数々の研究のアプローチがある」ということを聞きました。アレルギーの研究は医師がするもの、医師しかできないものという先入観があった私には大変新鮮な情報でした。

その頃、私は大学院で細胞膜に存在する酵素の研究をしていました。しかし、研究をしている合間も、あのサマーキャンプで見たこどもたちの笑顔がどうしても気になり、何か私なりに喘息を持つこどもたちに研究成果を還元できないだろうか、と日々考えるようになっていました。

そしてあるとき、決断しました。いままでの研究を打ち切り、アレルギーの研究をすることに決めました。いままでの人生の中で、これは自分にとって大きな方向転換となる出来事でした。そう決断してからの話の展開は大変早かったと思います。早速、医学部の小児科学講座の教授を訪ね、「小児アレルギーの研究をさせてほしい」と申し出ました。医学部卒でもないかぎり臨床の講座で研究をさせてもらうのは難しいか

と思いましたが、意外にも小児科の教授の答えは好意的なものでした。「早速研究を始めてほしい」とおっしゃってくださいたのですが、小児科の教授が就任間もないということもあって、小児科の研究室自体、研究がストップした状態でした。そこで、医学基礎講座でアレルギーの研究をしている寄生虫学講座を紹介され、マウスを使った喘息発症機序の解析を行う研究をすることになりました。寄生虫学とは書きますが、免疫学やアレルギー学の研究を精力的に行っている講座です。そこで私は、この本の著者である露木先生と高増先生と出会うことになります。

露木先生と高増先生とは、ことあるごとに医療問題で日ごろ疑問に思うことを議論しました。「座談会 医者と患者の関係論」はその議論そのものです。また、私が書いた「小説 医者と患者の関係論」は座談会の内容をもとにし、発展させた小説です。最後になりますが、私のこの小説を書くきっかけを与えてくださった露木良治先生、またたくさんのアドバイスをいただいた高増哲也先生に心より感謝を申し上げ、あとがきとさせていただきます。

一九九九年秋

菅井 敏行

座談会

医者と患者の関係論



左から菅井敏行、露木良治、高増哲也。

『医師对患者』の特殊な関係

露木 きょうは「医師と患者の関係」という題で座談会を持ちたいと思います。高増哲也さんは専門病院に勤務されている小児科医で、医師として日ごろ感じていらっしゃることを話していただきたいと思います。菅井敏行さんは、理学部を卒業後、現在大学院生として医学研究をされていますが、子どものころから喘息で患者として病院に通院していた立場でも話をしていただきます。私、露木良治は、歯科医師としての立場でも話をさせていただきます。今回は司会かたがた歯科医師としての立場でも話をさせていただきます。われわれ三人は、以前に同じ研究室で仕事をしていたことがあるので、これまでもいろいろなテーマでよく議論をしたものですが、今回この座談会を企画したきっかけは、高増さんがインターネットのあるホームページの掲示板上で、「診察室を舞台として、医師は医師を、患者は患者を演じている」といったような論を展開しているのを発見

して、これはおもしろいと思っただけです。このことを言いだした趣旨はなんですか？

高増 そのホームページで、「人間社会が演技で成り立っている」という指摘を読んだとき、なんか普段感じていることに通じるものがあるな、と思っただけです。医師と患者は、本来は人間対人間なんですけど、診察室という特殊な場の中で、医師は白衣を着て大きいすに座っている、患者は順番を告げられるとそこに入って行って、小さい丸いすに座って患者然としている。そうすることによって、医師対患者、という特殊な関係を成立させているな、と感じていたので。

菅井 私はこの話は、それ自体はおもしろいけれど、ホームページの掲示板という場所、このような堅い話題が議論として成立するものだろうかという視点でも見えていました。おそらく成立するのは難しいだろうと（笑）。

露木 議論になっていくのかどうかという意味では確かに疑問でしたが、私も日ごろから白衣の持つ意味については関心を寄せていました。印象的なのは、映画「ヒ

ポクラテスたち」の冒頭で、白衣を抱えた医学生が交通事故の現場に遭遇し、野次馬たちに白衣を見られないように隠しながら通り過ぎるというシーンです。

高増 白衣というのは、いつごろから着るようになったのでしょうかね。

露木 起源をたどると、中世のヨーロッパにさかのぼるようです。医学校、ことに大衆ができてからは、教育を受けた者のみが袖の長いガウン風の服を着て、帽子もかぶっているというふうに、着るもので区別されるようになったようです。以来、白衣は医者 の 職業イメージと密接に結びついています。

菅井 白いことには何か意味がありますか。

露木 もちろん白には清潔をイメージさせる効果がありますし、またとくに日本人にとっては白無垢、白装束など、白い着物は非常に改まった場で用いられる特別のもの、という意味もあります。白には緊張感をもたらす作用もあり、白衣を着た医療スタッフが血圧を測るときだけ高血圧になるという現象も、われわれの間では有名な話です。

医療はサービス業であるという視点

高増 そのような舞台設定の中で特殊な関係を成立させることで、例えばプラセボ（註1）効果が生まれることもある。それはそれで大事な役割を果たしているのかもしれない。しかし一方で、「医療はサービス業である」という視点を医療従事者の側は持つ必要があるだろうと思います。お客様である患者さんのニーズにどう応えていくか、ただそれが難しいのは、ニーズが多様であること、そして時代の流れの中でニーズが変わっていく部分もあることです。いままでどおりの舞台の上で、やっていくことを求めている人もいるでしょうし、もっと対等な関係を求めている人もいます。後者が求めていることは、インフォームド・コンセント（註2）、セカンド・オピニオン（註3）などの概念が広まっていることから考えれば明らかなのですが、医療の側に対応する基盤が整っているかということ

疑わしい。

露木 「サービス業であるという視点」と言われましたが、例えば、大学の講義や臨床研修の場で、人と接する技術を習得する機会がないのは問題ですね。民間企業では、新人研修のときに、電話の応対の仕方から人と会話をするときの具体的な方法論を学ぶ機会があるのです。例えば、初対面で年配の人に「おじいちゃん」や「おばあちゃん」と話しかけるのは失礼なことですが、そういったことを学ぶ機会が医学部、歯学部にはなさすぎます。

菅井 患者の立場でいうと、インフォームド・コンセントが成り立つためには、患者側にきちんと情報が伝わっている必要があります。でも現実には、患者側が情報を得るチャンスは非常に少ない。例えば情報があっても、その善しあしを判定する基準もないわけです。私自身は現時点では、処方箋が情報源としては大きいと思っています。治療といっても、具体的にはほとんどの場合は処方箋という形で行われるわけですから、処方箋で出された薬の内容がわかればその医師が何をし

ようとしているかが見えてくるかもしれない。患者さんにもわかる薬の本がありますが、あの本の存在は大きいです。

高増 ただ、あの種類の本は能書という建前上、必要な情報だけが記載されている書類の抜粋でしかないのでは、という気もします。そのままいけば小児や妊婦には出せる薬がほとんどなくなってしまうすし、すぐまれの副作用までずらりと出ている。一方では、保険上認められている適応症以外の目的で薬を使う場合もよくあるけれど、そういった処方する側の考えまでわかるような患者さん向けの本はなかなかないんじゃないでしょうか。

菅井 それから病院の特徴やランクづけをした本も出回っていますね。私たちは病院についてはそういう情報や近所の評判を聞いて選ぶわけだけれど、現実にはその病院に行つて、どの医者が自分の担当になるのか、診察室に入るまでわからなかったりします。それに日によって担当医が違うこともある。このストレスは大変なものです。自分の体をゆだねる人がどんな人なのか、わからないのですよ。「かか

りつけ医（註4）を持つことが大事」といわれていますが、自分にとって信頼できるかかりつけ医に巡り会うということが実は非常に大変な作業です。

露木 病院のランクづけの本はだれがどういう基準で選んだかという問題がありますね。たいていは大学病院やセンター病院が上位に選ばれていますが、個々の患者がみんなそういうところにかかるべきかというところ、そうではないはずで、どこにかかればいいのか知りたいという期待と実際の中身とでは、かなり開きがありますね。

高増 私も個人的に近所の歯科医にかかって、いきなりどなられて大変な目にあったことがあります、どこの病院にかかればいいのかは、結局近所の評判が最大の情報源ですね。われわれは患者さんからよく「いいところを紹介してください」と言われることがあります、医療の側にしても実はよくわからないんですよ。それにいい、悪い以前に、相性が合う、合わない、といった部分もあります。ですから、ドクターショッピング（註5）という言葉は医療の側はよく悪い意味で

使いますが、私はある程度は相性の合う医師に巡り会うまでの作業としては仕方がないことだし、それがセカンド・オピニオンにもつながると思います。医療の側はそういうことに対して、もっと受け入れるというか、むしろ積極的に勧める側にいってもいい気がします。

露木 医療の側と患者さんの側に意識のずれが見られるということがよく指摘されますが、それは歯科の世界でも同じことがいえると感じています。問題は意識のずれをどう埋めていくかです。歯科医院を訪れる患者の多くは、「歯が痛くなった、痛い歯を治してほしい」という意識を持っていますが、われわれからすると、痛くなった歯はかなり症状が進んだ歯で、本来むし歯は痛くないうちに治療すべきなのです。ところが口腔内診査の結果、幸いにも痛くないむし歯を発見することができ、それを治療しようとする、げんげんな顔をされることもある。われわれとしては、その辺の意識のずれを埋めるために、しっかり説明する必要がありますが、きちんと説明しようとすればかなりの時間がかかります。歯科治療は処置

が中心ですから、もともと時間がかかるものなのです。詳しく説明する時間をどうやって捻出できるか、頭の痛い問題です。また「歯の一本くらい」と軽く考えている人が多いのに驚きます。そういう人たちに、一から説明するのは生半可なことではできません。

高増 それに丁寧の説明したい気持ちはあっても、その間待たせているたくさんの患者さんがいることも気になる。

露木 初診料、再診料は非常に安く設定されていますから、丁寧に説明しては経営上もやっつけていけなくなるのが現状です。

高増 世間では医師、歯科医師は儲けていると思われている節があるけれど、本来のわれわれの技術に対する報酬、すなわち診察料は極度に低く設定されていて、はじめにやっつけていけばいるほど報酬は少なく、かつかなりの重労働をしい込むこととなります。それに、例えば下積み新时期には看護婦さんよりも低賃金で雇われて、昼夜を問わず働いている。ひとくちに医師といってもいろいろな境遇に置

かかっているということは外からは見えにくいですよ。

チーム医療のキーワードはネットワーク

菅井 お二人の話を聞いていてあらためて感じたのですが、医師、歯科医師は、権限が大きく患者から求められている部分も大きい分、行うべき業務が過多になりがちなのではないでしょうか。一人の主治医となる医師が、身体的な治療のほかに精神的なケアもすることができればベストなのでしょうが、同時に保険上の制約も考えていけないといけない、カルテや診断書、紹介状などの書類も書かなければならない、他のスタッフのリーダーとしての役割もある、その上、学会活動や研究活動も抱えている。

高増 それに家庭内での役割ももちろんあります（笑）。人間一人にできることには限りがある。

菅井 ですから、役割分担が非常に重要となる。違う科の医師や、他の職種の人たちの連携が必要です。

露木 “チーム医療”というわけですね。

菅井 そうですね。それが有効に機能するためには、チーム内の個々の人たちがそれぞれ別の視点から意見を出し合う必要がありますが、しかし目的とするところの根本は一致していないといけない。でなければ、患者さんは「どの人の言うことが正しいのかわからない」ということになってしまいかねません。

高増 “セカンド・オピニオン”というときにも、本来はそういう一致点がないと患者さんは混乱しますね。

菅井 そしてチーム医療の中では、医師と患者さんの間をつなぐ、医学的な知識を持った職業が必要だと思います。カウンセラーみたいなものかもしれませんが、医師が病気の治療を最優先に行い、その職種の人が細かい医学的な情報の提供をしたり、精神的なケア、家庭や地域社会の中での問題の解決を探っていく。私は、例

えばいまの自分のように、医学部の中で大学院生として研究をした者が、将来そういう仕事をしていくということを考えているのです。

高増 現在の医療の中でいえば、そういった役割は臨床心理士やMSW（註6）が担うことになっていくのかもしれませんが、位置づけは違いますね。おもしろい発想だと思います。私自身は、キーワードは「ネットワーク」だと思っています。広い意味での目的が一致している別々の発想を持った人たちが、ネットワークを築いていき、連携をとりながら作業を進めていく、もちろん主治医はそれぞれの患者さんごとにいるのですが、そのネットワークの中で必要な情報をやりとりしながらベストな道を探っていく。そういういうことを行えるようなシステムをつくることです。

露木 私は医学、歯学の教育のあり方についても考えたいと思います。学生の間はカリキュラムが詰まっていて、社会を垣間見るようなアルバイトをする余裕もそんなにはない。卒業して大病院の中だけで働いている間も、「医師と患者の関係」に

ついで考える必要性があまりないように思います。なにしろ患者さんは医師個人ではなくて、病院の看板で集まってくるのです。そこで働く研修医は、医学的な知識、技術を学ぶことで精いっぱい、社会の中で生活している一人の人間としての患者さんの姿を見失いかねません。医師と患者の関係を考えるにつけ、社会人としての常識を学ぶ機会の必要性を感じます。例えば授業の一環として、福祉施設でボランティア活動をするなどを取り入れてはいかがでしょうか。それでは、この辺で終わりにしたいと思います。きょうはどうもありがとうございます。

一九九九年九月

註

(註1) placebo [英] 偽薬

(註2) informed consent [英] インフォームド・コンセントは、最近まで「説明と同意」と訳されていたが、その訳の不十分さは多くの見識者から指摘されてきた。一九九八年四月、「患者から医師への質問内容・方法に関する研究」研究班の「医者にかかる二箇条」に、インフォームド・コンセントは「医師による説明と、患者の理解・選択にもとづく同意」と訳されており、患者の自己決定権がその根本であるという意識が高まってきている。一九九七年の改正医療法では、「医師、歯科医師、薬剤師、看護婦（略）」は、医療を提供するに当り、適切な説明を行い、医療を受ける者の理解を得るよう努めなければならない」との条項が新設された。

〔参考文献〕読売新聞「医療の主人公はあなた」1998.4.4より。

(註3) second opinion [英] セカンド・オピニオンは、第二の意見と訳される。患者本人の医療情報を得る過程で診断を受けた医師と異なった医師の意見を求めること。セカンドオピニオンは、医療先進諸国では定着し、患者の医療処置の方針への参加の積極的な表現として「インフォームド・チョイス（情報を十分に得た上での選択）」という用語も一般化している。

〔参考文献〕『イミダス'98』（集英社）1998

（註4）family doctor〔英〕家庭医、ホームドクター、かかりつけ医、（家庭の）主治医。family dentist〔英〕かかりつけ歯科医。かかりつけ医・かかりつけ歯科医とは、患者の最も身近なところでいつでも健康相談や初期治療（プライマリケア）を受けられる医師・歯科医師のこと。

〔参考文献〕『社会保障体制の再構築に関する勧告』（総理府社会保障制度審議会事務局）1995.7.4

長田道昭『病院と病気の英語辞典』（南雲堂フェニックス）1994

（註5）doctorshopping〔和製英〕邦訳はせず、カタカナでこのままドクターショッピングという。同じ病気で、医師の紹介状なしに二人以上の医師に代えること。その特徴は、慢性疾患に罹患している人に多い。また自分の病気にとつてその診断と治療に疑問を有している。

〔参考文献〕三田俊夫『ドクターショッピング』『臨床精神医学25(7)』八四七—八四九。1996

（註6）medical social worker〔英〕医療ソーシャルワーカー

あとがき

この本を最後まで読んでいただきまして、ありがとうございます。

本書は、当初、私が「いつかまた横浜で」を本にしたいということから始まったのですが、この機会に私の友人諸兄の作品も同時に紹介しようということになり、オムニバス形式でそれらの作品も収められています。これによって充実した内容になったと自負しています。

「ダツカから」は杉山安德氏（文中では森山安彦君）が実際にダツカから私に送ってくれた手紙に手を加えたものです。「現代版 走れメロス」は同じ研究室の小児科医師、高増哲也氏の作品です。「小説 医者と患者の関係論」は研究室の大学院生、菅井敏行氏の作品です。また、「座談会 医者と患者の関係論」は私と高増哲也氏と菅井敏行氏の三人の雑談から発展したものです。

最後になりましたが、本書の出版にあたってお力添えをいただいた多くの方々に深く感謝申し上げます。また、私の無理な注文に快く応えてくれた医療タイムス社に謝意を表します。

二〇〇〇年春

露木 良治

著者紹介

露木 良治 (つゆき よしはる)

歯科医師。

1964年、静岡県生まれ。

静岡県立沼津東高校、明治大学経営学部卒業。

1990年、3年間勤務した三島信用金庫を退職し、松本歯科大学に入学。1996年、同大学を卒業し、横浜市立大学大学院医学研究科に入学。2000年3月、同大学院を修了、博士(医学)。

著者連絡先 E-mail fwkk8987@mb.infoweb.ne.jp

いつかまた横浜で

— 社会人から歯科医師を目指して —

付

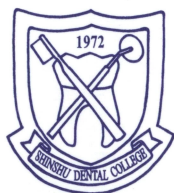
現代版 走れメロス
医者と患者の関係論

発行	2000年4月7日
著者	露木 良治
発行者	林 兼道
発行所	株式会社 医療タイムス社 〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-11-2 インペリアルビル 107 電話(03)3293-8721 振替 0570-8-12638
印刷	西沢印刷株式会社
製本	山和製本株式会社

© Yoshiharu Tsuyuki 2000 Printed in Japan

ISBN4-900933-05-8 C0095 ¥1238E

定価はカバーに表示してあります。落丁・乱丁本はお取り替えいたします。



いつかまた横浜で